

白きアーマードライダーと戦姫たちとの戦い

桐野 ユウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然として人類の前に現れたノイズ、人々を恐怖に追い込むんでいく。それを倒すことができるシンフォギア……だがもう一人その人物は現れる。

「変身」

【ソイヤール・メロンアームズ！天下御免！】

白きアーマードライダー、仮面ライダー斬月である。これは白きアーマードライダーと戦姫たちの戦いである。

目次

第一章 始まり

現れた白きアーマードライダー	1
貴虎とツヴァイウイング	5
ライブ会場の事件	9
ライブ会場の事件の真相	14
貴虎の一日	18
二課の基地へ	21
新たなゲームを作ろう	26
奏の決意	31
二年が経ち大きくなりました。	36
ようこそ二課へ	41
現れた謎の人物	45
完全聖遺物「デュランダル」を護衛せよ	49
斬月、戦い場所へ	52
貴虎とクリス	55
大量のノイズ	60
ここからは私たちのステージだ!!	67
事件解決後	72
クリスが家へ	76
二人が見たもの	81
研究所へ	84
新たなゲームを発売	87
第二章 新たな組織ファイネ	
新たな次元の始まり	89

廃病院へ	94
「浮気者!?!女性の正体!!」	98
秋桜祭り	102
ウエル博士野望	106
響の危機	111
未来、呉島コーポレーションへ	114
新たなアーマードライダー	119
浮上をした巨大なもの	122
事態は最悪な状況	127
戦いの疲れ	131
別荘へ	133
ばれた	137
第三章 新たなノイズの出現、斬月新たな姿へ	
現れた謎のノイズ	140
極ロツクシード	144
発電所を守れ!	146
激闘キャロル!	150
プロジェクトドールズの進歩	153
襲撃を受ける貴虎	156
キャロル出撃!追撃せよ装者達!!	159
第四章 クウガブレイズ	
謎の敵現る	163
現れしクウガブレイズ!	166

第一章 始まり

現れた白きアーマードライダー

ノイズ、人類を脅かす認定特異災害……空間から突然として現れ人間のみを大群で襲撃、触れた人間を自分もろとも炭素の塊に転換させる力を持っている。

一定時間を過ぎれば自壊をする。通常の兵器はノイズには効かないが対抗ができるものがある。

それは聖遺物の欠片より作られた異端技術「FG式回天特機装束・シンフォギア」である。

特異災害対策機動部二課、シンフォギア装者を所持をしている組織で二人の人物がシンフォギアを纏っている。

アメノハバキリを纏う人物青い髪をした女性「風鳴 翼」とガングニールを纏うオレンジの髪をした女性「天羽 奏」はノイズが現れたと聞いて現場へ急行をしている中通信先の本部から声が飛んでくる。

『ノイズの数が急激に低下!』

「な!？」

「あたしたち以外の装者なのか!？」

『いやフォニックゲイン反応はない……急いで現場へ急行をしてくれ!』

「了解」

「だが一体誰が……」

二人は現場の方へと急行をしてシンフォギアを纏うために聖詠を歌う。

「Croitzal ronzell Gungnir zizz
l」

「Imyuteus amenohabakiritron」

二人はギアを纏い現場に到着をするとノイズ相手に白いボディに緑色の鎧を纏い左手に大型の盾、右手に剣を構えた侍のような戦士がノイズ相手に切って倒している。二人は驚いているが奏は違和感を

感じていた。

(あいつの剣の太刀筋・・・どこかで見たような・・・)
奏では白い戦士の太刀筋がどこかで見たような気がしたが今は戦いに集中をするためにアームドギアの槍を出してノイズに突撃をして突き刺した。

翼もアームドギアの太刀でノイズを切っていく。白い戦士は腰部のドライバーのブレードを一回だけ倒す。

「ソイヤー・メロンスカッシュユ！」

音声と共に右手に持っている剣にエネルギーが纏われて回転をしてノイズ達を切り裂いて撃破した。

三人の戦士たちの活躍でノイズは撃破されて白い戦士は持っている剣を腰部にセットをして歩こうとしたが翼は持っているアームドギアを向けている。

「まってもらおう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたは何者でそれはどこで手に入れたのか話してもらおうか？」

「おい翼・・・・・・・・」

「奏では黙っていて、さあ答えてもらおう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白い戦士は先ほどしまった武器を取りだして武器の後ろ側のレバーを引いて構えたのを見て翼はアームドギアを構えて攻撃をしようとしたが先に白い戦士が地面に発砲をして煙が発生をして二人は目くらましを受けてしまう。

「くー！」

翼は回転させて煙を払わせるがすでに白い戦士は姿を消しており二人は辺りを見るがノイズも出てこないのでギアを解除をする。奏は両手を組み先ほどの白い戦士の太刀筋が自分が見た誰かに似ているなど・・・・・・・・

「どうしたの奏？」

「あ、いや・・・・・・・・なんでもないぜ翼」

二人は迎えの車に乗りこんで本部の方へと帰還をする中その様子

を見ている人物がいた先ほどの白い戦士は腰に装着をしているのを閉じてから外す。

【ロックオフ】

変身が解除をして黒い背広を着た人物が二人が去った方角を見た後黒い車が到着をして扉を開けて中へと入る。

「貴虎坊ちやまお疲れ様でした。」

「ああじいもな……あれがシンフォギア……か。」

じいが運転をする車に乗りながら家の方角へと帰る人物、先ほどの白い戦士に変身をしていた人物名前は呉島 貴虎である。

車がデツキの中へと入り貴虎は降りて家の方へと上がる。

「お兄ちゃんお帰りー」

「兄さんお帰りなさい。」

「ああ帰ったぞミサキにミュ」

青い髪をポニテールにした人物呉島 ミサキと銀色の髪を伸ばしている呉島 ミユの二人が迎えてくれて彼はバックの中からゲームを出すとミュが目を光らせる。

「そ、それって!!」

「ああ我が呉島コーポレーションが出したゲーム「マイティアクションX」のゲームだ。その第一商品でもある。」

「おーーー!!」

ミュは目を光らせてやってもいいと目で訴えているのを見て貴虎は苦笑いをしながら口を開く。

「宿題が済んでいるのならやってもいいぞ?」

「よっしゃー! やったるでええええええええええ!!」

ミュはリビングの方へと走っていくのを見て二人は苦笑いをしながら部屋に移動をした。

貴虎 side

やれやれミュはゲームが好きだなーと思いながら私がこの世界に生まれて20年が経った。現在呉島コーポレーションは私が二代目社長を務めており父が残していた会社を大きくしている。

遺産などはたくさんあったのでこうして呉島コーポレーションを

しながら仮面ライダー斬月に変身をしてノイズと戦っている。

まあ原作を知っている身としてはこっそりとアメリカに行った際にネフィリムが暴れていたのを見て斬月に変身をして撃破をして日本へと帰ったが……あの子達は元気に過ごしているのだろうか？

転生特典として斬月とロックシードをもらったが……ゴーグルデンリンゴロックシードや極アームズのロックシードまでであるとは思ってもいなかったよ。斬月の極アームズって……まあ今のところはメロンで交戦をしても撃破できるので安心できるが……斬月・真の方は使ったのはまた別のところで使った以来だな。ゲネシスドライバーなどの調整も自分でしているし戦極凌馬がしたようなシステムが搭載されている。

私はパソコンを開いているとミサキが覗いてくる。

「新しいゲームの作成？」

「ああ、今はマイティアアクションXと爆走バイク、タドルクエストとバンバンシューティングが売れているからね。今度はどのようなゲームか考えているところだ。」

「そうなんだ……どれどれ？」

あのーミサキさん？なんで胸を押し付けてくるのでしょうか？血は繋がっていないですけどさ……貴虎兄さん冷静なふりをしてパソコンを見ているふりなんですよ？やれやれ……いずれにしても明日も仕事だから寝るとしよう。

貴虎とツヴァイウイング

次の日、貴虎は呉島コーポレーションへと出勤をして会社の中へと入る。

「「おはようございます社長ー！」」

「おはよう」

次々に挨拶をする社員に対して貴虎は挨拶を返してから社長室へ行くと秘書の朱月 藤果が待つており彼は椅子に座ると彼女はすぐに今日の仕事の内容を説明をする。

「社長、今日の予定ですが……」

「……ふむ、会社も流れに乗ってきたな……」

「はいマイティアクションX、タドルクエスト、バンバンシューティング、爆走バイクは順調に売れております流石社長ですね。」

「よしてくれ、私一人だけの力じゃないさ。皆がいたからこそこの結果が出ている感謝をしている。」

「社長……そういえば思いましたのですが……」

「どうした？」

「先ほど社長の幼馴染が来たから会わせてくれという人物がおりましたがいかがでしょうか？」

「私の幼馴染……そういうことか、仕方がない社長室に通してやってくれ。」

「よろしいのですか？」

「いつものことだ。」

「わかりました。」

藤果もわかっているので苦笑いをしながら彼女たちを呼びに部屋を出ていったあとに彼は立ちあがり紅茶を入れて待つていると扉が開いてオレンジの髪をした人物が入ってきて手を振る。

「よう貴ちゃんー！」

「よう……ではない奏、毎回言っているが私が仕事をしようとする時間帯に来るのはやめてくれと言っているじゃないか。」

「いいじゃねーかよーあたしは貴ちゃんに会いたかったからよ。」

「全く、そこに座って紅茶でも飲んでいてくれ。」

「はいよ」

貴虎に言われて奏は椅子に座り彼が入れてくれた紅茶を飲みながら貴虎の仕事をしている姿をじーっと見ている。彼は電話をして指示を出したりするのを見ている。

それから数十分経ち貴虎は休憩をして座っていると奏の電話がなったので彼女は出てから何か慌てているので彼はもしかしてノイズが現れたのかなと思いつつ奏が立ちあがり貴虎に謝る。

「悪い貴ちゃん！ちよつと用事ができちまったからよじゃあ！」

そういつて奏は社長室を後にした後藤果が入ってきたので貴虎は話しかける。

「出たのだな？」

「はい社長」

「そうか……なら行ってくる」

「お気をつけて」

貴虎は戦極ドライバーを腰部に装着をしてからメロンロックシールドを出して解除させる。

【メロン】

戦極ドライバーにメロンロックシールドがセットされてブレードを倒す。

【ロックオン！ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！】

仮面ライダー斬月メロンアームズへと変身をして社長室から飛び降りる前に違うロックシードを出して窓から投げると変形をしてタンドライナーへと変わり彼は乗りこんで現場の方へと急行をする。

一方で現場では翼が先に到着をしてアメノハバキリを纏いノイズと交戦をしている。

「はあああああああ!!」

脚部のブレードが展開されて逆さまになり回転蹴りを放ちノイズを次々に切っていく。そこに遅れて奏が到着をしてアームドギアの槍を使い突き刺した。

「悪い遅れた！」

「遅いよ奏！」

「ああここから行くぜ!!」

二人は連携をしてノイズを倒していく、すると上空からノイズが攻撃をしてこようとしたがビームが放たれてノイズが撃破された。彼女達は上を見ると斬月がタンデライナーから降りたち無双セイバーとメロンデイフェンダーを構えていた。

「また貴様か！」

「……………」

斬月は高速で移動をしてノイズに対して無双セイバーを振るい撃破していく。ノイズは斬月に攻撃をしようとしたが先に無双セイバーのレバーを引いてトリガーを引くと弾が放たれてノイズ達は貫通をしていく。

彼は無双セイバーを腰部に戻してメロンロックシールドを閉じて別のロックシールドを出す。

「バナナ」

「なんだ？」

メロンロックシールドをバナナロックシールドへと変えてセットをする。

「ロックオン！ソイヤ！バナナアームズ！ナイトオブスパーク！」

「バナナ!?!」

「はああああああああ!?!」

二人は斬月がバナナをかぶると鎧へと変わり右手にバナスパークが装備されて彼はバナスパークをノイズを突きさして撃破をしていく。

一気にけりをつけるためにブレードを三回倒す。

「ソイヤ！バナナスパークキング！」

バナスパークを地面に突き刺すとバナナ状のエネルギーがノイズを貫いていき撃破していく。やがてノイズが全滅をすると斬月は終わったと思いきや戻るとした。翼が再びギアを向けているので斬月はバナスパークを構え直す。

「今度こそ連れて行かせてもらおうぞ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

【ソイヤ！バナナスカッシュ！】

バナスピアーにエネルギーが纏われてそれを突きだして翼はアームドギアでガードをして吹き飛ばされてしまう。奏はアームドギアを構えようとしたが・・・・・・・・斬月は奏に戦意がないと思いその場を去っていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさか、あの戦士は・・・・・・・・そんなはずがない。」

「うう・・・・・・・・」

「翼、大丈夫か？」

「奏、あいつは？」

「悪い逃げられてしまった。」

「そう・・・・・・・・いったい奴は何者なんだ？」

「さあな（悪い翼、あいつの正体は・・・・・・・・貴ちゃんだとあたしは思っている。だからこれはあたしの心の中で隠すつもりだ。）」

奏は斬月の正体が呉島 貴虎じゃないかって思ってしまった。一方で変身を解除をした貴虎は会社の方へと戻り仕事に取りかかるのであった。

ライブ会場の事件

それから数日が経った呉島コーポレーションの社長室、相変わらず天羽 奏は貴虎のところに来ており暇なのかなと彼は思いながらも話を聞いていると彼女は胸のところから何かをとりだした。

「待て奏」

「なんだ？」

「なんでそこから出したんだ？」

「細かいところは気にするなよ貴ちゃん。これはあたしたちツヴァイウイングが大きなライブをするんだよ。そのチケットだよ」

「いいの？」

「いいんだよ。あたしの歌を貴ちゃんに聞いてほしいからよ。」

彼はライブチケットを受け取ると日にちなどを確認をしてその日の仕事をすべてキャンセルにして朱果にもライブに行くことを伝えて貴虎は懐に戦極ドライバーとロックシードを数個ほど持つていくことにした。

ライブ当日、貴虎は車で現場まで来ると変装をしてライブチケットを出して中へと入る。彼は前世を含めて初めてのライブコンサートになるのでどうなのか楽しみにしながら自分の席の方へと移動をする。

(さて原作始まる前だからな、本来は奏はここで死んでしまう。だがそんなことを私がさせるわけないだろう？……だがそれは彼女達に正体を明かすことになってしまうが……仕方がない。念のためにボディガード達に変装をしてこのライブ会場へと入って私の合図で扉などを開けるように指示をしている。)

貴虎はそう呟きながら家を出る前に妹たちがツヴァイウイングのライブコンサートに行くことになったのを羨ましそうに見ていたのを思いだして笑う。

時間となりツヴァイウイングの二人が出てくると周りのファンが盛り上がりつつあるのを見て二人は人気者だなと貴虎は心の中で思いながらライブの熱狂に圧倒をされてしまうが彼女の歌を聞いている

と奏はちらつと貴虎がいる場所を見てからウインクをしたので彼はドキツとなつてしまう。

やがて曲がクライマックスにさしかかろうとしたとき………事件が起きた。

「の、ノイズだああああああああああ!!」

「!!」

現れたノイズに人々は恐怖に扉の方へと逃げようとする。貴虎はそれに気づいて合図を出すと扉が一齐に破壊されてそこから避難をするように指示を出している。彼は後を任せてステージの方を見るとツヴァイウイングの二人はギアを纏いノイズに攻撃をしている姿を見る。

彼は懐から戦極ドライバーを装着をして二人がいる方角へと歩いていく。

奏 side

くそ!こんな時にノイズが出てくるなんてよ。あたしはガンダニールを纏いながらアームドギアを振るっているがLINKERをしていないからギアがいつも以上に調子が悪い………翼の方もノイズの数に圧倒されている。

ん?何かが動いている気が………ちい!逃げ遅れたのか!あたしは急いで走りギアを回すが欠けて彼女に刺さつてしまう。

「おい!目を開けろ!死ぬな!目を開けてくれ!生きるのをあきらめるな!!」

あたしは必死に声をかけて彼女は無事なのを確認すると立ちあがりすつとアームドギアを構える。そうあたしは絶唱を使おうと構えている。

「奏、駄目!今のあなたが絶唱を使ったら!!」

「こんなにもさ聞いてくれる奴らがいるんだ。なら聞かせてやろうじゃないか「いやその歌は待つてもらおうか?」え?」

あたしは目を見開いた。いや翼の方も同じように目を開いている。なんでだよ………どうしてここにいるんだよ。

「貴………ちゃん。」

「奏、後は私に任せてもらおう。」

「貴虎兄上、何を言って……そのベルトはあの謎の鎧の武者がつけているもの、どうして？」

「……お前達の前に現れてノイズと戦っていたのは……」

【メロン】

「私だ。変身」

【ロックオン！ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！】

貴ちゃんは私達の前で白い武者のような姿になった。やっぱり貴ちゃんだった……あたしは涙を流してしまう。

「……後は任せろ」

貴ちゃんはそう言って走りだして腰につけている武器を抜いてノイズに切りかかる。あたしは……見ているだけしかできなかった。

奏 side 終了

「はあああああ!!」

斬月に変身をした貴虎は無双セイバーを振るいノイズを切り裂いていく。だがいつも以上の数の多さに彼は押されており戦極ドライバーのプレードを一回倒す。

【ソイヤ！メロンスカッシュ！】

左手に持っている盾のメロンデイフェンダーを投げつけてノイズ達を次々に撃破していく。彼はメロンロックシールドを閉じて別のロックシールドを出した。

【ブドウ！】

メロンロックシールドを外してブドウロックシールドに付け替えてプレードを倒す。

【ソイヤ！ブドウアームズ！龍・砲！ハッハッハ！】

ブドウのアーマーがメロンが消失をして変わりに装着されて仮面ライダー斬月ブドウアームズへと変わり左手にブドウ龍砲が装備されて右手に無双セイバー、左手にブドウ龍砲を構えてノイズに攻撃を続けていく。

翼は奏のところへと行くが彼女は目を見開いたまま斬月の姿を見

て涙を流している。

「あたしは……情けないよ。」

「奏……」

「家族の敵をとるためにガングニールを纏ったのに、今のあたしは何だよ……貴ちゃんが戦っているのに何もできない。あたしは……あたしは!!」

「奏、一人で抱えないで……今は貴虎兄上を見るしかできない。」

「はああああああ!!」

「ソイヤ!ブドウスパークینگ!」

ブドウ龍砲にエネルギーが込められて放たれた弾丸がドラゴンのように飛んでいきノイズを倒していき斬月はノイズがいなくなったのを確認をして無双セイバーを腰にセットをしてから二人の方へと歩いていく。

「大丈夫か?」

「……貴ちゃん、ずっと戦っていたのか?」

「ああ……」

「あたしたちのことを知っていないから?」

「そうだ。お前達の前に現れていたのは俺だ。」

「……あたしは情けないよ。貴ちゃんが戦っているのをあの時正体を知っていたんだ。貴ちゃんじゃないかって……あの太刀筋、翼と模擬戦をしている時に見たことがあるのを……信じたくなかった。」

奏の言葉を聞きながら斬月事貴虎はブドウロックシードを閉じて変身を解除をする。

【ロックオフ】

「今はあの子を病院へと運ぶ必要がある。」

「貴虎さま!」

「平田、あの子を病院へと運んでやってくれ。」

「は!!」

平田と呼ばれた男性は倒れている少女を病院へと運んで行く、二人はギアを解除をして奏と翼は貴虎を自分たちのことを話す為に疲れ

ている体のため後日になった。

ライブ会場の事件の真相

ライブ会場の事件から数日後呉島コーポレーションの社長室、貴虎は新しいゲームを考えているがどうしようかなーと考えていると朱果が入ってきたので何事かと首をかしげる。

「社長、お客様でございます。」

「私にか？」

「はい風鳴 弦十郎と名乗ればわかると言われてましていかがしますか？」

「わかった社長室に通すように、それと私がいいと言うまで社長室に誰も来させないようにしてくれ。」

「わかりました。」

朱果が去った後、彼はソファの方へと移動をして待つっていると扉を叩く音が聞こえたので声を出して扉が開いて弦十郎、翼、奏の三人が現れたので貴虎はソファに座るようにいい三人は座り貴虎は立ちあがり紅茶を入れて三人に出す。

「どうぞ。」

「すまない貴虎君……さて久しぶりだね貴虎君。」

「父と母の葬儀以来になりますね。」

「ああ……貴虎君、君が変身をしているシステムなどを教えてくれないか？」

「それは構いませんがそちらの方も教えてもらいますよ？」

「ああそのために俺が来た。本当だったら了子君に来てもらいたかったが……今は二人のギアの修理などで忙しいからな。」

貴虎は懐から戦極ドライバーとロックシードを置いて三人は見ている。

「これが俺が変身に使う戦極ドライバーとロックシードです。」

「戦極ドライバー……」

「ロックシード……」

「私の変身をするアーマードライダー斬月、それがあなたたちの前に現れた俺ですね。」

「斬月……」

「……」

「なぜノイズを倒せるのかそれは私にもわかりません。ですがこれは父と母が残したものですから。」

「そうだったのか……」

それから今度は二課の方からシンフォオギアシステム、ノイズについての説明を貴虎はメモを取っていた。

そして弦十郎は苦い顔をしながら彼に声をかける。

「貴虎君……お願いがある。」

「旦那!!」

「私達に協力をしてくれないか?」

「……といえますと?」

「ご覧の通りシンフォオギア装者は翼と奏しかいない。しかも彼女達は普段はアイドルなどをしている。」

「……なるほど」

「あたしは反対だ! 貴ちゃんを巻きこむなんてあたしには!!」

「奏……」

「弦十郎さん、その話受けましょう。」

「貴ちゃん!!」

「ありがとう貴虎君、これが通信機だ」

「承知した。」

そういつて弦十郎達は去っていく中、奏だけは残っていたので貴虎は自分の椅子の方へと戻る。

「なんで引き上げたんだよ……貴ちゃんが戦う必要なんて」

「……だが目の前であのような惨状を見るのは嫌だからな、少しでもノイズから人々を助けることができるなら喜んで私は戦うさ。」

「……貴ちゃんらしいよ。」

奏も帰ることとなり貴虎は仕事を終えて自分の家の方へと車に乗りこんで移動をする。

「……じい少しだけ眠る。家についたら起こしてくれ。」

「わかりました坊ちやま」

貴虎は目を閉じて仕事疲れなのかと思っていたが斬月として戦っていることもあり疲れがたまっていた。じいは少し遠めの方を通り家へと帰ると貴虎を起こして彼は目を開けて家の方へと帰る。

「お兄ちゃんお帰り!!」

「兄さん疲れていますか？今日は私が料理を作りましたが食べますか？」

「ああミサキが作ったのなら喜んで食べよう。その前に着替えてくる。」

貴虎はスーツから私服へと着替えてミュがバンバンシューティングのゲームをしているのを見て楽しんでいるなーと椅子に座り彼女はポーズボタンを押して椅子へと座る。

「「いただきます」」

三人でご飯を食べながら貴虎は次のゲームのことを考えていた。次に売るのならゲキトツロボツツ、トレミファビートかな？と思いなから食べているとミサキが考え事をしているので貴虎は聞いた。

「どうしたミサキ？」

「いえ実はこの間のライブ会場の時のことを思いだしまして………すごい惨状でしたが死亡者が0つてのがすごいなーと思ひまして。」

「そうだな。（すまないミサキ、私のボディガード達に頼んで避難誘導をしてもらったんだよな。私も戦っているし）」

貴虎はあの時のライブ会場の事件のことも聞いておりネフシユタンの鎧と呼ばれる完全聖遺物の起動実験をしていたがトラブルが発生してノイズが大量に発生。結果ネフシユタンの鎧は盗まれたと聞いているので何者なのだろうと思っていたが貴虎は前世の記憶で櫻井 了子事フィーネがしたのだなと思ったが証拠などがないので聞いたですることができない。

ご飯を食べた後貴虎はゲネシスドライバーを出して調整をしている。今のところは使用をしていないがいずれ使う可能性が出てくるのでいつも懐に戦極ドライバーと共に入れている。

「いずれにしても斬月・真を使う可能性はあるな。戦極 凌馬が使用

をしているゲネシスドライバーのような形だけどカスタマイズって
言った方がいいな。斬月の方もカチドキアームズと極アーム
ズ……いずれは使う戦いが始まるな。明日は社長としての仕
事はお休みだからな。朱果にも休めと言われてしまったから
な……そんなに働いているのか？」

貴虎はそう思いながらも眠ることにした。

貴虎の一日

貴虎 side

二課との連携をとることとなったがミサキやミュウが学校に行っている間、本来だったら私は仕事をしていないと行けないのだが……秘書の朱果達に休んでくださいと怒られてしまったのだが？

私はそんなに休んでいないものだろうか？

「はい貴虎ぼっちゃま、ぼっちゃまはお父上から引き継いでから休んだという記憶がじいにはございません。朱果さま達もあなたが倒れないか心配をしておりますぞ。」

じいにまで言われてしまい、私は家でのおんびりをすることにしたのだが……ネフシユタンの鎧を盗んだ櫻井 了子……何が何かをしようとしているのは間違いないのだが……何をしようとしているのかがまるでモヤがかかっているかのようになっておりおそらくネタバレなどを阻止するための処置なのだろう。

社長の仕事を休んだとはいえ、暇な時間何をしようか決まっていな。私って事後と人間だったのだな？とりあえずソファに座りながらじいが入れたコーヒを飲んでおり新しいゲームを考えていた。

次はどのようなゲームをしようと考えている。すると通信機が鳴ったので私は出る。

「もしもし」

『貴虎君休暇をしているところすまない。実はノイズが現れて……まだ二人のギアは治っていないんだ。』

「承知した。私が出よう。」

私は戦極ドライバーを出してメロンロックシードを出して戦極ドライバーにセットをして斬月へと変身をする。

【ロックオン！ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！】

私はサクラハリケーンのロックシードを解除をして変形をしたので乗りこんでアクセルを吹かせて現場の方へと急行をする。

貴虎 side 終了

ノイズは現れては人間を襲おうとしていた。そこに弾丸が放たれ

てサクラハリケーンに搭乗をする斬月が現れて体当たりをしてノイズを引き倒す。

「逃げる」

「うああああああああああ!!」

斬月はサクラハリケーンを元のロックビークルへと戻して懐へとしまい無双セイバーを構えてノイズに向かって走っていく。

ノイズ達は斬月に気づいて攻撃をしようとしたが斬月は一瞬だけ高速移動をしてノイズの後ろへと立っており彼は剣をふるうとノイズ達は切られて爆散をする。あの一瞬の高速移動で斬月はノイズを次々に切っていたのだ。

彼は振り返りノイズの数が多いことに気づいて別のロックシールドを出す。

【ドリアン！】

メロンロックシールドを外してドリアンロックシールドを装着をする。

【ロックオン！】

カッティングブレードを倒してロックシールドが開いた。

【ドリアンアームズ！ミスター！デンジャラス！】

両手にドリノコが現れて彼は構える。

「いくわよー！ーじゃなかったごほん！いくぞ!!」

一瞬だけオネエのような動きをしたが冷静になりそのままドリノコを構えて攻撃をしていく。メロンデイフェンダーがないので防御はできないが二刀流のドリノコの攻撃はノイズを次々に倒していき彼はカッティングブレードを三回倒す。

【ソイヤードリアンスパーキング！】

頭部状の後ろ部分にエネルギーが込められて彼はそれを振りまわしてノイズ達に当てて撃破した。

「数が多いな……」

ドリノコを構え直して走りだして振り下ろしてノイズを次々に倒していきカッティングブレードを二回倒す。

【ソイヤードリアンオーレ！】

ドリノコにエネルギーが込められてそれを連続した光弾を放ちノ

イズを次々に当てていき撃破していく。

「これで終わりだ!!」

最後の一体にドリノコを投げつけて撃破をして彼はサクラハリケーンを出して現場を後にする。

その様子をカメラを使い見ている人物がいた。櫻井 了子である。彼女の目は金色に光っており斬月がノイズと戦っている姿である。

メロンアームズ以外にも彼の姿はオレンジ、パイン、イチゴ、キウイ、マンゴーなど様々な武器を使ってノイズと戦っている姿である。

「仮面ライダー斬月、なぜノイズを倒せるのかは不明だが……まあい、私の計画の邪魔になるなら排除をするだけ。ふっふっふっふ誰にも私の計画の邪魔はさせないさ。」

素晴らしいコーヒーを飲むが……

「苦い……」

であったとき。

二課の基地へ

斬月として戦いながら社長としても仕事をしている呉島 貴虎、次の日に貴虎は社長室で仕事をしていると朱果が入ってきたので彼は何があつたのだろうかと声をかける。

「どうした朱果?」

「社長、お客様でございます。」

「お客?今日は誰か来るのか聞いていたか?」

「弦十郎さんです。」

「わかった通してくれ」

「わかりました。」

貴虎はソファの方へと移動をすると弦十郎ともう一人の青年が来ていたので彼は二人を座らせる。

「弦十郎さん……それと?」

「始めまして緒川 慎二といいます。」

「呉島 貴虎です。」

「貴虎君、君に私たちの基地へと来てほしいんだ。」

チラツと朱果の方を見て彼女は手帳を見てからOKサインを出したので彼は立ちあがり行く準備をして二人についていく。

彼は黒い車に乗せられてどこかへと連れていかれるが目隠しなどがされておらず彼は移動をする車の窓から見えてきた景色を見て驚いている。

「リディアン学園……まさか地下に作っているのか?」

それから車が止まり貴虎は降りて共に移動をして地下へと降りて扉が開いて司令室へと到着をする。

「貴ちゃん!?!」

「奏……元氣そうでよかったよ。」

「あ、ああ……だけどなんで貴ちゃんが?」

「弦十郎さんに連れてこられたんだよ。この二課の基地にね。」

「そ、そうか……」

奏はあまり嬉しそうじゃないので貴虎自身は弦十郎と話をしよう

とした時に白衣を着た人物が扉を開けて入ってきた。

「あら新しい子かしら？」

「呉島 貴虎といます。」

「呉島？もしかして呉島コーポレーションの？」

「その通りです。あなたは？」

「私の名前は櫻井 了子よー（呉島 貴虎、まさか奴がここに来るとはな．．．．．思ってもいなかったがな。まあいい．．．．．）」

了子はまさか呉島 貴虎がここに来るとは思ってもいなかったので心の中で笑いながら握手をする。

その後学校が終わった翼が合流をして彼らは斬月の力を知るためにシユミレーション室へと行き彼は戦極ドライバーを腰に装着をして相手を待っているとな奏が GANG ニールを纏いたっている。

「．．．．．貴ちゃんと戦うことになるなんてな。」

「だがこれは模擬戦だ。槍ならこれで行かせてもらおう。」

「マツボックリ！ロックオン！」

「変身」

【ソイヤ！マツボックリアームズ！一撃インザシャドウ！】

仮面ライダー斬月マツボックリアームズを装着をして専用アームドウェポン「影松」と呼ばれる槍が装備されて奏も GANG ニールの槍を構えて走りだしてつきだしてきた。

「うおおおおおおおおお！！」

突きだしてきた槍を斬月は冷静にはじかせていく。奏は自身の槍が貴虎に冷静にはじかれているのを見て呟いた。

（流石貴ちゃんだ。あたしの攻撃を冷静にはじかせている。こりやああたしじゃ勝てないのは当たり前って感じになってしまうよ。けどあたしも GANG ニール装着だ！一発だけでも当ててやる!!）

奏は一度離れるとアームドギアが回転をして斬月も必殺技が来るのかとカッティングブレードを三回倒す。

【ソイヤ！マツボックリスパーキング！】

飛びあがりマツボックリのエネルギーが纏われて突撃をして奏が放つ技と激突をする！お互いの技が激突したが奏は吹き飛ばされる

が斬月は着地をしており結果は斬月の勝ちで終わる。

「く・・・貴ちゃんに負けてしまったか。」

「なかなかいい攻撃だったぞ奏」

そういつて彼女を起こした後変身を解除をして奏の方もギアを解除をする。一方で了子の方はシンフォギアシステムとは違うアーマードライダーシステムの力を見て心の中で笑っていた。

（素晴らしい！シンフォギアシステムとは違い誰でも使えるその力！絶対に手にしてみせるぞ！呉島 貴虎!!）

櫻井 了子は心の中でアーマードライダーシステムを手に入れることが第一になっており彼女はふふふふと笑いながらモニターを見ていると貴虎の次の相手が現れたみたいなので別のロックシードを構えている。

「貴虎兄上・・・次は私が相手をしましょう！」

「翼か、いいだろう。」

「おいおい貴ちゃん、あんたあたしと戦ったのに？」

「大丈夫だ。」

【オレンジ！ロックオン！】

「変身」

【ソイヤ！オレンジアームズ！花道！オンステージ！】

今度はオレンジのアーマーが斬月の頭に振ってきて展開されて仮面ライダー斬月オレンジアームズに変身をして右手に大橙丸が現れてそれを左手に持ち帰ると無双セイバーを構えて二刀流の構えをする。

「二刀流・・・」

「ここからは私のステージだ!!」

斬月は走りだして二刀流の剣を振り下ろす。翼はアームドギアの剣で斬月が放たれる剣を受け止めたりするが二刀流の斬撃に翼は不利だと判断をして蹴りを噛ませると同時にブレードが展開されて斬月は驚いてしまうが冷静に後ろへと下がり無双セイバーのレバーを引っ張り弾が放たれる。

翼は剣を構えると空間からエネルギーの剣が発生をして斬月に対

あまりのおかしさに斬月はお腹を抱えたまま笑ってしまっている
のであった。

一方で研究室に戻った了子は先ほどの戦いのモニターを見ている。
彼女はふふふふと笑いながら翼と奏と激突をする斬月が映し出さ
れた。

「やはりシンフォギアシステムとは違い歌を歌わないから力が減った
りすることがない。だがその形態はそれぞれの武装はあのロック
シードと呼ばれるものを装着をしないと発揮ができないってこと
か。．．．．．やっぱり砂糖とミルクを入れたほうが．．．．．」
了子はコーヒーに砂糖とミルクを入れて混ぜて飲んでみた
が．．．．．

「．．．．．逆に甘すぎるわ。どういのがベストマッチかしら？」
了子はそう思いながらコーヒーを飲まないといけないなと思いな
がら．．．．．モニターを見るのであった。

新たなゲームを作ろう

「さて会議を始めようか」

呉島コーポレーションの会議室、二課の基地から数日後貴虎は新しいゲームを作るために主な偉い人の人物たちを集めて新たなゲームを制作をするためにどのようなゲームがいいのかを考えるために集めたのである。

「君たちのおかげでマイティアアクションXなどを始め四つのソフトは売り上げが上がっている。これも皆のおかげでもある感謝をする。」

「そんな社長顔を上げてください。」

「そうですよ！新しいゲームも考えて皆さんに遊んでもらえるように頑張りますよ！」

「そうだな。」

そこから会議が行われるがなかなか新たなゲームの内容などが決まらずに今回の会議は解散となり貴虎は仕事を終えて家へと帰宅をする。

「ただいま」

「おかえりお兄ちゃん!!」

「おっとミュ」

義妹の呉島 ミュが走ってきて抱き付いてきたので彼は驚いてしまいがすぐに彼女が甘えているのを見てからゆっくろと降りしてからリビングの方へと一緒に行くとミサキが調理をしていたので今日もミサキだなどと思い見ている。

「ミュ、また兄さんに抱き付いているわね？」

「だってミュはお兄ちゃんのこと大好きだもーん!!」

「やれやれ……」

ミサキは諦めながらも自分も貴虎のことが好きだから貴虎の方を見ており彼女は料理を作った後に机に並べて全員が座つたのを確認をしてご飯を食べる。

「ふむミサキが作ってくれる料理は美味しいな。」

「うふふふありがとう兄さん……ねえ兄さん疲れている？」

「なんでそう思うんだ？」

「いや兄さんは顔を出さないけど義兄妹だから？」

「恐ろしい気がするけど気のせいだと信じたい。」

貴虎は自分の義妹ながら二人が最初にこの家にやってきたときのことを思いだす。あれは貴虎がまだ中学生の頃父と母がミサキとミユを連れて帰ってきたときは驚いてしまう。

「貴虎喜べ！お前の妹たちだ!!」

「……え？」

「もうあなた、貴虎にはまだ説明をしていないでしょ？」

「そうだった悪い悪い」

貴虎は妹たちはボロボロで捨てられていたところを父が拾い彼女たちを捨てた親を……色々としてから抹消をしたそうであり。貴虎は父が恐ろしいなと思ったが彼女たちを見て納得をする。

そこから貴虎は勉強の合間に彼女達と遊んだり宿題を教えたりして過ごしているうちに二人は心が開いた。

だが貴虎の父と母が事故で亡くなった後は貴虎は社長として着任をして今に呉島コーポレーションへと成長をさせていく。

(本当父さんと母さんには感謝をしている。だが亡くなったとは思えないのは気のせいだろうか?)

貴虎はあの父と母がそう簡単に亡くなるとは思ってもいない。秘密にしていることだが……実は棺の中身は空っぽで貴虎自身は両手を組み妹たちには隠している。

現在弦十郎にお願いをして搜索をしているがああ親は何をしているのだろうか?と思いつつ今日も一日疲れてお風呂に入る。

「はぁ……いい湯だな。」

貴虎はお風呂に入っていると扉が開いたので何事かと見ているとミサキが入ってきたので驚いている。

「み、ミサキ!？」

「湯加減はいかがですか？」

「な、何やっているんだ!?はやく上がりなさい！」

「いいじゃないですか兄妹なんですから。」

貴虎はミサキの体を見ないようになっている。ミサキの胸の大きさは翼以上の大きさなどで彼はなぜか体を洗ってもらっていた。

「どうですか兄さん？」

「ああ大丈夫だ。」

「……………それにしても兄さんは鍛えていますね。」

「社長として……………お前達の兄として恥ずかしくないように体は鍛えているんだ。」

「ふふふそんな兄さんも好きですよ？」

「ありがとう……………」

お互いにお風呂に浸かり気持ちがいいなと思いつつながら貴虎はミユも最近一緒にお風呂に入ろうとしたが断っている、姉妹とも胸などが成長をしておりこの間まで子どもだって思っていたが成長をしているなど……………貴虎は感じながら上がることにした。

ミサキも一緒に上がり彼女の髪をドライヤーなどで乾かしている。

「すみません兄さん……………」

「気にするな。お前の髪は黒い髪だが長いな……………」

「ふふ母さんも生きていた時に褒めてもらって……………何より兄さんに褒めてもらったときが嬉しかったですよ。」

「そうか？なら大事にしないと。」

「もちのロンです」

パジャマに着替えてからお互いに別れて貴虎は自室へと戻り机の上に戦極ドライバーとゲネシスドライバーを置いてからベットの中心へと入り眠りにつこうとした。だが突然としてスマホがなったので誰かと思いついて見ていると天羽 奏出っていたので彼は眠い目をこすりながら通話に出る。

「もしもし……………」

『悪い貴ちゃん寝ようとしていた？』

「ああ、だがお前の電話だから出た。それでどうしたんだ？」

『貴ちゃんの声が聞きたくて……………駄目だった？』

「いや明日はお休みだったから丁度いいさ」

『本当か!？』

「ああ、秘書たちから仕事のやり過ぎと怒られてな、週二日は休んでくれと言われてな（笑）」

『そうだよな、ごめん貴ちゃん……あたしたちがすっかりしていれば貴ちゃんが戦うことなんてなかったのに……』

「いずれは戦うことになっていたからな。それに奏、お前はライブ会場で俺の正体を知っているかのように言っていたな。いつ頃から気づいていた?」

『最初は嘘だと思っていた。でもあの太刀筋に見覚えがあったから私は貴ちゃんだと思ったんだよ。』

「斬月の時に見せていたからな、だがそれでよくわかったものだ。」

『ふふーん伊達に貴ちゃんの幼馴染を名乗ってないぜ（……）』

貴虎は電話の向こうで奏がどや顔をしている感じがしたがそのまま話をしてからそろそろ眠くなったので彼は電話を切ることにした。

「すまない奏、眠くなってきたから寝るよ」

『ああ悪かった。その貴ちゃん……』

「なんだ?」

『何でもないまた明日』

「ああ……」

電話を切り貴虎は眠ることにした。

奏 side

「……はあ……」

あたしはため息をつきながら貴ちゃんと通話をした後だが、言えなかった。なんであたしがギアを纏ってノイズと戦っているのかを言えなかった。

家族をノイズに殺されてあたしは復讐のためにギアを纏うため辛いことを乗り越えてきた。だがあの日ツヴァイウイングとしてテレビに出てある社長がゲストとして来るのを聞かされていた。そしてその社長を見て目を見開いてしまう。

あっちもあたしに気づいてお互いに声をかけてしまう。

「貴ちゃん!?!（奏!?!）」

それがあたしの再会だったよな?そしてその時に白い鎧武

者……貴ちゃんが変身をする仮面ライダー斬月が現れたんだよな。

シンフォギアじゃないのにノイズを倒すあいつは何者だろうか？とあたしは思っていた。

確信をしたのは貴ちゃんのところに行つたときに翼と模擬戦をした際に見た貴ちゃんの太刀筋があつた斬月が使用をしていたのと同じだった。だからあたしはおっさんや翼などには言えずに自分の心の中で留めていた。

あのライブ会場で貴ちゃんが変身をしたのを見てあたしは今も無力だと思つてしまうことに……

「貴ちゃん……貴ちゃん貴ちゃん貴ちゃん貴ちゃん……」

あー貴ちゃん……」

あー貴ちゃんに抱き付きたい。貴ちゃんとキスをしたい……貴ちゃんの……貴ちゃん。

奏side終了

奏の決意

次の日貴虎は奏からメールが来ていたので場所なども添付されているので彼は変装用のメガネなどをつけてその場所へと私服で向かう。一応彼自身も有名人でもあるので変装をしないと街を歩くことができない。

貴虎は時計を見ながらその場所に到着をしたが奏の姿が見えない。彼は辺りを見ているとメールが来た。

『あたし天羽 奏、後少しで着くぜ』

「なぜメリーさん?」

貴虎は首をかしげるとまたメールが来たので見ると

『あたし天羽 奏、今あなたの後ろにいるの!!』

「!!」

彼は振り返ると変装をしてにししと笑っている奏がいたが……彼はそのまま脳天にチョップを繰り出す。

「あたし!」

「なぜ普通に来ない。てかなぜメリーさん!」

「いいじゃねーかよ。そういうユーモアが必要だろ?」

「だろ? じゃない……そういういたずらをするところは変わらないな。」

「にしししほら行こうぜ?」

「だな。」

二人は歩きながら貴虎はなぜ奏は今日誘ったのだろうか?と首をかしげている。自分が休みの日を聞いてきたときは驚いたが今になって話すことがあったのだろうか?と……奏の方は何かを決意をしているのか拳を握りしめている。

やがて人があまりいないようなところへと来てから彼女はつけているメガネなどを外した。

「……なあ貴ちゃん、あたしがなんでギアを纏っているのか教えようと思つてな。」

「……」

「長野の遺跡であたしはノイズを父さん、母さん……そして妹を殺された。あたしは家族に守られて一人だけ生き残っちまった。そこからだ……あたしは力を求めるために二課へと行き今の GANG ニールを手に入れるために L i N K R E を体に注入をしてこうしてノイズに復讐をしようと戦ってきた。」

「そういえば長野遺跡事件を貴虎は新聞で見たことがあったがそこで奏は家族を失ったのだなと無言で話を聞いていた。」

「そしてあたしは翼と共にツヴァイウイングを結成をして今もこうして歌を歌っている。けどな……」

すると奏は貴虎に抱き付いてきた。突然のことだったので貴虎は混乱をしてしまう。

「なんで……なんで貴ちゃんが戦う必要があるんだよ……貴ちゃんがなんで？」

「奏……」

「貴ちゃんには守らないと行けないものが多い、なのにどうして斬月になって戦っているの？あたしはそれを見ているのが辛いんだよ。貴ちゃんがいつ亡くなってしまふのが怖いんだよ……あたしは家族を失った。けれどまだ貴ちゃんや翼達がいるからだ。でもそれで貴ちゃんがいなくなったら……あたしは……あたしは……あたしは……」

奏は今の自分の思いを貴虎に伝えた。彼には戦ってほしくないのが彼女の本心だ。だが……

「奏、私はそれでも戦う。それは命令をされているから戦うんじゃない。自分の意思でこの戦いに参戦をしたからだ。」

「でも！「約束しよう」え？」

「私は……俺は死なない。絶対にだ。」

「……あーもう！貴ちゃんは一度言ったら曲げない頑固者だからな。まったくあたしの意味ないじゃねーか……だけど必ず死なないこといいな？」

「わかっているさ。」

そういつてお互いに指きりをした。

「指切りげんまん、嘘をついたらガングニールの槍で突き刺すぞ指切った」

「……………約束破ったら私は死ぬのだな。」

とんでもない約束をしてしまったなと貴虎は思ったが奏は笑顔なのを見て可愛い奴だなと思ってお互いに手を振った後に別れて彼は家の方へと帰ることにした。

家へと帰った貴虎は椅子に座り極ロックシードをちらつと見ている。これを使ったら自分が人間ではなくなってしまうじゃないかという恐怖を感じている。

だがいつか極アームズの力が必要になる時が来る。その時までには新月などで頑張ると……………すると通信機が鳴ったので彼は出る。

「呉島です。」

『すまない俺だ。ノイズが現れて現在翼が現場に向かっている。奏の方はまだLINKERのこともあるからな。』

「承知した。」

通信を切り彼は立ちあがりじい理由を言ってから外へと出てサクラハリケーンを出して乗りこんで現場の方へと急行をする。

一方で翼はアメノハバキリを纏いアームドギアを使いノイズを倒しているがやはり一人のため数が多いのでノイズは次々に翼に攻撃をしてくる。

「くー！」

するとバイクが現れて彼は降りるとサクラハリケーンが元のロックシードへと戻り彼の手に戻る。

「貴虎兄上!!」

「大丈夫か翼、ここからは私も参戦をするぞ。」

彼は戦極ドライバーを装着をしてメロンロックシードじゃないロックシードを出した。

「メロンじゃありませんね?」

「ああ……………」

「ウオーターメロン!ロックオン!」

「変身」

「ソイヤ！ウオーターメロンアームズ!!乱れ玉、バババン！」

いつもと違う姿になったので翼は驚いているが貴虎は事斬月は気にせず左手のウオーターメロンガトリングを構えて発砲をしてノイズ達を次々に貫通させて撃破していく。

「翼、私が援護をする。お前はその隙について切りかかれ！」

「はい！」

斬月はウオーターメロンガトリングを発砲をして撃破すると翼が油断をしているノイズに対して大剣状態にしたアームドギアから放たれた蒼ノ一閃が命中をしてノイズ達を次々に撃破していく。

「これで決める！」

「ソイヤ！ウオーターメロンスカッシュ！」

斬月は飛びあがり必殺の無刃キックが放たれてノイズ達を次々に貫通をして撃破した。

「お見事です兄上。」

「お前もな？さて帰るがお前はどうかやって帰る？」

「……………」

翼が気まずい様子だったのを見て斬月はじっと向いている方角を見るとおそらく現場についたがそのままノイズに突撃させて爆発させた翼のバイクの残骸を見たのを見て彼はため息をつく。

「いくらバイクに乗れるとはいえ高いのだぞ？」

「す、すみません……………」

「仕方がない私のバイクを一つやろう。」

「よろしいのですか!？」

「ああほらローズアタッカーだ。これをお前にやる。お前がギアを纏って降りてもロックシードに戻ってお前の手元に戻るようになってくるから安心してくれ。」

「も、申し訳ありません兄上。」

「お前は変わらずその呼び方だな（笑）」

「いつもこの呼び方をしてしまっていますから。」

「そうだったな。」

斬月はロックシードを閉じてから変身を解除をして懐へとしまう。

そしてお互いにサクラハリケーンとローズアタッカーを出して家へと帰るのであった。

二年が経ち大きくなりました。

貴虎 side

それから二年が経ち、我が呉島コーポレーションはさらに大きくなりアイドルユニットの事務所もやることになった。

私は呉島コーポレーション及びアイドルプロダクションの社長として活動をしているのだがその間に仮面ライダーとしてノイズと戦っている日々を過ごしている。

今回私はアイドル達の様子を見に行くと言われている人物がいた。プロジェクトドルズというアイドルグループの一人呉島 ミサキ……そう私の妹である。

ミサキとミュの二人はこのアイドルグループに入っておりメンバー同士の仲はよく、私もなぜかそこにお邪魔をすることがある。

とりあえず妹が頑張っているのでスポーツドリンクを買いに行き休んでいるところに入る。

「お疲れ様だな。」

「に……じゃなかった社長ありがとうございます。」

「今は二人きりだ普通に兄妹としていいぞ？」

「すみません兄さん。」

「だがお前がアイドルになるとは思ってもいなかったが、ミュもそうだが……てかミュに関しては全然いつもと違うから驚いているぞ」

「あれはミュなりの行動ですよ？普段の時は私達という時と一緒にですよ？」

「なるほどな。さて私は行くとしよう」

「すみません。」

「じゃあ頑張れよ？」

「はい!!」

立ち去った後時期的などを見て原作の時が近づいているなど思い私は事務所を後にして戦極ドライバーを装着をして変身をする。

「変身」

「ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！」

仮面ライダー斬月へと変身をしてサクラハリケーンに搭乗をして移動をする。

貴虎side終了

一方で二課では奏や翼は基地で待機をしていた。オペレーターの朔也とあおいは突然として大きな反応が出たので急いで確認をしている。

「一体何だ!!」

「強大なフォニックゲイン反応です!!」

「いったいなんだ!!」

そしてモニターに映し出されたのは「ガングニール」と書かれていた。

「ガングニールだと!」

「んな馬鹿な!!あたしのはここにあるんだぞ!!」

「さらに現場に接近をする者がいます!」

「貴虎君か!!」

「く!!」

「私達も出動をします!!」

翼と奏も斬月の反応を聞くとすぐに現場の方へと急行をする。弦十郎は貴虎に連絡を取り場所を伝えて斬月はサクラハリケーンのスロットルを吹かせて現場へと行く。

一方でその反応があった場所ではオレンジのような髪をした女の子が自分に装着されたのに驚いている。

彼女は女の子を守るために死ぬことをあきらめるなどという言葉思いだして聖詠が聞こえてきて歌うとそれがアーマーのようになりガングニールが装着されたのだ。

「なにこれええええええええええええ!!」

「お姉ちゃんかっこいい!!」

「えへへへそうかな?」

だがノイズはそんなことを許さずに彼女たちを襲おうとしたとき光弾が飛んできて一台のバイクが彼女たちの前に止まり降り立つ。

彼はちらつと少女たちを見た後に右手に装備をしている無双セイバーを構えて突撃をして現れたノイズに対して切り刻んでいく。

「す、すごい（でもあのどこかで……そうだ！あの二年前のライブの時に助けてくれた白い人!!）」

彼女は斬月を見て二年前のあのライブ会場で戦う白い武者のした人物がノイズと戦っている姿を見ていた。わずかに残っていた意識の中で……一方で斬月は戦いながらも彼女のを見ていた。

（あれは立花 響、そうか……もうその時期まで来ていたのかな？）

貴虎は斬月の姿のままノイズを切っていくと彼の上空から槍がたくさん降ってきたので彼はふつと笑う。

「来たか。」

聖詠の歌が聞こえて二人は着地をして女の子をかばっている子は叫ぶ。

「え!?!翼さんに奏さん!?!」

「な!?!」

「二人とも話は後だ。まずはノイズを叩く!」

斬月はメロンロックシールドを閉じて別のロックシールドをセットをする。

「イチゴ!ロックオン!」

上部に穴が開いてイチゴのようなものが現れて斬月はセットをしてカッティングブレードを倒す。

「ソイヤ!イチゴアームズ!シユシユつとスパーク!」

仮面ライダー斬月イチゴアームズへと変身をして奏は驚いている。

「メロンの次はイチゴ!」

イチゴクナイを構えて斬月は連続で投げて爆発させるとそのまま無双セイバーに戦極ドライバーから外したイチゴロックシールドをセットをする。

「何をするんだ貴ちゃん?」

「一、十、百、千、イチゴチャージ!!」

「まあ見せおけはああああああああ!!」

無双セイバーを前につきだすと剣からイチゴクナイ型のエネルギーギーが飛んで行きノイズ達に命中をして爆発させる。

「私の千ノ落涙のような技ですね。」

「奏、槍を前につきだしてくれ。」

「こうか?」

「ああ」

斬月はそのまま飛びあがり奏の槍の上に乗る彼女の上に投げように指示を出す。

「あーもう知らねーぞ!!おらああああああああ!!」

上空へと投げられた斬月はイチゴロツクシールドを外して違うロツクシールドを出す。

【ドングリ! ロツクオン! ソイヤ! ドングリアームズ! ネバーギープアップ! ソイヤ! ドングリスカツシュ!!】

「であああああああ!!」

ドンカチに蹴りを入れてエネルギーギーが込められたドンカチはそのままノイズ達がいる場所へと墜落をして爆散させる。斬月の方はそのまま再び落下をして着地をするが……

ぐきー!

「足首をくじきました!!」

「ええええええええ……」

「つてまああんな高さから降りたらそうなるわ。」

斬月は右足首を押させており奏と翼は苦笑いをしながらノイズがいなくなつたのを見てから翼は落ちたドンカチを拾ってきた。

「案外軽かったわこれ」

「そりゃあ誰でも今のお前たちでも使えるからな。おととととと」

「つて貴ちゃんうわ!!」

斬月はドンカチを受け取ろうとしたがバランスを崩して奏を巻きこんでしまい。

むにゅ

「ん?」

斬月は何か大きなものをつかんでいる気がしてさらにむにゅむ

にゆと揉んでいる。

「ひゃん！」

「……………」

貴虎は仮面の奥で冷汗を書きながら上の方を見ると顔を真っ赤にしている奏の姿だ。そして自分が奏のその大きな胸を触っていることに気づいた。

「す、すまない。」

「い、いいよ。タカチャンニナラネ」

奏ではそういう胸を抑えながらもビンタなどをせずに行ったのでお互いに気まずい状態になっているがそこに二課の面々が到着をして色々と手続きなどをしてしている中斬月はドングリロックシードを閉じて変身を解除する。

「うえ!?あなたは!?!」

響は斬月の変身をした人物を見て驚いている。なにせ彼は自分が遊んでいるソフトを作り出した人物でもあるからだ。

「呉島 貴虎だ。まあ名前は聞いたことがあるか。」

「はい! 呉島 貴虎といえばあの呉島コーポレーションの社長でさらにはツヴァイウイングにも負けないアイドルグループ「プロジェクトドールズ」の所属をするプロダクションの社長を務めているって有名ですよ!!」

「そ、そうか……………(そこまで有名になっていたのか私は……………)」

貴虎はそう思いながらも響が手錠をされたのを見て納得をしていた。

ようこそ二課へ

現在貴虎たちは二課が用意をした車に乗りこんで二課があるリディアン学園の方へと戻っていく中貴虎と奏はお互いに顔を赤くしながらちらつと見ては横を向いてしまう。まあなにせ貴虎はラツキースケベが発動をして奏の翼よりも大きな胸を触ってしまったからである。

もう一度言おう。翼よりも大きな胸を持つ奏の胸を触ってしまったからである。

「……………」

「どうした翼？上の方を見て」

「……………気のせいだろうか、デイスられた気がする。」

「気のせいだろ？」

奏はそういいながら自分の胸を見ていた。先ほどの斬月の姿だったが自分の好きな人に触ってもらったことに……………

(事故とはいえ貴ちゃんがあたしの胸をぐへへへへへへへへ)

貴虎はちらつと見てから奏は見せられない顔をしていたのでハリセンを出して彼女の頭を思いっきりどついた。

「ぐおおおお……………」

「……………」

「何するんだよ貴ちゃん!!」

「何ってお前、世間じゃ見せられない顔をしていたぞ。」

「まじで？」

「ああだからこそ私がハリセンで叩いたんだ。」

「どこから出したの？」

「企業秘密だ。」

そういつて出したハリセンをどこかにしまつて車はリディアン学園に到着をして響は驚いている。

「え!?!なんでリディアン学園に!?!」

「まあ行けばわかるさ。」

そして車から降りて連れていかれてさらにエレベーターなどに乗

りこんで地下の方へと移動をする。そして扉が開かれた瞬間クラツカーなどがなり驚いてしまう。

「二」ようこそ特異災害機動二課へ「二」

貴虎と奏は苦笑いをして翼はため息をついており響自身は何がどうなっているのか頭が混乱をしていた。まあこんなやり方なので仕方がないと思いつつも響がなぜ GANG ニールを纏うことができたのかは次の日に紹介されることとなり今日は解散となる。

貴虎は家の方へと帰り明日は仕事などで二課の方へは行けないなと思いつつ響が明日は説明を受けるのだなと思いつつ仕事の確認をしてベットに寝ることにした。

次の日

「ふああああ．．．．．」

「おはようございます坊ちやま。」

「おはようじい、ミユとミサキは？」

「二人とも今日は学校なので行きましたよ？」

「まあ今日はドールズとしての仕事はお休みだからな。さて私は会社の方へと行くでしょう。」

「送りますよ坊ちやま」

「ありがとうじい」

じいに運転を任せて貴虎は車に乗りこんで会社がある場所へと行く。会社に到着後貴虎は中へと入り社員たちは頭を下げる。

「二」おはようございます貴虎社長!!「二」

「おはよう諸君、今日も頑張ろう!!」

「二」はい!!「二」

社長室へ行き今日の仕事の内容などを確認をする貴虎、プロダクションの方もあり彼は二重の仕事をしているがもう一つの方は朱果に主に頼んでおり彼女も承諾をしているので現在は呉島コーポレーションとしての仕事を優先をしている。

「さて新しく販売をしたゲキトツロボッツ、ドレミファビートも商品として上がっているな．．．．．まあ最後は私がプレイをして確認をした後に商品化って感じだからな。今回のはバクなどもないだろ

う。」

貴虎は次に発売をする予定のジェットコンバット、ギリギリチャンバラのゲームの発売の準備をしていく。

彼は書類などを確認をしていると通信が入ってきたので出る。

「私だ」

『貴虎君すまない、実はノイズが現れて奏と翼が出動をしたのだが……響君も出てしまった!!』

「わかった。すぐに出る。」

貴虎は書類を片付けた後に窓を開けてダンテライナーを出して戦極ドライバーを装着をしてメロンを出したが今回はしまって別のロックシードを出す。

「レモン！」

「変身。」

【ロックオン！ソイヤ！レモンアームズ！インクレディブル・リョーマ！】

レモンアームズを装備をした斬月はダンテライナーに乗りこんでから窓を閉めて出動をする。

一方で現場では奏と翼がアームドギアを使いノイズを倒していくとそこに響まで来たので二人は驚いてしまう。

「おいおいお前」

「私も戦います!!」

「あのね……って話をしている場合じゃないわね。」

すると上空から光弾が放たれて何事かと見ていると音声が届いてくる。

【ソイヤ！レモンスパークング!!】

「であああああああああ!!」

上空から斬月がレモンレイピアを構えて落下をして地面に突き刺すとエネルギーが発生をしてノイズ達を吹き飛ばしていく。三人は衝撃に備えて着地をした人物斬月は辺りを見ながらノイズが斬月に襲い掛かろうとしたが無双セイバーとレモンレイピアの二刀流でノイズを次々に切っていく。一瞬で動いてノイズ達は次々に切り裂か

れて行くのを見てシンフォギアシステムとアーマードライダーシステムは違うのだなと思いつつ斬月は腰のカツティングブレードを二回倒す。

「ソイヤァー！レモンオーレ！」

「はあああああああああ!!！」

二刀流の刃の刀身にエネルギーが込められて回転をして切り裂く。やがてノイズがいなくなり斬月は変身を解除をして仕事の服だったので響は手をあげる。

「はい貴虎さん！もしかして仕事をしていたのですか!?!」

「……………まあな、これでも社長として新しいゲームを作っているところだ。」

「もしかしてジェットコンバットとキリギリチャンバラですか!?!」

「えらい知っているね。ああそのとおりだ。」

「ふふーん私、呉島コーポレーションが出たゲームは買っているんですよ!!！」

「もしかしてだが、全国ランキングにあるHHBは君か……………」

「うわーそこまで知られていましたか（笑）」

響は照れながらいるのを見て奏は？

「……………」

「か、奏?」

黒いオーラを纏いながらいるので翼は恐ろしいなど思いながら見ている。

「なんだ翼?」

「いや何でもない。」

話をした後には貴虎はダンテライナーに乗りこんで会社の方へと戻るのであった。

現れた謎の人物

貴虎 side

やあ諸君呉島 貴虎だ。響ちゃんが仲間になつてから私が鍛えたり弦十郎さんに鍛えてもらつたりするなど響ちゃんは色々パワーアップをしている気がする。

うん貴虎兄さん悪く無いOK? って私は誰に言っているのだろうか? ある日のこと今日は流星群が見えるはずなのだが……いやーノイズが現れたと聞いて私は斬月に変身、今回はキウイアームズへと変わり持っているキウイ撃輪を振りまわしてノイズを倒していく。

案外使いやすいんだよねこれ……メロンディフェンダーのようにガードをしたりそうそうこんな風に鞭など……鞭? なぜこれがいきなり出てきた? 正直に言えば驚くことばかりなんだけど?

「嘘……なんで?」

ん? なんか向こうの子は私の姿を見て驚いているとノイズを殴りながら響ちゃんがやってきた。

「あ、師匠!! ってあの子は?」

「わからない気を付けるんだ響。」

「やつと来たようだな。私の狙いはお前だ!!」

彼女は装備をしている鞭で響ちゃんを狙ってきたが私はカッティングブレードを一回倒してエネルギーを込めたキウイ撃輪を構える。

【ソイヤー! キウイスカッシュ!】

「は!!」

放たれた鞭を切り裂いてついでに周りにいたノイズに対して投げつけて撃破してからキャッチをする。

「お待たせ貴ちゃん!!」

「あ、あれは!!」

二人も到着をして彼女が着ているものを見て驚いている。あれ? 私もあれはどこかで見たような気がするのだが……うーんな

んだっけ？

「とりあえず」

「リンゴ！ロックオン！ソイヤ！リンゴアームズ！デザイア・フォビ
ドウン・フルーツ！」

リンゴアームズへと変わり左手にアップルリフレクターとその中
にソードブリンガーが装備されたアームズへと変わる。言っておく
が転生したものでちゃんとしたものである。

貴虎 side 終了

全員が合流をして斬月もリンゴアームズへと変わると相手は右手
に何かを持つとノイズ達が現れて襲い掛かってきた。

「三人ともノイズの相手は任せるぞ？」

「兄上……まさか!？」

「あの者の相手は俺がする。」

「何言っているんだここはあたしたちが！」

「任せろ」

斬月はソードブリンガーを抜いて突撃をしていく。奏たちも援護
をしようとしたがノイズ達が邪魔をして先に進むことができない。

「くそ！貴ちゃん!!」

「奏、立花！今はノイズを先に叩く！」

「はい!!」

一方で相手は鞭にエネルギーを込めて光輪を飛ばしてきたが斬月
はそれを左手のアップルデイフェンダーでふさいだ。

（やはりメロンアームズと同じやり方だから使いやすいなこ
れ……）

貴虎はリンゴアームズがメロンアームズと同じやり方で戦えるの
で使いやすいなと思いつながら相手の方を見ているがどこかで見たよ
うな気がした。

相手の方は自分の攻撃をふさがれたのを驚いているが何よりもそ
の人物を見て目を見開いているからだ。

「なんで……どうしてフィーネはそんなことを言っていなかつ
たのに……」

「……………」

斬月は近づいて彼女の目の前に現れる。相手の方もいきなり斬月が目の前に現れたので驚いているが斬月の方は彼女を見て驚いていない。

「君は……………いやそんなはずはない。だがなぜ？」

「お、覚えているのか？」

「ああ南米の方で捕虜にされていた子だろ？覚えているさ……………」
彼女は自分のことを覚えてくれていている斬月を見て嬉しくなったのか鞭を使い彼をグルグル巻きにした。

「え？」

「フフフフフフフ」

貴虎自身今どうなっているのか不思議に思っていた。なにせ自分がグルグル巻きにされており自分をどこかへ連れて行こうとされているのでどうしたらいいのかと思っていると槍が飛んできて自身を捕まえていた鞭が解放されたので斬月は後ろの方を見ると黒いオーラを纏った奏が立っていた。

「テメエ、貴チャンノドコへ連れて行コウトシテイタンダ？」

「か、奏……………さん？」

「か、奏？」

二人は初めて見る奏の姿に怯えており相手の方も目から光が消えた状態で睨んでいた。

「アア？ナンダテメエ……………私ノ王子様ノ何？」

「王子様ダア？」

お互いにならみ合っており翼と響は貴虎の方へと移動をする。

「た、貴虎兄上……………か、奏がいつも以上に怖い……………」

「貴虎さん……………」

「二人とも今の二人に刺激を与えたりするような事はするなよ？フラグじゃないからな？」

貴虎自身も二人から放たれるオーラに怯えておりどうすればいいのだろうかと思いついて見ていると相手の方は舌打ちをして地面に鞭を叩いて煙幕を作り撤退をする。斬月の方も戦いが終わったかと思いついて

身を解除をする。

奏たちもギアを解除をして響は先ほどの敵が着ていたのを聞いた。

「あのーあの人が着ていたものって。」

「あれは完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」二年前のライブの時に起動実験を行った際に行方不明になったものだ。それがまさか敵として現れるとはな……」

「ふむそのようなものがライブの時に行っていたのだな……」

貴虎は両手を組みなるほどなど思いならあれはネフシユタンの鎧で間違いないかと空を見ていると流星群が見えたので空を見るように言う。

「うわーっってあああああああ!! 未来との約束うううううううう

うううううう!!」

「仕方があるまい。」

「だな」

「うんうん」

こうして四人は夜空を見上げて流星群を見るのであった。

完全聖遺物「デュランダル」を護衛せよ

貴虎 side

さて原作では完全聖遺物「デュランダル」を護衛をする任務が始まるうとしている。本来だったら協力者の私にも声がかけられるはずなのだが……おそらく社長としてのこともあり呼ばなかったのだろう。

だがそんなの貴虎さんにはあんまり関係ないのよね。このスパイカメラで様子を見ているから……さて私は立ちあがり戦極ドライバーを……ではなくゲネシスドライバーを装着をして別の形態になるとしよう。

「メロンエナジーロックオン」

「変身」

「ソーダ……メロンエナジーアームズ」

斬月・真に変身をしてサクラハリケーンを出して私は現場の方へと急行をする。スパイカメラからの映像をスキャンをしているため現在どういうやり取りされているのかわかる。

響ちゃんと奏が了子さんが乗るトラックの周りで交戦をしている。とりあえず急いだほうがいいな。

貴虎 side 終了

一方で完全聖遺物「デュランダル」を護衛をしていた二課、突然としてノイズが現れて翼がローズアタッカーから飛び降りてギアを装備をしてノイズを切り裂いてトラックは移動をする。

奏はアームドギアの槍を振りまわしてノイズを近づけないようしているが、響は了子の周りで襲い掛かろうとするノイズを殴っている。だが数が多いのか苦戦をしてしまう。

「くそ！数が多すぎる！」

「うわー！」

「響……このままじゃ!!」

翼も片付けてこちらに向かっているがさらにネフシユタンの鎧を着た人物まで現れる。奏はどうしたらいいと考えていると響の周り

にいたノイズ達が消えていくので何事かと見ていると上空から何か
が着地をして弓を構えて放ち撃破した。

全員が突然として現れた謎の戦士にネフシユタンの鎧は持っている
杖からノイズを発生させて襲わせる。

「……………」

【ロックオンメロンエナジースカッシュユ!】

頭部状から光が発生をして斬月・真達が現れてそのままノイズを
持っている武器ソニックアローで切っていく。そのまま本物の斬月・
真はソニックアローを引いて光の矢が放たれて撃破していく。

「なんだあれ……………」

ベルトのメロンエナジーロックシールドを外してソニックアローに
セットをして構える。

【ロックオン】

エネルギーが充電されて行き斬月・真は放つ。

【メロンエナジー!!】

放たれた緑色の矢がノイズ達を次々に貫通させていきネフシユタ
ンの鎧を着た人物は目を見開いていると何かが浮いている感じがし
たので斬月・真も振り返るとデュランダルが浮いていたので驚いて
る。

「今だ!!」

ネフシユタンの鎧は斬月・真の肩を踏みそのままデュランダルをつ
かもうとしたが先に響が飛びあがってデュランダルをつかんだ。だ
が彼女自身が黒いのに纏われて行くのを見て斬月・真は腰のゲネシス
ドライバーのシツコルを二回押す。

【メロンエナジースパークキング!】

ソニックアローにエネルギーが込められて振られたデュランダル
を相殺をするために放つ。ぶつかったエネルギー同士が激しい衝撃
波を発生させてネフシユタンの鎧と奏たちを吹き飛ばしていく。

「うわああああああああああああ!!」

地面にデュランダルが突き刺さり、翼が到着をする。彼女は何かの
衝撃がこの辺の地面が削れており見ると奏たちが倒れておりデュラ

ンダルが地面に突き刺さっている。

そして斬月・真が立っているのを見て翼はアームドギアを構えようとしたが先に斬月・真の方がゲネシスドライバーを外して貴虎だったので驚いてしまう。

「貴虎兄上……いつもと違うベルトでしたから……」
「ああその通りだ。こっちはゲネシスドライバーで変身をした斬月・真という姿だからな。まさかデュランダルの力が予想をしていた以上の力を持っているとはな。」

貴虎はボロボロになってしまった地面を見てデュランダルの力に斬月・真でここまでしか相殺をすることでなんとか阻止をすることができたがいずれにしても完全聖遺物「デュランダル」護衛任務は失敗に終わり貴虎は座ったので翼は近づく。

「大丈夫ですか？」
「ああすまない、どうやら右手が痺れてしまったようだ……心配ない。」

貴虎は右手を抑えたのを見て翼は近寄り彼の手を握るが貴虎はすぐに右手を動かしてみたので大丈夫そうだったので気にしないことにした。

二課の完全聖遺物「デュランダル」護衛任務は失敗に終わりデュランダルは二課で再び保存されることになった。

一方で了子はデュランダルが起動をしたことに喜んでいたが斬月に別の姿があったことに驚いているが今はデュランダルが完全に起動をしたことに喜びを示す。

斬月、戦い場所へ

完全聖遺物「デュランダル」の護衛から数日が経った。貴虎は現れたノイズと戦いながら二課の面々と共に戦う。

ある日の夕方、貴虎は次の新商品のことを考えながら街を歩いている。

（ふーむ次のジュージューバーガーは育成ゲームにした方がいいのだろうか？その前にジェットコンバットとキリギリチャンバラの方が先に売るからな。）

彼は歩きながらジュージューバーガーのことを考えていると音が聞こえてきたので何事かと思いいていると自分の前にネフシユタンの鎧を着た人物が吹き飛ばされてきたので何事かと思いいていると前からガングニールを纏った響が現れたので彼はそういうことかと判断をしてネフシユタンの鎧を着た人物は貴虎を見て目を見開いている。

「!!」

「き、君は……………」

「貴虎さん!!」

「貴虎……………兄ちゃん?」

お互いに貴虎という単語を聞いてネフシユタンの鎧を着た人物は目をさらに見開いておりお互いに別の場所へと移動をするのを見て貴虎は戦極ドライバーを腰に装着をしてロックシードを構える。

「メロン」

「変身」

「ロックオン！ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！」

斬月へと変身をして彼は響達が行った方角へとメロンデイフェンダーを構えながら向かっていくとガトリングの弾が飛んできたので彼はメロンデイフェンダーでガードをする。

「く!!」

突然の攻撃だったので斬月は驚いているとネフシユタンの鎧を着た人物が赤いアーマーを装着しており斬月はその姿を見て声を出

してしまおう。

「クリス？お前は雪音 クリスなのか？」

「貴虎兄ちゃん……貴虎兄ちゃんなの!？」

「ああそうだ……私は呉島 貴虎だ。」

お互いに構えているとノイズが現れたので斬月は無双セイバーを抜いてクリスに襲い掛かろうとしたノイズを切り裂いた。

（ああ貴虎兄ちゃん。兄ちゃんは変わっていなかった。変わったのは……あたしだ……くそ！こんな姿……貴虎兄ちゃんと再会をしたくなかった!!）

クリスは心の中で呟いていると上空から巨大な剣が降ってきた。しかも斬月が当たるギリギリの場所に刺さっていたので彼自身仮面の奥で冷汗を書いていた。

（あぶねええええええええ!!あと後ろに下がっていたら私死んでいたよ!?)

「つーばーさーさー少しあたしと話をしようじゃねーか？」

「か、奏!?!お願いだから今はノイズを!!」

「ノイズとか関係ないし……さあ翼OHANASIをしようじゃないか。」

「ひいひいひいひい!!」

奏の目からハイライトが消えており彼女は翼を連れて森の奥の方へと消えていく。その様子を三人は見ているしかなかった。

「た、貴虎さん……翼さん大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろう……たぶん。さて」

斬月は無双セイバーのトリガーを引き弾丸が木に当たる。二人はなぜ木に撃つたのだらうと思いついていた。

「そこに隠れているのはわかってる。いい加減出てきたらどうだ？」

「流石仮面ライダー斬月……と言った方がいいだろうか？」

「なるほどお前が今までノイズを使った事件の犯人ってことか……悪いがここで倒させてもらおう!!」

斬月は無双セイバーを構えて突撃をして振り下ろすが相手はクリ

スがパージをしたネフシユタンの鎧を装着をして無双セイバーを鞭でガードをする。

「何?」

「はああああああああああ!!」

「ぐああああああああああああ!!」

相手の鞭が斬月のボディに当たり吹き飛ばされてしまう。

「貴虎さん!!」

響が駆け寄り彼は立ちあがるがすでに相手は逃げておりクリスの方も消えていたので斬月は響に支えられながら立ちあがるとアームドギアの先端に翼をぶら下げながら奏がやってきたので二人は翼の方をちらつと見る。

「よう貴ちゃん」

「つ、翼は大丈夫か?」

「ああ安心をしろみねうちをしているからよ。」

「二そうなんだ。(あれでみねうちなんだ。)」

翼はちらつと涙目で助けてという合図を出しているが斬月も響も今の奏が怖くて逆らえないため合掌をする。

「貴虎兄上!助けてください!今の奏怖くて!!」

「すまない私も命は大事にしたいからね。」

「そんなああああああああああ!!」

翼はアームドギアの先端でジタバタをしながらしてるので可愛いなと思いつつながら彼らは二課の方へと帰るのであった。

貴虎とクリス

雨が降る中貴虎は買い物をしていた。夕ご飯を買う為に社長自らである。本当だったらいいなどが買い物をしているがたまには自分が買い物をして帰るのも悪く無いなとスーパーを寄った帰りである。

「さーてミュとミサキが待っているからな。急いで……ん？」

爆発が起こったので貴虎は何かあったの違いないとゲネシスドライバーを腰に装着をして斬月・真へと変身をして買い物袋を持ったまま向かう。

「おらああああああ!!これで終わりだああああああああああ!!」

ガトリングを放ちノイズを撃破したクリス、彼女はイチイバルを纏ったままノイズと戦い続けていた。だが彼女の疲労は半端なく、誰かが近づいてきたが彼女に戦う力は残っておらずそのまま気絶をしてしまう。

現場に到着をした斬月・真は倒れている人物をすぐに保護をして自分の家へと運んで行く。

「じいすまないな」

「いいえ貴虎坊ちやま、その方はクリスちゃんですね？彼女が小さい時に貴虎坊ちやまと遊んだのを覚えております。だがどうしてこんな雨の中……」

「わからないが……いずれにしても体などが冷え切っている。」

「わかっております家にいるメイドたちにお風呂の準備をさせておりますので」

「ああすまない。」

車は屋敷に到着をして貴虎はメイドにクリスを託して自分は買い物袋をほかのメイドたちに渡して一度服を私服に着替えることにしてゲネシスドライバーや戦極ドライバーなどを自分の部屋においてからクリスが眠っているソファの方へと移動をするとミュとミサキの姿見えないのでどうしたのだろうと首をかしげている。

「坊ちやま、妹さま達は今練習をしておりますよ?」

「練習？プロジェクトドルズの曲か？」

「はい、見ていきますか？」

「そうだな、クリスが起きたら呼んでくれ」

「わかりました。」

貴虎は妹たちが練習をしているトレーニング室へ行くと二人はジャージの姿で練習をしている。

「はいワン、ツー、ワン、ツー」

「ワン・・・ツー・・・ワン・・・ツー・・・」

二人はダンスが終えて休憩をするタイミングを見て貴虎は中へ入る。

「頑張っているな。」

「お兄ちゃん!!」

「お兄様、お帰りになつていたのでか・・・すみません。」

「いや気にするな、ダンスなど上手くなっていると私は思っているよ。」

「ありがとうお兄ちゃん!!」

「てかミュも大変だな？キャラとはいえ普段はあまり話ができないだろう?」

「まあードールズの中で話をする時は普通にしているけどね（笑）」

「確かにね。私もあんな風にできるミュがすごいと思っているわよ。」

「ありがとう姉ちゃん、けど案外大変だよ?感情を無くすってやり方・・・まあ頑張っているよ。」

「とりあえずご飯の準備ができたら呼びに来るから」

「あーそろそろ終わりにしましょうか?」

「だね。お姉ちゃんお風呂に入りにいこ!!」

「ではお兄様」

二人はお風呂に入るために移動をして貴虎もトレーニング室を後にするとメイドが呼びに来たので彼は急いでいく。

クリス side

「ここは?」

あたしは目を覚ますとどこかのソファで寝かされていた。だけ

どこどこかで……

「お目覚めになりましたかクリスマス様。」

声が出た方を見ると貴虎兄ちゃんの執事の人がいたのであたしはまさか貴虎兄ちゃんの家に来てしまったのか!?ならあたしは逃げない!!

「駄目ですぞ?あなたの体は冷えています。今からお風呂の方へと入れますからね?」

「え!?!いやあの!?!」

「さあメイドさんたちお願いしますぞ!!」

「!!「はーい!!」!!」

「いや!?!ちよま!!ああああああああああ!!」

あたしはメイドさんたちに連れられてお風呂の方へと連れていかれる。

クリスマスside終了

さてクリスマスがメイドたちにお風呂場へと連れていかれていく中、貴虎は食事をするところで専用のノートパソコンを開いて新たなゲームをどうしようか考えていたがなかなか作ることができない状態である。

「いずれにしてもどのようなゲームがいいのだろうか?」

貴虎はご飯などができてきたのでノートパソコンを閉じるとミサキとミュ、そしてクリスマスの3人で来たので丁度彼女達がお風呂に入っている時に入れられたなと……

「えつと……その……」

「いやー驚いたよ。メイドさんたちがお風呂に来てクリスマスを連れてきたときはね。」

「えつとミサキ姉ちゃん、ミュお姉ちゃん……」

「私は気にしていないから大丈夫よ?でも貴虎兄さんどうしてクリスマスを?」

「ああ雨の中いたのを保護をしたんだよ。それでメイドさんたちに頼んでお風呂に入れてもらったわけさ。」

「なるほど……」

クリスは貴虎が自身と出会った話が違うことに気づいてもしかして仮面ライダーとしての活動などを話していないのかなと思いがら話を聞いていた。

やがてご飯などを食べながらクリスは本当は今すぐにでもここを離れないと行けないと思っているが貴虎がそんなミスをするはずがない。実は貴虎は保護をする前に何かがついてきているのを感じていたので普通の家を帰るルートを変えてきたのでフィーネに見つかっていないのだ。

その夜貴虎はクリスを自分の部屋へと招いて紅茶を用意をして座らせる。

「あ、ありがとう．．．．．貴虎兄ちゃんその．．．．．」

「何も聞かないさ。」

「え？」

「あの後帰った後にあのフィーネというやつにつかまってネフシユタンの鎧の実験及びイチイバルの実験をしたのだろうな。」

「．．．．．やつぱり貴虎兄ちゃんにはばれるか。ああそうだよ．．．．．あたしは貴虎兄ちゃんに助けてもらった後日本へ帰ったんだ。だけどそこにあいつが．．．．．フィーネが現れて．．．．．」

「そうか、それでノイズに襲われていたわけだな？」

「だからあたしは！「心配ないさ」え？」

「あいつがお前を見張っていると思っていないとも違うルートから家へと帰った。だから奴にはお前がここににいることはばれていないさ。」

「そ、そうなのか．．．．．あれ？ミサキお姉ちゃんとミュお姉ちゃんの顔をあたしどこで見つけた？」

「もしかしてプロジェクトドルズのことか？」

「そうそうそれってええええええええええええええええええ！」

クリスはまさか自身が姉と慕っている人物たちがあのプロジェクトドルズのメンバーだったことに気づいて驚いてしまう。

「さらにプロデューサーは私だぞ？」

「貴虎兄ちゃんっていったいどれだけ仕事をしているんだよ。」

「呉島コーポレーションに呉島プロダクションとかだな・・・」
「おうふ」

大量のノイズ

クリスを保護してから数日が経った。貴虎は弦十郎から連絡がきて大量のノイズが現れたのを聞いて彼は戦極ドライバーを持ち家を出ようとしたときにクリスが前に立つ。

「いくんだろ？あたしも行く。」

「だがお前は……」

「あたしは貴虎兄ちゃんの共に戦う。それがあたしの……罪滅ぼしでもある。」

「わかった。」

貴虎はそういつてガレージの方からサイドカーを出してきた。クリスはサイドカー部分に搭乗をして貴虎はアクセルを吹かせて現場の方へと急行をする。

一方で現場の方では響、翼、奏の二課は現れたノイズと交戦をしていた。だが数の多さに苦戦しており押されていた。

「なんて数だ……」

「二人とも油断をするな!!」

「うわああああああ!!」

「響!!」

響が吹き飛ばされて奏が声をかけると突然としてミサイルなどが放たれてノイズ達が撃破されて行く。そして吹き飛ばされた響は一人の戦士に抱えられて着地をする。

【ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！】

斬月は響をゆっくりと降ろして辺りのノイズを見ていた。

「予想をしていた以上に数が多いな……」

「貴ちゃん……なんででめえが貴ちゃんと一緒にいるんだよ……」

奏はクリスを睨んでおり彼女も奏に睨み返している。

「ああ？あたしは貴虎兄ちゃんの家で過ごしているんだよ！なんか文句があるのか？ああ!？」

「んだと!？」

「奏！」

「クリス！」

「喧嘩をしている場合じゃないだろ!!」

「ふん!!」

「あはははは……」

響は苦笑いをしてみているがノイズは増えていく一方でいくら斬月でもこの数の多さプラス空を飛んでいるノイズがいるので彼自身はどうすればいいのかと考えていた。

「さて問題はこの数の多さだ。いくら斬月でもこの数の多さは私でも無理だ。」

「あああたしでもな。」

「できるぜあたしならな！」

「クリス？」

「イチイバルの能力を応用をすれば一斉射撃が可能だ。だがその間はあたしは無防備になるし攻撃を受けたらアウトだ。」

「どうします貴虎兄上？」

「……わかった。その方法で戦おう。我々はクリスに敵が近づけないように戦う!!それでいいな？」

「つたくしようながないな。貴ちゃんが言うならあたしも力を貸すぜ？」

「ああその通りだな。」

「よしやりましょう!!クリスちゃん!!」

「あーっ抱き付くなーっ!!貴虎兄ちゃん助けてくれえええええええええ!!」

「こら響ちゃん、今は作戦タイムだ。」

クリス以外のメンバーはそれぞれで拡散をしてノイズと戦いクリスに近づけないように戦う。

「はああああああああ!!」

斬月は無双セイバーでノイズを切り裂いていきカツティングブレードを一回倒す。

【ソイヤ！メロンスカツシュ！】

「であああああああああ!!」

回転斬りをお見舞いさせてノイズを切り裂くとほかのロックシールドを構える。

「パイン！ロックオン！ソイヤー！パインアームズ！粉碎デストロイ！」

パインアームズへと変わりパインアイアンを振りまわしてノイズ達を粉碎をしていきそのまま腰のカツティングブレードを三回倒す。

「ソイヤー！パインスパークング!!」

「はああ………せいやああああああああ!!」

パインアイアンを振りまわして巨大化したパインアイアンを叩きつけてノイズ達を撃破する。

翼はアームドギアの剣を構えて突撃をしてノイズ達を切っていく、そのまま回転をして斬撃を浴びせていく。

「であああああああああ!!」

さらに大剣状態にして蒼ノ一閃を放ち次々に撃破していき倒していく。響はその鍛えられた剛腕をふるいノイズを殴り飛ばしていた。

「貴虎さんの姿を見て放つ蹴り！ライダーキック!!」

そのまま走りだしてそのまま飛び蹴りを放ちライダーキック状態でノイズを貫通して撃破する。

奏はアームドギアの槍を振りまわしてノイズを撃破していくと飛びあがり上空から槍がたくさんに振ってきて撃破していく。

ビルの屋上ではクリスが武器を全て展開をして構えている。

「さーてこれがあたしの全力全開!!」

放たれた一斉射撃がノイズを次々に当たっていき撃破していく。斬月はその姿を見て流石だなと思いき無双セイバーで切り裂いてノイズが全滅をしたのを確認をする。

「今のところは問題ないな?」

「ああだけどなんで?」

すると通信機が鳴っているのに気づいた。

『た、大変です!!リディアン学園で大きくなってうわあああああああああああ!!』

「おい！リディアン学園と言っていたな。」

「急ぎましょう!!」

全員でリディアン学園がある場所へと向かう。だがそこで見たのは何かの砲塔が出てきてリディアン学園が崩壊をしたところである。

「リディアン学園が!!」

「見ろ！何かの砲塔が現れてやがる！」

全員がその様子を見て一人の人物が立っていた。白衣を着た人物が立っていたが貴虎は無双セイバーを構えているので三人は驚いている。

「貴ちゃん!」

「こいつは櫻井 了子ではない。貴様がこの前私達に襲い、クリスをさらったファイネというやつは?」

「いかにもそのとおりだ。呉島 貴虎」

そういつて櫻井 了子改めてファイネはネフシユタンの鎧を装着をして斬月はその砲塔を見ていた。

「この砲塔はいったいなんだ!!」

「これこそ私のカ・ディングル……これを使い月を破壊する!!」

「月だと!」

全員が月の方角を見ておりその砲塔「カ・ディングル」が向けている場所が月だったので斬月達は破壊をするために向かうがファイネはそうはさせないとソロモンの杖を使いノイズを出してきた。

全員がこのままでは砲塔が放たれると斬月はあるロツクシードを出していた。

「あれを破壊するにはこれを使うしかない。」

「貴ちゃん?」

「クリス！ミサイルを放て!!大型でいい!!」

「大型の!?!わかった!!」

クリスは何をするのかわからなかったが大型ミサイルを四間作り発射させる。斬月はそのまま飛びあがりファイネはミサイルに気づいて鞭を使い破壊をする。だが残った二つのミサイルの一つに貴虎

は乗っており彼はロックシードを構える。

「カチドキ！ロックオン！ソイヤ！カチドキアームズいざ出陣！エイオー!!」

仮面ライダー斬月カチドキアームズへと姿を変えて専用のアームズウェポン「火縄甜瓜DJ」銃を構えておりシン・カチドキロックシードを外して銃にセットをする。

「貴ちゃん!!」

「貴虎兄上!!」

「貴虎兄ちゃん何を!!」

「決まっている!!これを破壊する!!」

「だけど!!」

「馬鹿め、貴様の力でこれが破壊できると思っているのか!!」

「一、十、百、千、万、億、兆！無料大数！カチドキチャージ!!」

「撃て!!」

カ・ディングルから放たれた砲撃を斬月からも強大な砲撃が放たれて激突をする。だがデュランダルから得られているエネルギーの影響もありカ・ディングルの砲撃の一撃は斬月が放つ砲撃を押し回す。

「ぐう………」

「貴ちゃん!!」

「私は……私は!!仮面ライダーだああああああああああああああああああああ!!」

お互いのエネルギーが激突をして爆発が起こり全員が目を開け閉してしまう。奏は誰よりも早く目を開けた時に見たのは……斬月の姿はなく、カ・ディングルの方もダメージを受けており砲塔が使用不可の状態になっている。

「お、おのれ！呉島 貴虎!!だが貴様は自らの命を失ったのだからな
「今………なんって言いやがった?」ん?」

フィーネは高笑いをしようとしたがその声を聞いてみると天羽奏がアームドギアを構えている。

「今、何て言いやがった?」

「ふん何度でも言つてやろう。呉島 貴虎は死んだとな!!」
ぶち

「貴ちゃんが死んだ？死んだ死んだ死んだ死んだ？フザケルナアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

奏のギアの色が黒くなっていき響が暴走をしたような状態になっていた。彼女はそのままアームドギアを構えて突撃をする。

「ふん呉島 貴虎が死んで獣になったか……」

「がああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

一方でほかの三人も目を開けると奏が黒いオーラを纏いながらファイーネに攻撃をしている姿を目撃をする。

「奏さん!？」

「貴虎兄ちゃんは!!」

一方で吹き飛ばされた貴虎、彼は目を開けると銀色の鎧を着た人物が立っていた。

「お前は……葛葉 紘太?」

「ああそのとおりだ。今あんたはあの砲撃の一撃を受けて意識だけがここにいる。」

「私も行かないと……」

「お前ならそう言うと思つたぜ。受け取りな」

「これは……」

「今はブランク状態だ。だがお前を思うやつらの思いがそれを変えてくれる。」

「私のことを?」

「ほら行きな、ここからはあんたたちのステージだ!!」

「ああ感謝をする。」

そういつて葛葉 紘太が用意をした扉へ貴虎は入っていく。場所が変わりカ・ディングルの周りではシンフォギア装者たちが倒れていた。

ファイーネに立ち向かったが強大な力の前に倒されてしまう。

「ふふふはははははははははははは!これで私の邪魔をするものがいなくなつた

!!「それはどうかな?」何!?

フィーネは笑っていると声が聞こえてきたのでファスナーが開いて現れたのは呉島 貴虎である。

「……………」

「呉島 貴虎!生きていたのか!!」

「ああこの通りな。悪いが貴様の野望は私達が打ち砕く!!」

「打ち砕くだと?すでに奴らは戦えない。それで私たちだと?」

「それはどうかな?」

するとスピーカーからリディアン学園の校歌の音が聞こえてきてシンフォギア装者たちは聞いていた。

「み……………」

「なんだこの歌は……………」

「諦めない歌が今鳴り響いている。見ろ!!」

すると貴虎が持っているロックシードにも力が込められて行きづらんク状態が解除された。

「これが!」

【シンフォギア!】

そのまま戦極ドライバーにセットされて彼はブレードを倒す。

【ソイヤ!シンフォギアアームズ!奇跡の歌!響かせる!!】

斬月の上空からアーマーが振つてきて斬月に装着されて展開される。その姿は立花 響が装着されるシンフォギアと同じような形になっている。

さらにシンフォギア装者たちも立ちあがり姿が変わっていく。エクストライブモードの姿になったのである!!

「な、なんだ!?なんだその姿は!!私が知らない姿!」

「そうだ!彼女達の強き心がシンフォギアの力をあげた姿だ!!フィーネ!ここからは私達のステージだ!!」

「おのれ!仮面ライダー!シンフォギアども!!」

「いくぞ!!」

「!!「おう!!」!!」

ここからは私たちのステージだ!!

「ば、馬鹿な……お前たちはあれだけボロボロになっていたのに……なぜなぜ立てるといふのだ!!」

「未来達の声が……歌が! 私達を立ちあがらせてくれた!!」

「それにさ! 貴ちゃんが戦うつてのにいつまでも寝てたまるか!!」

「覚悟をしてください! 櫻井教授!!」

「フイーネ! あたしを利用してくれた罪! 数えやがれ!!」

「ノイズども!!」

フイーネはソロモンの杖を使いノイズ達を発生させて彼女達に襲い掛からせる。

「行くぞ!!」

「ここからは私たちのステージだ!!」

斬月は響フォームへと変わりジャツキが装着されたアームを使い殴り飛ばす。それに続いて響も斬月の隣に立ち共に殴った。

さらに斬月は今度はアメノハバキリ形態へと姿が変わりその手に翼と同じアームドギアが装備される。

「兄上!!」

「共に行くぞ翼!!」

「はい!!」

二人は飛びあがり大剣状態にして蒼ノ一閃を放ちノイズ達を次々に撃破していく。次にイチイバル形態へと変わり両手にハンドガンを構えて斬月はノイズを攻撃していく。後ろからノイズが襲い掛かろうとしたが上空からビームが放たれてノイズが次々に撃破されていく。

「貴虎兄ちゃん!!」

「ナイス援護だ! はあああああああ!!」

ハンドガンが変わりガトリングへと変わりさらに大型ミサイル、小型ミサイルが生成されて発射されてノイズ達を撃破していく。

さらにガングニール（奏）形態へと変わると奏は彼の隣に立つ。

「なんか不思議な気分だ。貴ちゃんこうしてデュエットができるな

んて。」

「なら付き合ってもらおうぞ!!」

「おうさ!! あたしたちのデュエットを聞きやがれええええええええええ!!」

二人はまるで意気があっているかのよう動いて持っているアームドギアの槍を振りまわしてノイズを突き刺していく。

「貴ちゃんいつけええええええええええ!!」

「何!?! どああああああああああ!!」

奏が斬月に振りかぶった槍を当てて斬月は槍を持ったまま回転をしてカッティングブレードを倒す。

「ソイヤ! シンフォギアスカツシュ!!」

「であああああああああああ!!」

エネルギーが込められた槍がノイズ達を次々に貫通をして斬月は着地をして奏はにししと笑いながら来たが斬月はチョップをする。

「あた!」

「お前な……いきなりあんなことをするな。私だからできることだからな?」

「へへへ貴ちゃんならやってくれると信じてたからよ。」

「……………」

そう言われて斬月事貴虎は仮面の奥で顔を赤らめているが今は戦いに集中をするためにモードを再びガングニール(響)へと変えて走りだす。

フィーネは啞然としていた。あれだけ出したノイズが彼女達と斬月によって全滅させられたのだからだ。

「後はお前だけだ櫻井 了子!!」

「まだだ! まだ私は!!」

するとフィーネは自分が持っていたソロモンの杖を自分に刺して全員が驚いているとノイズ達も集まっていき巨大な赤き竜へと変貌をする。

『ぐおおおおおおおおお!!』

「おいおいまじかよ。巨大化をした敵ってなんだよ……………」

「まあヒーローものでは当たり前ってことだろうな。」

「貴虎兄上、冷静に言っている場合では……」

翼はツツコミをして巨大な竜はシンフォギア装者及び斬月に攻撃をしてきた。五人は回避をして斬月は地上でダッシュをしてダンテライナーを呼びだしてそれに乗りこんで空中からイチイバル形態へと再び変わり左手にライフルを構えて発砲をする。

「やはり外側から効いていないな……」

「どうする貴ちゃん？」

クリスは何かを考えたのか大型レーザーを放ち穴が開いた。そこに翼が入りこんで中にいるフィーネに対してアームドギアの剣を投げつける。

「何!？」

そう彼女が狙ったのは右手に持っていたデュランダルド。そのままデュランダルドははじかれて響はつかむが暴走をしたように黒くなっていく。

「馬鹿め……再び暴走をするといひさ!!」

だが彼女の周りに奏たちが駆け寄り声をかける。

「負けるんじゃないぞ!!」

「そうだ立花!!」

「あたしたちがついてる!!だから!!」

「帰ってこい!!」

(聞こえる、三人の声が……そして!!)

「戦え響ちゃん!!」

(貴虎さんの声が!!)「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

響の色が戻っていき竜は攻撃をしようとしたがダンテライナーに搭乗をする斬月はカッティングブレードを倒す。

【ソイヤー・シンフォギアスパーク!!】

斬月はダンテライナーから飛びあがりガトリング、大型ミサイル、小型ミサイルが放たれて竜を怯ませると四人がデュランダルドを振る竜を攻撃をしていく。

「なんだ？」

「あの子達はやれるか？」

「さあどうだろうな？私がいなくてもやっていけるだろう。」

貴虎はそう言いフィーネはふと笑い体が消滅をした。

「……………」

貴虎は空の方を見ていると四人の戦士たちの姿が見えてきた。

「たーかーちやーん!!」

「うお!!」

奏が一番にやってきて彼に抱き付いた。彼自身も驚いてしまうが抱きしめ返す。そのあとにフィーネは消滅をしたことをいい奏はそうかといいい地面にアームドギアの槍を突き刺した。

「……………家族の敵討ったか？と言った方がいいのかな？」

「……………それは奏、お前自身が決めることだ。」

こうしてフィーネとの戦いは終わった。

事件解決後

貴虎 side

フィーネ事櫻井 了子氏が起こした事件「ルナアタック事件」は私とシンフォギア装者達の活躍によって解決をしたが……シンフォギア装者達は行方不明扱いになっており今私は彼女達がいる潜水艦へとやってきていた。

「よう」

「貴ちゃん……暇だよー」

「仕方があるまい、お前達の謹慎が解かれていないのだからな。」

「だよな……全員がここで過ごしているけどよ……あー外の空気が吸いたいよ。」

「はははははは。」

奏と話をした後ほかのメンバーのところへと行き同じ状況だったので苦笑いしながら弦十郎殿のところへと行きクリスをどうするかを決めることにした。

「そうかクリスはリディアン学園にか……それで新しい場所はどの辺になるんだ？」

「ああ新しいリディアン学園はこの辺になる。」

弦十郎殿から新しいリディアン学園の場所を聞いてみるとうちの家から少し離れた場所に立つんだなと思いきりクリスはどうするかを聞いてみた。

「実はクリス君の要望は君の家に住みたいという要望なんだが……」

「別に俺は構いませんよ。元々クリスとは小さい時に遊んだ仲ですから。」

「そうか、ならクリス君は貴虎君に任せるとしよう。」

こうしてクリスは私の家に引き取ることとなり、会社へ戻ることになった。

貴虎 side 終了

貴虎が会社の方へと戻っていった後、弦十郎はメンバーを集めてこ

れからのことを話しをする。

「さてクリス君だが、君の要望通りに貴虎君から許可を得ることができたよ。」

「本当か!!」

「な!?!」

クリスは喜び奏は驚いてしまう。そんなことを知らない貴虎は会社にて新しいゲームの作成を進めていた。

「さて次のゲームはパーフェクトパズルとノックアウトファイターを発売をしていくつてことで決まったな?」

「はい社長。すでにパーフェクトパズルとノックアウトファイターの試作品は完成をしておりテストプレイなどをしておりますがいかがしますか?」

「ふむ……」

貴虎は試作品のテストをやることにした。パーフェクトパズルとノックアウトファイター……それぞれの試作品などをテストプレイをした後に改良などを加えていくのが当社の商品である。

「さて次は……アイドルプロダクションの方へと行つてくるよ。」

「あははは……貴虎社長倒れなくてくださいね?」

「大丈夫だ問題ないさ(笑)」

貴虎は素晴らしい車に乗りこんでアイドルプロダクションの方へと移動をする。入り口の案内人たちも社長が来たので驚いてしまう。

「いや、社長!?!」

「やあ頑張っているね?」

「ああ、ありがとうございます!!」

そういつて中に入りアイドル達がいる場所へ移動をする。プロダクションのメンバー達は9人で活動をしておりついでにお土産を来る前に買っておいいたので渡すことにした。

貴虎は中へと入る前に様子を見ると9人はダンスの練習をしていた。

「はい!ワン!ツー!ワン!ツー!ふう休憩しましょう。」

「あ……やっと休憩つすね……」

「ヤマダ・・・あんたね・・・」

「まあまあ落ち着いてくださいアヤさん」

だるそうにするヤマダにアヤが怒るがそれをミュが止めるって感じを見せており貴虎は苦笑いをしながら外で見ている。

「ミサキさんここはどうですか?」

「そうね・・・ここはこうして」

「だったらここはどうかしら?」

「シオリさんはこーですね?」

サクラを教えるミサキ、ついでにシオリもどの辺かなと踊っている。

「ここはこうですかね?」

「ええそうね。」

「ねえねえ!これはこうだっけ?」

「あら違うわよヒヨちゃん。ここは・・・」

レイナ、ヒヨ、ナナミの三人はレイナが二人にダンスのポイントを教えているので彼はそろそろいいかなとドアを開ける。

「頑張っているね?」

「「「社長!」「」」「」」」

全員が驚いてしまいが貴虎はそのままでもいいよといいお土産を渡すことにした。

「はい来る前にお土産を持ってきたよ。」

「「お土産!」「」」

サクラ、ヤマダ、ヒヨの三人が目を光らせているのを見てほかのメンバーは苦笑いをしておりミュは縁起の無表情をしているが本当は自分もおかしがほしいので目を光らせたいが我慢をしていた。

(うわミュの奴我慢をしているな(笑)誰よりもおかしが大好きな子なのにキャラを守らないといけないからな(笑))

貴虎は心の中でそう思いながらお土産を開けていきメンバー達用の紙コップからジュースを開けて休憩をさせていく。

貴虎は次のG編まで時間があるなと思いつながらアイドルプロダクションの社長室で彼女たちの仕事などをマネージャーに確保をする

ように指示を出しておりバラエティ番組も悪く無いなど思いつつ料理番組なども悪く無いなど思いつつ彼女たちの休ませることも大事なので休みの日なども作らないと行けないなど……

「やれやれ仕事が多いことで……」

貴虎は腕を伸ばして少し眠ることにした。

クリスマスが家へ

貴虎 side

それから数日が経ち装者たちの謹慎期間が解かれてメイドさんたちは一部屋を掃除をしている。

そう今日からクリスマスがこの家で暮らすことになったのでメイドさんたちに空いている部屋を片付けてもらい彼女が過ごせるように準備を進めている。

「貴虎お兄ちゃんなんで一部屋を片づけを？」

「まあその人物はそろそろ来ると思うぞ。」

「!?」

ミサキとミュは首をかしげているとインターホンが押されたのでじいが迎えに行き私はジェットコンバットとキリギリチャンバラのゲームを出したのを見てミュが目を光らせる。

「そ、それは!!ジェットコンバットとキリギリチャンバラじゃないですかお兄様!!」

「宿題は終わったのかな？」

「うぐ」

ミュはゲームをしようとしたが終わっていなかったのだがまずは新しい住民を紹介をしないとイケないので扉が開いてじいが入ってきた。

「失礼します坊ちやま、クリスマス様がおいでになりました。」

「え？」

「クリスマス？」

じいの後からクリスマスが来たので二人は驚いているので俺は自己紹介をするために彼女の隣に立つ。

「紹介しよう今日から一緒に住むこととなった雪音 クリスだ。って知っているな？」

「ええ知っているけど……でもどうして？」

「実はクリスマスの両親がな。」

「あれ? そういえば雅律おじさんとソネットおばさんは？」

「・・・・・・・・パパとママは・・・・・・・・死にました。」

「ごめん・・・・・・・・」

「というわけのうちで預かることになった。」

「なあ貴虎兄ちゃん、あたしがおっさん達に要望を言ったけどさ良かったのかあたしは・・・・・・・・」

「前にも言ったが私は気にしないさ。それにここから新しいリディアン学園は近いからな。」

「ありがとう・・・・・・・・」

クリスはお礼を言いとりあえず今のところはノイズが現れることはないのです。まずはクリスの食事のマナーを改善することにしよう。

おそらくフィーネに習っていないのだろう・・・・・・・・うちで食べるのはいいのだが・・・・・・・・外で食べるのに問題がある気がする。

「では食べるとうしようか？」

「「いただきます。」」

とりあえう夕ご飯を食べることにしたのだが・・・・・・・・

「く、クリス・・・・・・・・」

「マナーが悪いよ。」

「え・・・・・・・・あ、ごめんなさい」

「・・・・・・・・まずは食べることから始めるとしよう。」

「だって・・・・・・・・こんな美味しいもの食べたの久々だから。」

フィーネ事了子さん・・・・・・・・クリスはいったい何を食べさせていたんだ。涙を流しながらご飯を食べているんですけど・・・・・・・・私は想像ができないためあの世に行ったフィーネに対して恨むことにしよう。

「えつとクリス、そこまで泣かなくても・・・・・・・・」

「そうだよ。お兄ちゃんが作ったものだから。」

するとクリスはさらに涙を滝のように流したので私達はまず落ち着くようにメイドさんたちも慌ててしまうほどだったのでこれはかなり苦勞をするな。

貴虎 side 終了

それから30分ほどクリスは涙を流して落ち着くと顔を真っ赤に

していた。

「………穴があつたら入りたいぜ………」

「「いやそこまで？」」

貴虎はご飯を食べ終わった後パソコンを開いて新しいゲームの製品を作るのとプロジェクトドルズのコンサート会場の場所などを確認をしているところである。

「貴虎兄ちゃん何それ？ってプロジェクトドルズコンサート!?」

「ああ、今度コンサートをやろうと思ってね。大きな海上ドームを借りることができたんだ。」

「そういえば場所など聞かされていませんでしたね兄さん。」

「てかあたしからしたら今ここにドルズのメンバーがいる事態に驚いているんだけど、ミサキ姉さんとミュ姉さんがあのドルズのメンバーだったなんて、てかミュ姉さんキャラ違い過ぎる!?!」

「あーあれね。」

ミュ自身は何かを考えているといきなり演技に入る。

「始めまして………ドルズのミュといいます。」

「感情がない……だと………」

「ええミュはこのときは無表情って設定だけど私自身も話をする時とか大変よ。」

「………すみません。」

「いや怒っているわけじゃないけど」

「って感じかな（笑）」

「いきなり戻るのかい!!」

ミサキとクリスがツツコミをしている間貴虎は騒がしくなったなと思いつつコーヒを飲んでいた。新しいゲームのパーフェクトパズルとノックアウトファイターの生産などが始まったという連絡を受けているからである。

「そういえばお兄ちゃん!!パーフェクトパズルとノックアウトファイターの発売日とか決まっているの!!私絶対に予約をするからね!!」

「すでに生産は開始をされているさ。予約は今のうちにおいた方がいいぞ?」

「よっしや!!予約予約!!」

「なあミサキ姉さん、ミュ姉さんってもしかして?」

「ええあなたの考えている通りよ。彼女兄さんのゲームゼーンぶコンプリートをしているのよ。」

「まじか。」

ミュは早速ジェットコンバットを起動させて遊んでいる。クリスはバンバンシューティングの銃を見ている。

「これって?」

「バンバンシューティングのガシヤコンマグナムというコントローラーだ。バンバンシューティングはターゲットを攻撃をするゲームだ。Aボタンでライフルモードへと変わりBボタンでチャージをするって感じた。」

「ちなみにライフルモードじゃないときは?」

「Bボタンを押すことで連続して弾を放つマシンガンモードになる。弾切れになったらしやがむことで弾を補充をすることができる。」

「やってみようかな?」

「テレビは向こうにあるからミサキ、接続させてやってくれ」

「わかったわ。」

バンバンシューティングをやるための接続をしてクリスはゲームを起動させてガシヤコンマグナムを構える。

「.....」

クリスは無言で銃を構えてターゲットが現れて弾を放つ。次に襲い掛かってくる敵に対して先に発砲をしてターゲットを撃破していく。

そして新記録を出してミュの記録を越したのである。

「嘘おおおおおおおおお!!」

「.....これは驚きね。」

(まあイチイバルを装着をして主にそういう武器で戦っているからな。だが始めたばかりの人がやったミュの記録を越すか?)

貴虎は見ておりミュがもう1個のガシヤコンマグナムを持ってきたので対戦モードをすることになり結果は.....

「・・・負けたぜ・・・」

「えつとごめん」

クリスの圧勝であった。ミユは落ち込んでしまい涙目となり貴虎に走ってくる。

「うええええええんにいちやーん!!」

「よしよし」

大きくなっても甘えん坊の妹に貴虎は頭をなでなでしながら甘やかすのであった。

二人が見たもの

貴虎 side

クリスマスを引き取った次の日、私はサイドカーを出してある人物が待っている場所へと急行をしていた。ちなみに仕事の方は朱果が変わりにしてくれるってことで休みになっている。

そして待っている場所へと行くとその人物はにししと笑いながら立っていたのでため息をつく。

「全く、お前は全然変わらないな奏」

「にししししほらヘルメットもらうぜ?」

「ん」

ヘルメットを奏に渡して彼女はサイドカーに搭乗をして私はアクセルを吹かせて奏と共にある場所へと向かった。

その場所は私の父と母、奏の父と母、妹が眠っている墓がある場所へと向かっている。最近はずいぶん忙しかったのでこの時期で行くことにしたのだ。

花などを買っていき私達は墓がある場所へと到着をして私達は墓がある場所へと歩いていくと三人の人物が墓の前で手を合わせているのがいた。

「……………」

その場所が天羽家の墓だったので私達は誰がお墓参りに来ているのか怪しんでいると向こうが立ちあがりその顔を見て私は目を見開くがすぐに冷静となる。

「……………あなたたちだったのですね。」

「貴ちゃん?」

「父さんに母さん、やはり生きておられておりましたか。」

「貴ちゃんのお父さんとお母さん!」

「久しぶりだな貴虎。」

「はい」

やはりこの両親は生きていた。 呉島 竜と呉島 麗子……………

それが私の両親の名前だ。とても若く見得るが確か……40代だったのを覚えている。

呉島コーポレーション二代目社長でもある。私は三代目社長だ。

「久しぶりだね奏ちゃん綺麗になって……」

「はい、お久しぶりです。」

「父さんに母さん、なぜ姿を消したのですか？ミサキとミュがどれだけ悲しんだか。」

「すまなかつた。ミサキとミュには悲しい思いをさせてしまったが……奴らの陰謀を潰す為に俺達は一度死んだふりをしておかないといけなかつた。奴らの陰謀を叩き潰した後長野遺跡でノイズと思われる奴らが人を襲っていたのを見てな。ある一人の女の子を助けたんだ。」

「長野遺跡!？」

「ど、どういうことですか……」

「ほらいつまで私の後ろに隠れているの？」

母さんの後ろから奏と同じ髪をした女の子が現れて奏は目を見開いている。

「嘘……麗衣なのか？」

「……お姉ちゃん。」

「麗衣……麗衣いいいいいいいい!!」

奏は麗衣ちゃんに抱きしめた。彼女は失ったと思われた妹が父さんたちによって助けてもらったのだからな。いや父さんと母さん超人じゃないかと思つたのは私だけだろうか？てかあの状況でよく助けることができたなど思いながら奏は父さんたちにお礼を言っている。

「貴ちゃんのお父さん、妹を麗衣を助けてくれてありがとうございます!!」

「気にしないでくれ、俺達はたまたま長野遺跡に用があつたからな。」

長野遺跡、確か奏の両親たちが調べものがあるといい調べた場所だな。あそこで何があつたのだろうか？フィーネが関わっているってことは聖遺物があの中にあつたってことか？

いずれにしてもその本人は消えてしまつて闇に消えてしまつていくからな。

「さて俺達は行くとするよ。貴虎会社は任せるぞ?」

「麗衣も行くのか?」

「ごめんねお姉ちゃん、私、竜さん達の手伝いをしたいから!大丈夫だよお姉ちゃん!また会えるから!」

「ああ!!」

そういつて父さんたちは去つていき、私と奏もその場を去ることにした。これはミサキとミュには内緒をしておいた方がいいな。私が言うよりも本人たちが言った方がいいだろうなと……途中で道の駅で休憩をしていると奏は空を見上げていた。

「ふふふ、まさか麗衣が生きているなんて思つてもいなかった。あたしは復讐をするために GANG ニールを纏い戦っている。」

「そうだったな。」

「なあ貴ちゃん、これで平和になったのかな?」

「……今のところはな。だが私は戦うさ仮面ライダーとしてな。」
「そうか、ならあたしも GANG ニールを纏うさ。翼たちだけ戦わせるわけにはいかねーからよ。」

「……奏、少しだけ試したいことがあるのだがお前の装者としてに関わることになる。」

「え?」

「お前が使用をしているギアについてだが、それに詳しい人物が私の知り合いにいてな。その人に調整をしてもらつたらどうだと思つてな。」

「貴ちゃん……」

「了子さんが残した LINKER がいつまであるかわからない。」

「……わかつた。それでいつ頃行けばいい?」

「ああ明後日頃に弦十郎さん達を連れてきてほしい。案内をするから」

「わかつたぜ。」

貴虎の案内で研究所の中へと入る二課のメンバー、研究所の中では何かの作っている様子だがなかなか結果が出ていないのか首をかしている研究者たち、やがて止まり貴虎はロックキーをスラッシュさせて扉を開ける。

「あら貴虎ちゃんいらつしやーい」

「主任、彼女たちをお連れしましたよ。」

主任と呼ばれた女性は振り返り挨拶をする。

「始めましてーこの主任を担当をしている「相川 雫」といいますよろしくね?」

「始めまして俺は「風鳴 弦十郎君でしょ?」な!」

「天羽 奏ちゃんに風鳴 翼ちゃん、立花 響ちゃんに雪音 クリスちゃんね。私は何でも知っているんだからね!!」

「な!」

「といっても本当はスパイカメラを使ってみていたのでしょ?主任?」

「おう貴虎ちゃん、ネタバレはやめてほしいわよ」

そういつて話をしながら奏が持っているギアのペンダントを見ている。

「ふむふむ確かにこれじゃあ奏ちゃんに負担がかかるわね。O K O K この天才の頭脳を持っている雫ちゃんにお任せってね!!」

「あたしがLINKERを使わないでギアを纏うことができるのか!」

「私を誰だと思っているのかしら? 私に不可能という文字はないのよ!!」

おほほほほほと笑っているのを見て全員が苦笑いをしており貴虎自身は頭を抑えており彼女の行動には頭を抑えているのであった。

研究所を案内をされて食堂で休んでいると貴虎もやってきたので椅子に座る。

「なあ貴ちゃんここでは一体何をしているんだ?」

「……………ここでは聖遺物などを調べたりする研究をしている。だがそれでも解析などが完全ではないものが多すぎるんだ。」

「それって貴虎兄ちゃんが海外に行ったときなのか？」

「ああ斬月などに変身をしてそういう組織を叩き潰してきたからな。ここにあるものもあつたものを回収をしているものだ。」

「そうだったのか……」

「雫さんも元はシンフォギア関連に関わっていたのでそれだと思います。ましてここに連れてきたんです。」

「そうだったのか……」

弦十郎は両手を組みこのことは話をしないで自分たちの中で留めて置こうと決めた。やがて放送が流れて全員が雫の研究室の方へと行くと待っていたかのように彼女は椅子から降りて奏のギアを渡した。

「はい奏ちゃん、あなたのギア最適化しておいたから早速あそこでやってみなさい」

「あいよー」

奏はギアを受け取りLINKERを使用をせずに聖詠を歌いだす。

「Croitzalronzell Gungnir zizz
1」

聖詠が起動をして奏にギアインナーが纏われて装甲が装着されて行く。だがいつもならここで苦しむはずの奏は普通に装着をしてガングニールが纏われた。

『どうかしらっ?』

「すげー……すげーよー!全然今までと違う!まるで生まれ変わったみたいだ!!」

「どうやら成功を試みたいね貴虎ちゃん」

「あの……貴虎ちゃんって言うのをやめてくれませんか?毎回会って言っている気がするのですが?」

貴虎は雫にちゃん付けをやめてほしいというのが彼女は気にせず貴虎ちゃんと呼んでおり苦笑いをしている。

そして研究所を後にしてそれぞれの家へと送った後に貴虎はクリスと共に屋敷の方へと帰宅をする。

新たなゲームを発売

「ふんふんふふーん」

立花 響はただいま並んでいるのはゲームコーナーである。彼女がなぜ並んでいるのか？あれから一ヶ月が経ち呉島コーポレーションが新たなゲーム「パーフェクトパズル」「ノックアウトファイター」を発売を決定をしたのだ。しかもこの二つは一つのソフトでまとまっており一つのゲーム機で二つのゲームが遊べるゲームなのである。

価格はほかのゲームに比べたら高くなっているが響はほしいためにお金を使わずにためて昨日の夜から並んでいる。

「やはり呉島コーポレーションのゲームは人気だね。ここまで並んでいるからね。」

響はそういいながら一番前にサングラスをかけた人物が並んでいるので負けていたのだ。その正体は呉島 ミユであり彼女はパーフェクトパズルとノックアウトファイターを買うためにサングラスをして待っているのだ。

(ふっふっふっふっこのミユ様が並ばないわけじゃない!!仕事も今日のために休みにしてもらったかいがあったわ。)

呉島家

「.....あれ？ミユは？」

貴虎はミユがいないことに気づいた。ミサキは苦笑いをしながらミユが何をしているのかを説明をする。

「じ、実はパーフェクトパズルとノックアウトファイターを買うために昨日から並んでいるの」

「.....え？」

貴虎はまさか昨日の夜にこっそりと家を抜けだすのを見ていたがまさかゲームを買うために昨日から並んでいるのか？と思いつながらパソコンを開いて仕事をするのであった。

さてさて場所が変わりゲームを無事に買ったミユは笑顔になりながら家の方へと向かって歩いていった。

「買った買ったー！兄ちゃんのゲームを買えたわ。」

「るるるん気分の家へと戻ると丁度兄が家を出ようとしているところだ。」

「げ！」

「……………あえて何も言わないが、買ってきたのだな？」

「うんごめん」

「いや気にしていないさ。お前が楽しんでくれるならそれでいいさ。」

「仕事？」

「あちよつとしたことだ。」

「そういつて家を出ていきミュは靴を脱いで家の中へと入る。」

「貴虎は二課の潜水艦の方へとやってきていた。前の基地はカ・ディングルでの影響で使用不可となつてしまいい現在はここで活動をしている。」

「……………まさか潜水艦へ来ることになるとはおもってもいませんでしたよ。」

「すまない貴虎君」

「いえすみませんこちらこそ、今のところノイズが出ているのは？」

「今のところ反応なしだ。貴虎君も仕事に集中できるのではないか？」

「確かにそうですね。」

「お互いに笑いながらコーヒーを飲みこれからのことを考えながら貴虎はそろそろG編が始まるなど懐の戦極ドライバーを触りながら現れるであろう彼女達と戦うことになる思いを隠しながら弦十郎と話をして時間を過ごすのであった。」

第二章 新たな組織フィーネ 新たな次元の始まり

呉島コーポレーションが新たなゲームを発売をしてから二か月が経ち貴虎はサングラスを装着をしてコンサート会場へとやってきていた。

今日はツヴァイウイングの二人と歌姫「マリア・カデンツヴァーナ・イヴ」という女性のコラボコンサートに誘われたからである。

貴虎はマリア……かと呟きコンサート会場へと入り席に座る。かつてツヴァイウイングのライブでもこうして座り彼女達に正体を明かして斬月に変身をしてノイズと戦ったことを思いだしながらも今は一人の客人として見ることにした。

やがてコンサートが始まりツヴァイウイングの二人が現れて歌を歌った後にマリアが現れた後に貴虎は綺麗になったなと思いながら見ていた。

コンサートもクライマックスになったときに突然としてノイズが現れたのを見た。貴虎は驚くが突然としてマリアが吠える。

「狼狽えるな!!」

突然としてマリアが叫びそのまま聖詠を歌い GANG ニールを纏つたので貴虎はやはりかと思ひ黙ってみていた。

ツヴァイウイングの二人はモニターが出ているためギアを纏うことができない。だがマリアはお客さんには退室をするようにいい彼らはそれらに従い退出をするが貴虎だけは残っていた。

マリアはフィーネと名乗り要求として国を寄こせなどを言ってきた。するとモニターが消えたのを見て貴虎は走りだしてそのままジャンプをしてステージの上に立つ。

「嘘………なんでここに!?!」

「久しぶりだなマリア、まさかお前がこんなことをするとは思ってないなかつたぞ?」

(貴ちゃんの知り合いなのか!?)

「ええ久しぶりね貴虎兄さん。だけど!!」

彼女はガングニールの槍を構えて貴虎に放ってきた。

「貴ちゃん!!」

「兄上!!」

だが貴虎はその槍を交わすと戦極ドライバーを装着をしてメロンロックシードを解除する。

【メロン!】

交わしながら戦極ドライバーに装着をしてカッティングブレードを倒す。

【ソイヤ!メロンアームズ!天下御免!】

そのまま斬月へと変身をしてメロンディフェンダーでガードをする。

マリアside

まさか貴虎兄さんと戦うことになるなんて思ってもいなかったわ。

あの日ネフィリムが暴走をした時、私と彼はシンフォギアを纏ったセレナを止めようとした。

「セレねえ!!」

「セレナ!!」

「私がやらないとネフィリムが!」待て「え?貴虎お兄ちゃん?」

「ここは私がやる。」

貴虎兄さんは何かを出して腰に装着をすると上から穴が開いてアーマーが装着されたわ。そして華麗な動きでネフィリムを圧倒しました。

【ソイヤ!メロンスパーク!】

「は!!」

蹴りを放ちネフィリムを撃破した姿を見て私の隣にいた男の子は興奮をしていた。

「すごいよタカにい!!」

「た、タカにい?まあいいか」

それから貴虎兄さんと別れた後から今に至るわ。ごめんなさい貴虎兄さん……あなたと戦う私たちを許してほしいわ!!

マリアside終了

ツヴァイウイングの二人もギアを纏い斬月の隣に立つ。

「さあ三対一でどう動く気だ？」

「ええけど私は一人じゃないわよ!!」

すると上空から四人が現れて一人は鎧武者のような姿をしているのを見て斬月は呟く。

「鎧武か……………」

「嘘……………」

「ど、どうして!？」

「わ、私は……………」

「久しぶりだな調、切歌、セレナ……………」

「二貴虎兄さん……………」

(やっぱり三人には辛いわね。)

マリアは三人が貴虎のことが好きなので戦うことができないと思っていたが鎧武はマリアの横に行き斬月を見ていた。

「タカにい……………」

「その口調、星見 総司か」

「ごめんタカにい!!」

鎧武は無双セイバーから弾を放ち斬月に攻撃をしてきた。斬月はメロンデیفエンダーでガードをして攻撃をふさいだ。

すると上空からミサイルが放たれたので鎧武たちは交わすとクリスと響が着地をする。

「お待たせしました!!」

「なんだよあれ!!」

「四人とも下がっていてくれ」

「貴ちゃん?」

「私が戦おう」

「何言っているんだ!!貴虎にい!!」

「私達も戦いますよ」

「すまない」

五対五なので構えて斬月は鎧武にマリアは奏、響はセレナ、調は翼、

切歌はクリスとなった。

マリアと奏のガングニール同士がぶつかる。

「正直に言えばあたしはあんたとコラボをするのを楽しみにしていた！何より貴ちゃんに来てくれるからな！それをあんたが潰してくれた!!あたしはゆるせねえ!!」

「私達も私達のやることがあるのよ!!」

奏が放つ槍攻撃に苦戦をするマリア、一方でセレナの短剣攻撃に苦戦をする響。

「どうして戦うのですか!!」

「ごめんなさい。私達も退けない理由があるのです!!はああああああああああああああああ!!」

「うわああああああ!!」

一方でクリスと切歌は彼女の放つ鎌攻撃に苦戦をする。

「く!まるで貴虎にいの攻撃だ!!」

「デスデスです!!」

「デスデスうるせえ!!」

ミサイルを放つが鋸が飛んできて翼がクリスの隣に立つ。

「苦戦をしているな?」

「いや向こうが突然としてあっちに行つたから合流をした。」

「あーそういうことか。」

「大丈夫切ちゃん!!」

「だ、大丈夫デース.....」

ちらつと二人は貴虎の方を見てから二人に攻撃をする。一方で鎧武は斬月に無双セイバーと大橙丸の二つで斬月に攻撃をしているが彼は冷静に無双セイバーではじかせていく。

「く!」

「やめろ総司、お前では私に勝てないぞ!!」

「わかっているさ!だが俺はマリアのために戦う!」

「そうかそれがお前の覚悟だな。」

斬月は後ろへと下がりカッティングブレードを倒すのを見て鎧武も同じことをする。

「ソイヤ！メロン（オレンジ）スカッシュ!!」

二人は飛びあがりライダーキックのポーズをとりお互いが激突をしたが吹き飛ばされたのは鎧武だ。

「どあ!!」

「総司!!」

四人も総司の方へと向かい斬月は着地をする。すると大型ノイズが現れてマリアは砲撃をして分裂をした。

「何!?!」

その間にマリア達は撤退をしていき斬月はどうすればいいのかと思っている

「あれをやりましょう!!」

「あれをか!?!」

「だがあれはまだ未完成だろ!?!」

「だがそれをやるのが響だろ?」

「というわけで貴虎さん見ていてください!!」

「……わかった」

響達はコンビネーションで分裂ノイズを撃破したのを見て貴虎は成長をしているなど思いつつもマリア達のことを思いながら戦極ドライバーを外す。

「貴ちゃー……ん!!」

「どあ!」

奏は貴虎に抱き付いてきたのでクリスと翼と響は睨んでいる。

「てめえ……」

「奏……」

「奏さんだけですよ!!」

「へっへーん早いもの勝ちだよ!!」

「全く……」

貴虎は素晴らしいながらも奏の大きな胸が当たっているので冷静なふりをしながらもこれからのことを考えるのであった。

廃病院へ

ここはフィーネと名のつた MARIA 達が隠れアジトに使っている廃病院の中、シャワーを浴びている MARIA、セレナ、調、切歌の四人……だが MARIA 以外の三人はシャワーを浴びているが元気がなかった。

(当たり前前よね。大好きな貴虎兄さんが敵として現れたのだからね。)

「……………私達、貴虎兄さんと戦うんだよね。」

「……………そうね。」

「調……………」

「私、貴虎兄さんと戦うなんてできないよ……………」

「……………」

一方で総司は外で空を見上げていた。戦極ドライバーを持ちながら鎧武に変身をして自分が尊敬をしている人物、呉島 貴虎に剣を向けたからだ。

「もう、俺達は止まることができないんだ。許してほしいタカにい……………」

一方で貴虎も会社で仕事をしながら今回現れた鎧武や MARIA 達のことを考えながらため息が出てしまう。ゲームの方はちやくちやくと売れており売り上げもぐーんと上がっているが貴虎自身はあまりうれしい気分にはない。

「どうしました社長？何か上の空のようですが？」

「あちよつとな。なあ朱果？」

「なんですか？」

「もしも知り合いが現れて敵になったらどうしたらいいのだろうか？」

「なるほど、あのフィーネと名乗った組織の人、どこかで見たことがあると思いましたが社長が助けた子ですね？」

「ああそのとおりだ。正直に言えば私は戦いたくない。だが向こうが剣をふるってくるなら私は……………戦わないといけないからな。」

「ふふそれが社長としては一番大変ですね？」

「そうだな。」

貴虎は朱果と話をしていると電話がなったので貴虎は弦十郎からだったので出ると廃病院に彼女達がいる可能性が出てきたという連絡を受けてその夜に襲撃をすることにしたと連絡を受けた。

彼も承諾をしてその夜に全員が集まり貴虎は斬月・真の方に変身をして廃病院を見ていた。

「ここに奴らがいるのでしょうか？」

「わからない。だがいずれにしても油断をするな？」

「おうさ」

五人は中へと入ると突然としてノイズが現れたので斬月・真はソニックアローを構えて発砲、響が殴り翼は剣を持ち切っていく。

奏は槍を構えて突撃をして突き刺した。クリスはガトリングを放ち援護をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

斬月・真は敵を倒しながらノイズを倒しているが響達の様子が少しだけ変だなと思っていると黒い何かが現れて襲い掛かろうとしてきた。

「ぐ!!」

「貴ちゃん!!」

「うおおおおおおおおおおお!!」

響が殴り黒いものは吹き飛ばされるが回転をして着地をする。斬月・真は現れたのを見て驚いている。

「あれはネフィリム・・・・・・・・だがなぜ？」

「流石ネフィリムを一度は倒している仮面ライダーさんと英雄さんたちですね。」

「ウエル博士!？」

「そういうことか・・・・・・・・岩国基地までのことを考えると自作自演つてことか。」

「ええその通りですよ。まあこのアンチLINKERはあなたには効いていない様子ですしね。」

四人が膝をついたのを見て斬月・真はソニックアローを構えて発砲

をするがネフィリムが収納された籠が上空のノイズがキャッチをして運ばれて行く。

「させるか！」

斬月・真はソニックアローを構えたがほかのノイズが邪魔をして当てることができない。

「つち!!」

翼は駆けだして脚部のスラスタで飛ぼうとしたが出力が上がらずに落下をしようが潜水艦が現れてそれを踏み台にしてノイズを切り裂いてネフィリムが収納されている檻を回収をしようとしたが槍が放たれて吹き飛ばされる。

「…………やはり現れるのだなマリア。」

【ソイヤー！イチゴスカッシュ！】

「!!」

斬月・真は後ろへと交わすと上空からイチゴアームズの鎧武が現れたので斬月・真は構えようとしたが刀身が伸ばされた剣が斬月・真のソニックアローをはじかせる。

「セレナか。」

「…………めんなさい」

鎧武はイチゴクナイを投げてきて斬月・真は交わすがセレナが接近をしてきたので彼はその短剣を奪い鎧武に投げつける。

「!!」

鎧武は交わすと斬月・真はソニックアローのところへと飛びつかんで発砲をする。矢が鎧武に当たり吹き飛ばされる。

斬月・真は振り返りソニックアローを使い切歌達の足元へと放つ。

「!!」

「二人とも去れ！これ以上私を怒らせるな!!」

「く!!」

二人は斬月・真の言葉を聞いて離脱をする。響とクリスは斬月・真の怒った声を聞いて驚いている。

それは奏も同じで GANG ニールの槍を抱えながらやってくる。

「貴ちゃん?」

「何でもない。」

貴虎は逃げ去るへりを見ながらソニックアローを構えたが透明化したので降ろす。

「逃げられてしまったか。」

「だがあのヘリコプター、ステルス機能を持っているのか？」

「わかりません。でも貴虎さんありがとうございます。」

「気にすることはない。(だがネフィリムが復活をするなんてな。いずれにしてもなんとかしないとイケないな。)」

斬月・真は心の中で呟きながら変身を解除をする。だがその様子を一人の女性が何かのベルトを装着をしていた。

「……………見せてもらう。呉島 貴虎」

果たしてこの女性の正体はいつたい？

浮気者!?!女性の正体!!

貴虎 side

廃病院の戦いでマリア達を逃がしてしまった私達、やはりあれはかつて私がセレナを助ける時に倒したネフィリムで間違いないだろう。今はこうして会社の仕事も一通り終わらせてきたので外を歩いていた。戦極ドライバーなどを懐に入れて念のために辺りをぶらつきながら歩いている。

「.....」

だがどうも誰かにつけられている気がしており、私は振り返るが誰もいない.....いったい誰なんだろうかと思いつきながら歩いているとまた視線を感じてしまう。

(やはり誰かにつけられている気がしてたまらないな。仕方がないあそこでやり過ぎすでしょう。)

細い穴があつたので私はスピードを上げてそこに入りこんで手をやり過ぎすことにした。社長としていいのだろうか?と思いつながら見ているが相手が通り過ぎた感触がしない。

「ねえ」

「!!」

私は振り返ると黒い長い髪を降ろしている女性がいたが容姿がバンドリに出てくる白金 燐子みたいな人物が声をかけてきたので驚いてしまう。

「呉島 貴虎ですよね?」

「ああそうだが?君は?」

「.....者」

「え?」

「この浮気者おおおおおおお!!」

「どあ!!」

浮気者!?!私は付き合ってもいないのになぜいきなりこの子は殴りかかってきたんだろうか?

「待ってくれ私は君のことを知らないし」

「……知らない？ですってええええええええええ!!」

彼女は懐からベルトのようなものを出してきた。あれは！フォーゼドライバー!?彼女はそれを腰に装着をするとスイッチを押している。

【スリー ツー ワン】

「変身!!」

姿が変わりライダー少女?でいいのかな?仮面ライダーフォーゼになっている。私は懐から戦極ドライバーを出してやむを得ず彼女と戦うためにメロンロックシールドをセットをする。

【ロックオン!ソイヤ!メロンアームズ!天下御免!】

メロンディフェンダーが装備されて私は腰の無双セイバーを抜いて構える。彼女は一体?!

貴虎 side 終了

「はああああああああああ!!」

ライダー少女のフォーゼは斬月に背中のスラスターを起動させて接近をして蹴りを入れてきた。

斬月はメロンディフェンダーでガードをして彼女をはじかせるとフォーゼドライバーの四つのスイッチの一番右側のロックトスイッチを押す。

【ロックト ON】

右手がロックトモジュールが装備されて噴射をして斬月は無双セイバーの引き金を引いて弾を発射させる。

フォーゼは回避をしてロックトパンチをお見舞いさせる。

「ぐ!!」

フォーゼはスイッチをOFFにして着地をして斬月は別のロックシールドを出してほかの形態へと変える。

【マンゴー!ロックオン!マンゴーアームズ!ファイトオブハンマー!】

マンゴーアームズへと変身をしてマンゴパニッシャーを構えてフォーゼに命中させてから斬月はとりあえず横の方へと出てフォーゼは追いかけてきた。

「逃がさない!!」

【ランチャーON】

「何!?!」

ミサイルが発射されて斬月は命中をしまい吹き飛ばされてしまう。一方で二課の方でも斬月が戦っていると聞いて奏は急いで走っていた。

(貴ちゃん無事でいてくれ!!)

一方で廃工場へと移動をした斬月はここなら遠慮なく戦うことができるのでフォーゼは着地をした。

「さていい加減思いだしたのかしら?」

「.....」

斬月は燐子の姿をした人物を見ても思いだすことができない状態である。だから無言でいるとライダー少女のフォーゼはイライラをしてきたのかスイッチを変えていく。

【チェンソーON!】【シザースON】

右足にチェンソーモジュールが左手にシザースモジュールが装備されて斬月に襲い掛かる。

左手のシザースモジュールでマンゴパニツシャーをつかんだ後にチェンソーモジュールで斬月のボディを切りつける。

「く!!」

「はああああああああああ!!」

「おりゃああああああああ!!」

「ぐあ!!」

フォーゼが吹き飛ばされたのを見て斬月は一体誰がやったのだろうと見てると奏が GANG ニールを纏いアームドギアの槍を振りまわして斬月の方を見る。

「大丈夫か貴ちゃん!!」

「ああ.....」

フォーゼの方は舌打ちをした後にモジュールをランチャーへと変えて発射させて地面に命中をして煙を発生させて撤退をした。

「貴ちゃん大丈夫?」

「ああ大丈夫だ奏（あの白金 燐子のような人物、私とどこで？）」

斬月は心の中で呟きながらフォーゼが去った方角を見ていた。

???
side

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．．．」

私はフォーゼドライバーを外して変身を解除をした。なんで？どうして？どうして覚えていないの？

あれだけ愛し合っていたのに．．．．．あの人は間違いなく前世で私の旦那だった人だ。優しく誰よりも頼れる旦那だった。なのに．．．．．どうして死んでしまったの？私は悲しみにくれた。

娘たちは私を慰めてくれていたがあの人がいない世界で、私は頑張って生きてきた。だけど子どもたちの世話などもしながら仕事もしていた。

元気に振るまつてきたけど．．．．．旦那が死んで3年が経ち子どもたちも大きくなっていった。

私は体が限界になりそのままなくなってしまい気づいたら白金燐子の姿でフォーゼドライバーとアストロスイッチと共に転生をしていた。

そしてテレビを見ていると呉島コーポレーションというのがこの世界にあるのに驚いていた。さらにノイズってシンフォギア!?の世界だったので驚いてしまう。

「．．．．．はあ．．．．．」

私はため息をついてあの人が記憶が失ってしまっているのかな？それとも私が姿が違うからかな？それにしても天羽 奏が近かったわね。

そこは私のところだよ？渡さないよ。そうこの私．．．．．青空景子がね。

「ふふふふあはははははははははははは!!」

さーて愛しい旦那の傍にいるのは私なのよーー待っていてね？

秋桜祭り

貴虎 side

あのフォーゼのようなものに襲われてから数日が経ち、リディアン音楽学園では秋桜祭りが行われる時期が近づいてきていた。

今回そのステージにプロジェクトドールズ達がゲストとして呼ばれたが私は今回は客として彼女たちのステージを見ることにした。車がりディアン学園前に到着をした私は変装をすることにした。流石に呉島コーポレーション社長がりディアン学園にいたらまずいからね。

さて到着をして私はサングラスなどを装着をして変装をする。様々な出し物をしているので本格的だなと思いつながら歩いていると二人の少女たちにぶつかってしまふ。

「あうー！」

「すまな……………」

「切ちゃん大丈夫……………」

なぜ二人がこんなところにいるのだろうか？てか調は私を見て固まっているのを見てもしかして正体がばれてしまったのか？

「貴虎兄ちゃん？」

「……………なぜ二人がここにいる？」

「えっとその……………」

ぐううううう……………腹の音が聞こえてきたのでチラツと見ていると切歌が顔を赤くしているのを見て私は仕方がないなど奢ることにした。

やがて私は奢った二人と別れた後ドールズがステージで歌を丁度披露をするところだったので間に合ったみたいだ

そこには妹のミサキとミュの二人も立っておりドールズ達の人気はすごいなー……………いやー誰が育てたのだろう？（（お前だよ！！））

うん今誰かに突っ込まれたが私は気にしないことにした。さてドールズ達の歌が終わり私は次の場所へ移動をしようとした時に声

が聞こえてきたので何かと別のステージで切歌と調が立っており
チャンピオンに挑戦と言っていたが……うん確かに物語では
そう言っていたな？

さてとりあえず私は彼女たちに任せて振り返ると燐子そっくりな
子が立っていた。やはり彼女の気配だったのか……。だがなぜ
だろう？彼女を見ていると落ち着くのは、そうまるであの時のよう
な。

「……………ここでは話しづらいでしょ？あっちで話しましょう？」

「そうだな。」

私は彼女と共に移動をする。だがその時に私は誰かがつけている
のを知らなかった。

貴虎 side 終了

貴虎と燐子そっくりな人物は学校の裏側へとやってきていた。こ
こならばあまり人がいないので彼女の正体を暴くのはいいだろうと
思った。

「……………覚えていないの私のこと？」

「……………」

「悟、宮子、康太のことを」

「待て、どうして君が前世の私の子どもたちのことを……………まさ
か!!」

貴虎は目を見開いた。彼女が言った名前は自分の子どもの名前、な
ら彼女は？

「そうよ私よ、青空 景子だよ」

「景子……………なんでお前が……………いやそもそもどうして私
だとわかったんだ？」

「そりゃあわかるわよ。何十年あなたの妻をやっていると思っ
ているのかしら？……………浮気者」

「待て待て待て、私は付き合ってもいないし結婚もしていないんだぞ
？」

「……………」

景子はじろーと貴虎を見ており彼自身もまさか前世の妻がこの世

界へと来ているとは思ってもいなかったのに驚いている。

「景子、あれから悟や宮子、康太はどうなったんだ？」

「三人ともあなたが死んでから元気がなくなっていたわ。特に宮子がね」

「……すまなかつたな。お前達全員に影響が出てしまったのだな？」

「……正直に言ったら私はショックだったよ？いきなりあなたが死んだことに……仕事から帰ってこなくて心配をしていたら通り魔に刺されて死んだって聞かされたときは私は倒れたわ。あなたが死んでからは心が空っぽになった感じだった。こうして会えたのあなたは覚えていないような感じだったから。」

「それに関してはお前が悪いぞ景子、前世とは違う姿をしたらわからないものだ。」

「ひどいわね。」

景子はぶんぶん怒っているがなにせ姿がバンドリの燐子の姿をしているので貴虎は苦笑いをしてると何かが走ってきていくのを見て彼自身も走る。

「私も行くー」

景子も一緒に行くと言達達が調たちを追いかけていた。彼自身も到着をすると景子が彼に抱き付いておんぶをしていたので奏とクリスは目からはいらいとをけしていた。

「ナア、貴チャン。ソノ後口ノ奴ハナンダ？」

「ソウダゼ貴虎兄チャン、アタシノ方ガデカイゼ？」

「……それよりも」

【ソイヤ！パインスカッシュュ！】

「離れる!!」

【!!!!】

貴虎は景子をおんぶをしたまま後ろの方へと飛び現れたのは鎧武パインアームズだ。

「何やっているんだ二人とも！」

「総司。」

「総司……」

「貴にい、悪いけどまだ捕まるわけにはいかねーんだ!!」

鎧武はカッティングブレードを倒してパイニアイアンを構える。

【ソイヤー・パインスカッシュュー!】

だがパイニアイアンを地面に叩きつけるだけでそのまま煙を発生させて逃げだした。貴虎は響に聞くことにした。

「響ちゃん、奴らはどこで決闘をすると言ったんだ?」

「えつとですね。カ・ディングル跡地と」

「……あそこか。」

貴虎は景子をおんぶをしたまま両手を組んでおり現れるのはネ
フィリムだなと……

ウエル博士野望

次の日、貴虎たちは調たちが果たし状として出した手紙の場所、かつて櫻井 了子事ファイネとの激闘をした場所カ・ディングル跡地へと向かっている。

「んでだ………なんでこいつがいるんだよ!!」

奏が叫んでいるのには理由がある。貴虎の横に前世の妻「青空 景子」がいるからである。

「別にいいじゃない?」

「ふざけるな!」

「二人とも喧嘩は後だ。そろそろ到着をするぞ。」

貴虎の言葉を聞いて二人は喧嘩をやめて貴虎は戦極ドライバーを装着をして斬月へと変身をして奏達もギアを纏い辺りを見ている。

「おいおいあいつら、あたしたちを呼んでおいていないじゃねーか。」
「………どうやら別のお客さんがいるみたいだぞ?」

斬月が言うのとノイズが現れてそれぞれ散開をして攻撃を開始をする。景子はフォーゼドライバーのスイッチを変えてONにする。

【チエーンアレイON】

右手にチエーンアレイモジュールが現れて振り回して攻撃をする。鉄球がノイズ達を粉砕をするとそのままスイッチを変える。

【ビートON】

音波が放たれてノイズ達を次々に分解をしていくと響が突撃をしてバンカーを叩きつけてノイズを倒す。

斬月は無双セイバーでノイズを切っけいき放たれた攻撃をメロンデیفエンダーでガードをしてから無双セイバーの銃口を向けてトリガーを引いて弾を放たれる。

「でああああああ!!」

翼はアームドギアを二刀流で構えてノイズを切っけいく。クリスはガトリングを放ちノイズ達に命中をして撃破していく。

「だがなぜノイズが現れるんだよ!」

「それは私が呼んだからですよ。」

「総司！あれがお前達がやりたかったことなのか!!」
「.....」

鎧武は無言でバナスピアーを構えているのを見て問答無用と考えてゲネシスドライバーをとりだしてゲネシスコアだけを外してプレートを外した後にコアを装着をする。

「なら私は、お前を倒す!!」

【チェリーエナジー!】

一度メロンロックシードを閉じた後にチェリーエナジーロックシードを装着をする。

【ロックオン】

カッティングブレードを倒す。

【ミックス！メロンアームズ！天下御免！ジンバーチェリー！ハハ——!!】

メロンアームズにチェリーエナジーアームズが合体をしてジンバー形態へと変わりメロンアームズジンバーチェリー形態へと変わり無双セイバーとソニックアローを構える。

「ぐああああああああああ!!」

「何?!」

斬月は後ろの方を見ると響の色が黒くなっていき食いちぎられた左手が再生をして目の前のネフィリムを殴っていく。

「一体何が.....」

「暴走.....」

「があああああああああああああ!!」

そのまま響はネフィリムをボロボロにした後ターゲットを変えたのか斬月の方へと向かってきた。

「!!」

その剛腕を斬月は両手でガードをしたが後ろの方へと吹き飛ばされてしまう。

(なんて威力をしてるんだ！両手が痺れてきて.....ぶ、武器が.....)

斬月は持っていた無双セイバーとソニックアローを痺れのあまり

に落としてしまい響が容赦なく斬月を殴ってしまう。

「がは!!」

「貴ちゃん!!」

「立花! 落ち着け!」

翼は背後に回り抑え込もうとしたが投げ飛ばされてしまう。

「どああああああああああ!!」

「翼!!」

「落ち着きなさい!!」

【ウインチON】

ウインチモジュールが現れて響の体を巻き付かせようとしたが彼女はそれを逆に引っ張り彼女の胴体にひじ打ちを叩きこんだ。

「が!!」

斬月は両手のしびれを感じていたがすぐに痺れがなくなったのを確認をしてエナジーロックシードを装着をして構える。

【ロックオン!】【ソイヤ! メロンスカツシュ!】【チェリーエナジー!】

放たれた矢がサクランボの形になり響を挟んで攻撃をした。

「があ!!」

響は当たり黒いオーラが解除されていくが斬月もそのまま膝をついて倒れる。

「貴ちゃん!!」

「貴虎兄ちゃん!!」

すでにフォーゼが駆け寄り左側のスイッチを変える。

【メデイカルON】

メデイカルモジュールを起動させて斬月の傷を治すために変身を解除をする。一方で残された翼は響を見て目を見開く。

「た、立花……………」

「どうした翼!!」

翼が目を見開いているのを見て奏とクリスも響が倒れた場所へと行くと彼女の体から何かがつきだしているのを見て斬月はボロボロの状態だが起き上がる。

「こ、これは……」

「貴ちゃん無茶をするなよ。」

「急いで彼女を運ばないとな。」

「それはあなたも一緒でしょうが……はあ……」

景子はため息をついて急いで潜水艦へと戻るのであった。

響の危機

貴虎 side

暴走をした響ちゃんの猛攻を受けてしまい私はなぜか二課の潜水艦のベットで寝かされている。私の近くの椅子に奏は座ってリングを剥いてくれている。

「全く貴ちゃん、斬月を纏っているとはいえあれだけ攻撃を受けたんだから当然だろう?」

「……だからといってベットに寝かされるのな。案外退屈なものだな」

「だろ? あたしも最初はそんな感じだったぜ?」

奏と話ながらそういえば響ちゃんの姿がないので私は奏に聞くことにした。まあ前世のこともあり知っているが一応ね?

「奏、響ちゃんの姿が見えないが……」

「……あの貴ちゃん……」

「……もしかして彼女が危険な状態か?」

「……流石だよ貴ちゃん、あたしのせいだ……」

「奏……」

「あたしのガングニールが刺さったせいで響は……」

私は奏を抱きしめる。

「貴……ちゃん?」

「……今は誰もいない私だけだ泣く時は私の胸で泣け……」

「ううう……うああああ……ああああああああああああああ!!」

ああああああああああああああああああああああああ!!」

奏は子どものように泣いており私は彼女の涙を流させることしかできなかった。やはり彼女がギアを纏うほど危険性が高まっているってことか……原作通りだな。やがて落ち着いたのか彼女は顔を赤くしながら私から離れる。

「……ごめん」

「気にするな。これぐらいどうってことないさ」

私はそういい立ちあがろうとしたがバランスを崩してしまい奏に

とH I B I K Iという文字が見えたのでミュに聞いてみる。

「なあミュ、この戦っている人は？」

「あ、お兄ちゃんお帰りー！いやーこのH I B I K Iって人さあたしがやっているゲームでいつも戦っている人なんだよ！今回は勝っているけどお互いにライバルって感じなんだよね。」

「そ、そうか………」

響ちゃんへ、私の妹と戦っているのかーい！

貴虎side終了

一方でパーフェクトパズルをしている響は負けたー！と言っている。未来は苦笑いをしている。

「くうこのMIYUさん強い！今回は負けただけどノックアウトファイターでは負けないからね!!」

「ねえ響、そのMIYUさんって人は強いのか？」

「強いね、色んなゲームをしているけどこの人と戦うときだけは五分五分なんだよね。今回も連鎖で負けちゃったからね。あ！まだ勝負をするってもちろん受けて立つ!!」

「あはははは………」

未来は苦笑いをしながらゲームをしている響をみてため息をつく。今の自分に何ができるのだろうか………貴虎にお願いをして戦極ドライバーを作ってもらった方がいいのだろうか………

未来、呉島コーポレーションへ

「ここが呉島コーポレーションの本社……」

小日向 未来は呉島コーポレーションの玄関前にやってきていた。彼女は戦極ドライバーのこともあり貴虎に会うためにやってきた。

だがいぎやってきたのはいいが……どう言って貴虎と会えばいいのか悩んでしまう。勢いで会社の前まで来たが……どうしたらいいのだろうかと思いついてみると彼女が困っている姿を見て苦笑いをしている人物がいた。

貴虎本人であった。

（何をしているのだろうか彼女は、なぜ私の会社の前にいるのだろうか？てか先ほどから行動が気になってしまい中に入ろうと思ったが……）

「坊ちゃまいかがしますか？」

「可愛そうだから声をかけることにする。」

貴虎は車から降りると未来に声をかける。

「そこで何をしているんだ？」

「ひゃあああああああああ!!」

未来は後ろから声をかけられてしまったので驚いて変な声を出してしまう。貴虎自身は苦笑いをしながらとりあえず会社の中へと入って社長室の方へと連れて行く。

彼女はドキドキしながら会社の中を歩いており社長室へと案内をしてもらいソファアールに座ると彼も同じようにソファアールへと座る。

「さて未来ちゃん、君がなぜ呉島コーポレーションの入り口で立っていたのか説明をしてもらおうかな？」

「………お願いです貴虎さん、私に戦う力をください。」

「戦う力……」

彼女はずっと悩んでいたんだなと思いつつも貴虎は戦極ドライバーはないという。

「残念ながら戦極ドライバーは私がついているこれしかない。なぜ向こうに戦極ドライバーがあるのかわからないが……だが私は

戦極ドライバーを渡すこともできないんだ。」

「そ、そんな……」

未来はショックを受けているが戦極ドライバーは彼が持っているものと向こうで彼が持っている以外はゲネシスドライバーがあるぐらいなのだが……貴虎は立ちあがると何かのドライバーを出した。

「これって……」

「ゲネシスドライバーとピーチエナジーロックシードだ。戦極ドライバーはないが……こちらはあるから君に渡すでしょう。」

「ありがとうございます!!」

未来はゲネシスドライバーを懐にしまいエナジーロックシードもしまった。

貴虎 side

ゲネシスドライバーを渡したが、あれは私が普段使用をしているのとは違う予備のものである。戦極ドライバーの方は予備に二つほどあるが……いずれにしても原作通りに言っているが……そろそろフロンティアが浮上をする事件と未来ちゃんがさらわれるイベントが始まる。

「……」

私は両手を握りしめていた。この間の響ちゃんの本気の攻撃を受けて以降両手が動かしづらい気がしているが気のせいだな……いずれにしてもフロンティアが浮上をしたら世界が動きだすな。

「私も動きだすでしょう。」

するとスマホが鳴っているのに気づいて出る。

「私です。」

『貴虎君すまない、ウエル博士が響ちゃん達にノイズを放ってきたんだ。すまないが……』

「わかりました。すぐに出ます!!」

私は通信を切ると仕事を朱果に任せて斬月へと変身をして出撃をする。

貴虎 side 終了

一方で未来は呉島コーポレーションを後にして響達と合流をした時にウエル博士が現れて持っているソロモンの杖を持ちノイズを出してきた。

未来はゲネシスドライバーを使おうとしたが響が前に立ち生身でノイズを殴ったのだ。

「ビツキー!?!」

そこから GANG ニールを纏いノイズを殴り飛ばして吹き飛ばす。未来は GANG ニールを纏う響を見て目を見開いている。このまま戦い続けたら響は死んでしまうと……彼女は意を決してゲネシスドライバーを出そうとしたが弾が放たれてノイズが倒される。

「あ、あれは!!」

「白い戦士さま!!」

「ゆ、弓美……」

斬月は無双セイバーを構えるとノイズの方へとダッシュをしてノイズを切り裂いていく。ウエル博士は恐怖で次々にノイズを出してきたが斬月は腰の戦極ドライバーのカツティングブレードを倒す。

【ソイヤ!・メロンスカッシュュ!】

「は!!」

無双セイバーとメロンデイフェンダーにエネルギーが纏われて回転斬りをしてノイズ達は次々に切り裂いた。

斬月はウエル博士の方を見ていると三人の人物が着地をして斬月を見て目を見開いた。

「……」

セレナ、調、切歌の三人はギアを構えているが斬月に向けている。だが調、切歌の二人は涙目になっておりセレナ自身も震えている。

すると後ろから何かが刺さって三人は見ると LINKER が刺された。

「な!?!」

「まだ LINKER の時間あるのに!!」

「何をする気なの!?!」

「決まっているじゃないですか!! 奴らを倒す為に絶唱を使うんですよ

!!

「絶唱?!!」

「な!!」

三人は目を見開いた。斬月事貴虎に対して絶唱を使えとウエル博士は言ってきたのだ。調と切歌は涙を流しておりセレナも涙を流した。

三人はギアを構えているが……

「嫌デース!」

「できないよ!!」

「嫌です!!絶唱を使うなんて!!できません!!」

「何を言っている!!こいつを倒すには絶唱を使うしかないですよ!!サツサとしなさい!!」

ウエルの行動に斬月はもっている無双セイバーに力を込められており彼を斬ろうと思っていた。

「貴様!!自分の身勝手を彼女達を使おうとするな!!そんな貴様を許すわけにはいかない!!」

斬月はゆっくりと歩いていきウエル博士はソロモンの杖を使いノイズ達を出して斬月に攻撃をしようとするが彼は歩いていくと次々にノイズ達が倒されて行く。

「来るな……来るな来るな来るなあああああああああああああああああ!!」

「……………」

【ソイヤ!オレンジスカッシュ!】

上空から鎧武が放った蹴りを受けて斬月は吹き飛ばされてしまう。

「が!!」

「な!!」

「総司?」

「三人とも俺達がやることを忘れるな!!」

「総司!!」

「……………」

無双セイバーを構えて発砲をして斬月のボディに当ててから撤退

をする。そこにほかのメンバーも到着をしたが斬月は膝をついており景子達が駆けつける。

「大丈夫？」

「……ああ（総司、原作通りに動いているつもりなのか？それではウエルの思う通りになってしまっただぞ!!）」

斬月は心の中で呟きながら去っていく鎧武達のほう角をみるのであった。

新たなアーマードライダー

呉島コーポレーションの社長室、貴虎は社長室で新たなゲームを考えているがなかなか難しいなと思いつながら次はどのようなゲームを作ろうかな?と思いつながらプロジェクトドルズ達の絵を見ていた。

「パズルゲーム・・・恋愛ゲーム・・・うーん」

「社長どうしました?」

「藤果か、いや新しいゲームをドルズ達を使ったらどうかなんて思っ
てね。」

「あーアイドルを育てるゲームですか?」

「いや恋愛、それともパズルゲームかな?」

「なるほど、それはいいかもしれませんが?しかも本人たちがボイスを担当をすればおそらくゲーム的には面白そうですね(笑)」

貴虎の意見に藤果も賛成をしたので彼は次の会議でその話をしよう
と決意をする。一方で響と共にスカイツリーへ遊びに来ていた未
来、彼女は懐にゲネシスドライバーとピーチエナジーロックシードを
入れておりいつでも変身ができるようにしていた。

(何の音だろうか?ノイズ!?)

突然として爆発が起こりノイズまで現れて響は GANG ニールを纏
おうとしたが未来が立って懐からゲネシスドライバーを出したので
響は驚いている。

「未来、それは!?!」

「響・・・見ていて、これが私の!」

そういつて腰に装着をしてピーチエナジーロックシードを解除を
する。

【ピーチエナジー!ロックオン!ソーダー・・・ピーチエナジ
アームズ!】

未来の姿が変わりアーマードライダーマリカに変身をする。響は
彼女が変わったことに驚いている。

「み・・・く?」

「あなたたちの運、試してあげる!!」

「ソニックアロー」

ソニックアローが現れて彼女は引くとエネルギーが溜められて放つと矢が飛んで行きノイズ達に命中をして彼女は次々に現れるノイズに対して切っていく。

(だけどどうしてノイズがこんなにも！すごい……力がみなぎってくる!!)

一方で連絡を聞いた貴虎も斬月に変身をして現場に到着、大量のノイズに対してブドウアームズの姿なのでブドウ龍砲を放ち撃破していく。

「数が多いな……おそらく未来ちゃんがマリカを使用してもこの数は……」

「リミットブレイク」

「だがこちらも増援は来ているさ。」

斬月は仮面の中でふと笑うと上空からロケットドリルキックで現れたライダー少女フォーゼ、隣に奏、翼、クリスも同じように着地をする。

斬月はダンテライナーに乗りながら上空から攻撃をしてくるノイズに対して発砲をする。

「よしー！」

フォーゼはドリルスイッチを解除をしてロケットモジュールを起動させて上空へと飛びノイズを倒していく。

「いいよなーあれ、あたしたちも空飛びたいぜ！」

「だがあれは限定モード、いえば出力を抑えている状態だからな。」

「貴虎兄ちゃんのあれ乗ってみたいぜ。」

三人がじーっとダンテライナーを見ており斬月は腰のカツティングブレードを倒す。

「ソイヤ！ブドウスカッシュュ！」

「ランダムシュートだ。」

放たれた弾丸が次々に命中をしてノイズ達は撃破された。斬月はゆっくりとダンテライナーを着地させて元のロックシード形態へと戻す。

そこにマリカと響が現れて彼女は変身を解除をする。

「小日向!？」

「貴ちゃんどういことだ!!」

「すまない、私がエナジーロックスードなどを渡したんだよ。」

斬月は変身を解除をして爆発をしたスカイツリーの方を見ていた。

(なるほど原作通りならマリカがナスターシヤを連れて脱出をするさいにアメリカのエージェントたちが仕掛けたのが爆発をしたのだな。だがマリカに変身をしたことで未来ちゃんは連れ去られることはなかったか……。だが問題は響ちゃんの中にある神獣鏡の力を使わないと彼女の中のガングニールの破片が……。)

貴虎はどうかできないのか考えることにした。

浮上をした巨大なもの

貴虎 side

会社の方は念のために臨時の休業をしてもらい私は二課の潜水艦に搭乗をしている。未来君がさらわれていないので神獣鏡に関してどうしたらいいのだろうか?と考えてしまう。

「……………」

「何考えているの? (もしかしてこの後のことかしら?)」

「ああそうだ。」

響君の中にある GANG NIIL を排除する方法が神獣鏡しかない。だが今未来君はアーマードライダーマリカに変身をして一緒に搭乗をしている。

「貴ちゃんどうしたんだ?」

「全員、何かの衝撃に備えるんだ!」

「いったい何が? どあ!!」

突然として地震が発生をして一体何事かと見ていると遺跡みたいなのが発生をして全員が見ているが私達からしたら何がってのはわかる。

「フロンティア……………」

そう奴らの狙いはフロンティアを浮上させること、確か原作では神鏡獣だけの力では浮上させるだけがやっとだったのを覚えている。その後ウエルの奴がネフィリムの細胞を自分の左手に移植をしてフロンティアのコントロールを奪うんだったな。

私は戦極ドライバーを腰に装着をしてメロンアームズに変身をして先行をする。フロンティアへ近づこうとしたときノイズが現れて無双セイバーを抜いて切りかかる。

「はあああああああああ!!」

【チエーンアレイON!】

「せい!!」

右手のチエーンアレイモジュールを振りまわしてノイズ達を次々に攻撃をしてノイズを撃破していく。

ほかのメンバーも響以外が現れてマリカも変身をしてソニックアローでノイズを切っていく。

「えいえいえい!!」

(可愛い叫びだなー(ー(ー))

と心の中で思いながら私はフロンティアの方へと突撃をしよう toward 向かおうとしたが

【バナナスカッシュュ!】

「が!!」

バナナ型のエネルギーを受けて斬月は吹き飛ばされた。

「貴虎兄ちゃん!」

「あれは!」

バナナアームズを装備をした鎧武が現れて彼は飛び降りてバナスピアーを構える。斬月は立ちあがり構える。

「総司!」

「悪いが……ここから先は行かせねえ!!」

総司の気迫が前とは違うのに気づいて貴虎は構え直そうとしたが鋸、鎌、短剣が飛んできて鎧武は交わす。

「デース!」

「……」

「総司……」

「切歌、調、セレナねえ!?なんで!!」

斬月達も突然として三人が鎧武に攻撃をしたので驚いている。

「もうこれ以上貴虎兄さんを攻撃をするなんてできない!!」

「その通りデース!」

「……」

「セレナねえもそうなのか?」

「そうよ。これ以上……ウエル博士の言う通りに動くことなんてできない。それに……」

「『好きな人に攻撃をするなんて私達にはできない!!』」

「はあ!?!」

「あ?」

「何?」

「.....え?」

全員が困惑をしていた。切歌、調、セレナの三人から好きな人という単語が出てきて彼のが好きな人物達は普段出さないような低い声を出しており貴虎自身は混乱をしていた。

響は立ちあがり外に飛びだす。一方でフロンティアの中枢部にあ
る神獣鏡が保管されている場所.....神獣鏡は何かに応答をし
て揺れている。

「これは.....神獣鏡は何かに応答をしている?」

一方で外では

「.....俺も負けるわけにはいかない!!マリアのためにも!!」

すると彼が持っているエナジーロックシールドが光りだして彼はゲ
ネシスコアをとりだしてプレート部分を外してセットをする。

【レモンエナジー!】

そのままゲネシスコアの方にセットをしてさらにオレンジロック
シールドもセットをしてカッティングブレードを倒す。

【ミックス!オレンジアームズ!花道!ONステージ!ミックス!ジ
ンバーレモン!ハハー!】

ジンバーレモンになりソニックアローを構えた。貴虎もそれに気
づいてダツシユをして放たれた矢をメロンデイフェンダーでガード
をする。

「ぐううううううううううう.....」

【「貴虎(兄さん)さん!!」】

「くらいやがれ!!」

クリスはミサイルを発射させて鎧武に放つがカッティングブレ
ードを倒す。

【ソイヤ!オレンジスカッシュ!ジンバーレモンスカッシュ!】

「せいや!!」

ソニックアローの斬撃でクリスが放ったミサイルを全て破壊され
る。

「嘘だろ!?!」

するとフロンティアから何かが飛んできてマリカに向かって飛んで行く。

「え?」

「あれは!!」

ジンバーレモンの鎧武と斬月も飛んで行く神獣鏡を見て驚いている。

「な!?なんであれが!!」

「.....」

するとマリカの変身が解除されて未来は神獣鏡を装着をしていた。

「えつとこれは.....」

「おいおいまじかよ。」

「とりあえずどうしたらいいのでしょうか?」

全員で考えていると突然としてフロンティアが動きだそうとしていたので何事かと思いい見ていると響が外に出ているので全員が見ている。

「立花?」

「なぜお前が!!」

「.....呼んでいる気がします!!」

「フロンティアか.....だが君は GANG ニールを装着をするのは危険すぎる。」

奏達も首を縦に振り彼女は響の中にある GANG ニールを取り除くことができないのかと思いい考えていると斬月は一か八かの方法をお勧めした。

「方法は一つ、未来ちゃん.....その神獣鏡にはシンフォギアの力を取り除くことができる力がある。だが.....もし間違えれば響ちゃんは死んでしまう可能性がある。」

「!!」

「あんだ.....」

「だが方法がそれしか浮かばない。」お願いします!」響ちゃん!それがどういう意味かわかっているのかい!!」

「わかっています。だけど私は未来を.....皆さんを信じていま

すから!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「響、本当にいいんだね?」

「お願い未来!」

「わかった・・・・・・・・」

響はガングニールを纏い未来は神鏡獣の力を使い彼女の中にあるガングニールだけを解除をするためにビームが放たれて響はその砲撃を受ける。

すると貴虎が持っていたシンフォギアロックシールドが光りだして響の方へと飛んで行く。

全員が見ているとシンフォギアロックシールドが勝手に解除された。するとイガリマ、シウルシヤガナ、アガートラームの三人のギアペンダントが光りだしてシンフォギアロックシールドに命中をする。

【ロックオン!シンフォギアアームズ!奇跡の歌が響き渡る!】

すると彼女の体が光りだして全員が目を閉じると響は再びガングニールが纏われていた。斬月の手にはシンフォギアロックシールドが戻りさらに色などが変わっていた。

「これって・・・・・・・・ガングニールが・・・・・・・・」

「おそらくシンフォギアロックシールドが君に奇跡の力を与えた。」

「力が・・・・・・・・力がみなぎってきます!!」

すると何かが飛びだしていくのを見て鎧武は仮面の奥で目を見開いている。

「ママ!!」

「何・・・・・・・・よし!」

彼は何かを思いついたのかスイカロックシールドをセットをしてカッティングブレードを倒す。

【スイカアームズ!ジャイロモード!】

そのまま飛びあがり全員にフロンティアへと行くように指示を出す。

事態は最悪な状況

「くそ………」

スイカアームズになっっている斬月はなんとか追いかけているがこのままではやばいと思ひスイカアームズのリミッターを解除をしてスピードを上げてたが火花を散らし始めたので彼はナスターシヤが乗っている管理ブロックに到着をして彼はメロンアームズに変身をして飛び乗る。

「ナスターシヤ教授！」

「あ、あなたは………どうしてここまで………」

「あなたが死んでしまったら悲しむものがいます。だからこそ私はここに来たのです。」

斬月は素晴らしい彼女が何かをしようとしているのを見てフォニックゲインを使用することで月の起動を元に戻すことができるのがわかり斬月はその作業の手伝いをする。

一方で地上では鎧武達はメインコンピュータに到着をした。だがそこにはウエル博士が左手を変貌させておりネフィリムを放つてきた。

「こいつら!!」

鎧武は無双セイバーとソニックアローの二刀流で攻撃をしていき撃破していく。

「てめえらのせいで貴ちゃんがあああああああ!!」

奏は怒り心頭でもっているギアを振りまわしてネフィリム突き刺していく。再びギアを纏うことに成功をした響は蹴りを入れているが奏の戦い方が怒りの戦い方をしているのを見てどう声をかけたらいいのか悩んでいた。

「響………」

未来は神獣鏡を纏いながらビームを放ち撃破した。セレナ達はマリアのところへと行った。

「姉さん！」

「ぎ、三人とも………ママが………ママが！」

ズではナスターシャ教授を連れていくことはできない。一体どうすればいいのだろうか？)

斬月はこのままでは二人とも死んでしまうのでどうすればいいのだろうか？と思いつながら考えている。

一方でネフィリムと交戦をしているシンフォギア装者達はなんとかフロンティア事ネフィリムが宝物庫に閉じ込めたことでソロモンの杖事大爆発を起こしてフロンティア事件は終結をしたが……誰もが涙を流していた。

「貴ちゃん……貴ちゃん!!」

「貴虎にイイイイイイイイイイ!!」

すると後ろから扉が現れて全員が構えていると現れたのは斬月とナスターシャが現れる。

「ママ!!」

「貴ちゃん!!」

彼らが出た後扉は消えていき斬月も変身が解除される。突然として現れた謎の扉がなかったら自分たちは死んでいたので感謝をする。

戦いの疲れ

フロンティア事件はシンフォギア装者たちのエクストライブモード及びソロモンの杖を使いネフィリムをノイズ達が収納されているバビロニアの宝物庫へと消滅をさせた。

だが貴虎とナスターシャが宇宙に取り残されていたが謎の扉から二人が現れて事件は本当の意味で解決をした。

そして貴虎は呉島家へと帰ったのはいいが、戦いの疲れなどが出てしまい部屋についた後そのまま眠ってしまう。

それはクリスも同じで自分の部屋に到着をした後に眠りについてしまいミサキとミュは首をかしげてしまう。

「ねえお姉ちゃん。」

「何?」

「どうしてお兄ちゃんとクリス、自分の部屋についたら眠ったのかな?」

「……………」

「お姉ちゃん?」

「あーごめん何でもないわ。でも確かに最近兄さん、疲れている様子だったけど会社で何かあったのかな?」

二人は貴虎とクリスがノイズ相手に戦っていることを知らないのである。特に貴虎は呉島コーポレーションの社長及びプロジェクトドルズの社長も兼任をしているので疲れがたまるのは当然である。

その様子をじいは見えており眠っている彼の部屋の方へと移動をする。

「……………坊ちやま。」

『じいか?』

「起きていらっしやたのですか?失礼します。」

扉を開けて中に入ると貴虎は起きており彼は近づいた。

「坊ちやま、無理をしないけませんか?フロンティア事件の際に色々動いたのは知っていますので、体の方はどうですか?」

彼は手を動かそうとしたが力が入ってこないのです。社長なども兼任

などをして斬月として戦ってきたので疲れがかなり溜まってしまっているようだと感じていた。じいのほうも何かを察していたのかじいは仕事を休むように言い貴虎は反対をしようとしたが断られてしまう。

「坊ちやま、あなたさまの体は一人ではごさいます。そうですね……呉島家の別荘に行きゆつくりと体を休んでください。後はもう一人の方と一緒に行ってくださいね？」

「もう一人？私以外に呉島家の別荘に案内をするのか？」

「ええ彼女なら安心をして坊ちやまと一緒に行かせることができますので……」

貴虎はわかったといいベットに眠ることにしてじいも部屋を出て例の人物に連絡をすることにした。

「もしもし弦十郎殿ですね？はい……実はぼっちゃまを呉島家の別荘へと行かせることにしまして……それでなのですが……はい、はい、彼女をお願いをしてもよろしいですか？はいはいではよろしくお願いいたします。」

じいはスマホを切るとメイド達に命じて準備などが整われていく、密かに進んでいくじいの作戦とは？果たして呉島家の別荘に行く人物とは一体？

別荘へ

貴虎 side

それから色々準備をして二日後に別荘へと行くために車に乗りこんだがもう一人いることに気づいた。いったい誰だろうと見ていると……知り合いが乗っている。

「よう貴ちゃん。」

「奏？もしかしてじいが言っていたもう一人ってのはお前のことだったのか？」

「おうよ、貴ちゃん。じいさんが言っていたのはあたしのことだよ。それじゃあ行こうぜ!!」

「お、おう」

奏の勢いに押されてしまい貴虎は車に乗り別荘の方へと移動をする。彼は車の中に乗りながら別荘の場所はいくつもあるのだが……いったいどこへ連れて行くのだろうかと思いつながら乗っていると奏が話しかけてきた。

「どうしたんだ貴ちゃん？」

「いや、どこに行くのだろうかと思うただけだ。まあ私の体の疲れを休むためってのも目的だからな。」

「……そうかい。」

「変な奏。」

彼は素晴らしい懐から戦極ドライバーをとりだしてメロンロックスードを出していた。チエックつてのものもあるが……色々使ってきている道具なのでメンテナンスをすることにした。

奏はその様子を見ながらもスマホを見てほかのメンバー達から嫉妬のラインが来ているがスルーをして、貴虎の様子を見ながら写真を撮るのであった。

やがて車は別荘に到着をして二人は降りて荷物などを置いてメイドがいたので挨拶をする。

「これは坊ちやまようこそ。」

「ああご苦労だな、今日からお世話になるよ。」

「話はじいや様から聞いております。ゆっくりとしてください。」

二人は部屋に荷物を置くと合流をしてリビングの方へと移動をして貴虎は新聞を読みながらロックシードをじーっと見ながら懐にしまいプロジェクトールズ達の仕事をしようとしたが……今は仕事をやる道具は全て没収をされてしまったのでそうだったなと思いつながら奏がため息をついた。

「はあ……貴ちゃん、仕事などを休むように言われたのに仕事をしようとしてどうするんだよ。」

「……そうだったな。」

貴虎はそういう仕事のこととは忘れて体を休むためにどうしようかと思いつながらのんびりと過ごすことにした。

一方でSONGへと変わった二課、貴虎と奏が二人きりで過ごすと言われていたので翼達は不機嫌になっていた。

「奏だけずるい……」

「なんだよそりゃー！」

「デース!!」

「……」

「はあ……」

「貴虎さーん！」

「どうしてこうなるのよ。」

「さあ?」

マリア達は落ち込んでいるメンバーを見ながらどうしてこうなったのだろうかと思いつながら準備をすることにした。

場所が変わり別荘地では奏がうーんと両手を伸ばしており貴虎はコーヒーを飲みながら色々とチェックをしていた。

「奏、そういうえばツヴァイウィングはこれからどうする気なんだ?」

「あーそれに関してだけだよ。翼が海外に行きたいって言うよ。あたしはどうしようか悩んでいるんだよな。だけどそろそろここで区切りを付けた方がいいじゃないかなと思ってるな。」

「色々と考えているのだな?」

「まあな、貴ちゃんのところは?」

「うちは新しくメンバーを募集をしているところだな。そのオーディションも準備を進めているところだ。かなりの応募だからな全国にてやっているんだよ。」

「おいおいすげーな。」

「それほどうちのプロジェクトドールズに入りたいのだろう。」

貴虎はそういう奏も納得をしたのかコーヒーを飲むことにした。その夜貴虎は夜空を見上げながら見ていた。

(次の話的にキャロル達なのだな、問題はどのように彼女達を救われないといけないのか考えないといけないな。せめて彼女が幸せになればいいのだが……いったいどうしたらいいのだろうか?)

「貴ちゃんどうしたんだ?」

貴虎は考えていると奏が声をかけてきたので振り返ると奏がお風呂上りだったのかお色気が出ており貴虎自身は驚いてしまう。

「にししししどうしたんだ?」

「別に何でもない。」

「綺麗な夜空だな。」

「そうだな。」

「なあ貴ちゃん……」

「なんうぐー!」

振り返ると奏が近づいてキスをしてきた。彼女はそのまま舌を絡めてきて貴虎は驚いてしまう。

「か、奏?」

「あたしな、貴ちゃんのことが好きなんだ!ずっと戦っている姿を見てあたしは失いたくなかった。貴ちゃんがあたしのそばから消えてしまうじゃないかって怖いんだよ……だからあたしは……」

貴虎は告白を受けて無言でいた。だが……

「奏、それは……」

「わかっているさ、貴ちゃんのこと好きなのもいるが……フライングだってことはわかるぜ?でもな自分の気持ちは伝えないと勝てないってことも教えてやるぜ?だろ?皆。」

「え？」

スマホをとりだしていたので見ると通話が起動をしているのを見てまさかと思い見ていると

『奏………ずるいよ………』

『そうだぜ!!あんた自分だけぬけがけをしやがって!!』

全員がぶーぶーと文句を言っているのを聞いて凶られた?と思いながら貴虎は過ごすのであった。

ばれた

貴虎 side

別荘地で奏と共に二週間ほど過ごした。言っておくが何もしていないからな？彼女がキスをしてきたぐらいとだけ書いておく。

弦十郎さん曰く、今のところノイズなどが発生をしていることはないのでのんびりとしていた。

会社の方も、藤果や社員たちが頑張っているみたいなのでホツとしているが彼女曰く自分が休まないのが大変だと言っていたので反省をする。

そして十分と休んだ私は、じいやに迎えに来てもらい奏と共に帰宅をする。奏の家へと送った後に屋敷の方へと帰った。

「ただいま。」

「……………おかえり。」

ミサキとミュの二人の声だが、なぜか元気がないようだが……………
いったいどうしたのだろうか？

リビングの方へと移動をして、扉を開けるとクリスが正座をしておりミサキとミュの二人はこちらに気づいた。

「兄さん。」

「お兄ちゃん、クリスから色々聞いたよ？」

聞いた？一体何を聞いたんだ？

「兄さん、私たちだって色々調べたりします。だからこそ知ったんです……………兄さんが白い武者戦士だって、確信を得たわけじゃなかったんです。」

まさか二人にばれてしまったのか、ってことはクリスが正座をされているのは私の戦いなどを話したってことになるな。

「まあそうだな。お前たちの言う通り私は白い武者事斬月として戦っていた。」

「……………やっぱり……………」

「なああたしはいつまで正座をしていけばいいんだよ。」

クリスが言っているが、いつから正座をしていたんだ？わざわざ彼

女から色々と聞いたぐらいしか思いつかないのだが？

「ちなみにだが、クリスマスから私のことを聞いたのか？」

「まあ脅したと言った方がいいかな？」

拝啓父上、母上……妹たちが怖いのですが？誰に似たのでしょうか？まあそんなこんなで斬月としての正体がばれてしまったがやめるつもりはないのでそのまま続行である。

別に誰かに強制でやらされているわけじゃないからな、これに関しては私の使命だと思っている。

貴虎 side 終了

それから数日が経ちマリア達が解放された。彼女達が住む家に関しては呉島家がいいとセレナ、切歌、調の三人がいいマリアと総司も一緒に住むことになりナスターシヤ教授も同様である。

屋敷では部屋の掃除をメイドさん達がこなしているのでミサキとミュはまた誰か住むのだろうかと思いつながりリビングで待っていると扉が開いて貴虎が入ってきたがさらに入ってきた人物を見て驚いている。

「ええええええええええええええええええええ!!」

「今日から一緒に住むこととなった」「マリア・カデンツヴァナ・イヴさん!」って知っていたか？」

「そうだよ!あの歌姫がどうしてうちに!」

「てかお兄ちゃん!今何て言ったの!」

「一緒に住むことになったと聞いたが?」

「どええええええええええええええええ!!」

「ねえ貴虎兄さん、この二人って東京ドールズなの?」

「ああミサキとミュの二人、私の妹でもあるんだ。」

「サインください!!」

2人はマリアにサインを求めて彼女も応対をする。二人は嬉しそうにサインをもらって嬉しいのか喜んでいた。

貴虎も彼女達が喜んでくれたのでホッとしていた。調と切歌は貴虎と一緒に暮らせると喜んでおりセレナも二人のように顔は出さないが心の中でホッとしている中貴虎はこの後何かあったような

気がして首をかしげていた。

第三章 新たなノイズの出現、斬月新たな姿へ 現れた謎のノイズ

貴虎 side

「ふう………」

あれから数か月が経ち、翼がリティアン学園を卒業をし、我が呉島コーポレーションとアイドルプロダクションは大きくなっていった。

流石に海外進出は考えていないが、一応ゲームなどはバグなどがなく、通常通りに売れておりさらにほかのゲームのバージョンを上げていき、様々なステージやギミックなどが追加されたのを売ったりしている。

プロジェクトドールズの方も新メンバーも増えており活動範囲を広げたりしている。妹のミサキはドラマに出たり、ミュは……あのロボットの感じなのでどうやって売ればいいのか？と思っていたら、なんでか知らないがミサキ曰くYと名乗ってゲーム大会に出ては優勝していると聞いて苦笑いをしていた。

あーもしかして、この間…… 呉島コーポレーション主催のゲーム大会にどこかで見えたことがある人物がいたけど、あれミュだったのかい！

今海外にツヴァイウィングとセレナ、マリアの四人と護衛として総司がいるから問題ないと思うが…… 何かを忘れている気がするな？

「ん？」

通信機が鳴っているの。私は出ると弦十郎さんから連絡が来ていた。

『貴虎君、今大丈夫かい？』

「はい、仕事などもひと段落をしたところなのでどうしました？」

『実は、火災事件が発生をして、クリス君、響君が出ているのだが……』

「そういうことですか、わかりました。現場はこちらも近いので向かいます。」

『すまないが頼む。』

通信を切り、秘書の朱果に確認をしてから斬月に変身をして現場へと急行をする。

貴虎 side 終了

一方で火災現場ではヘリコプターが墜落されて、クリスは振り返ると謎の人物が立っておりイチイバルを纏う。

「てめえが何者かは知らねーが！覚悟しやがれ!!」

「シンフォギアを確認、ドハデにまいろう！」

「へー！」

クリスはギアをガトリング砲へと変えて発砲をしたが、相手は交わしてメダルを発射させて攻撃をしてきた。

彼女は回避をしてミサイルを発射させて相手は素早くかわした。

(なんていうスピードだ！あの馬鹿は中で何をしてやがる!!)

相手は接近をしてクリスに連続した蹴りを放つが、彼女はギアでガードをして吹き飛ばされそうになるが踏ん張る。

「なかなか。」

「つちーん？」

黒いフードをかぶった人物を見てしまい、彼女は相手から放たれるメダル攻撃に今気づいた。

「しまー！」

【ソイヤ！メロンスカツシュ！】

「であああああああああああ!!」

斬月が無双セイバーを使いメダルを次々に切り裂いていき、クリスの前に立つ。

「貴虎にい！」

「クリス無事だな？何かに気づいたみたいだな。ここは私に任せろ！」

「すまねえ!!」

クリスはそう言い、斬月は無双セイバーを構える。

「お前達は何者だ！」

「我らはオートスコアラ―・・・私はレイアと申します。」

「人形か・・・（クリスが、救出をするまで時間稼ぎをするとしてよう。）」

無双セイバーのグリップを引き玉を放つ。相手はトンファーを生成をしてみせかけるが、斬月は接近をして無双セイバーを振り下ろす。

「ぐ!!」

「はああああああああああああ!!」

連続した斬撃が相手のボディを切りつけていく。

「なんだ!」

「何!」

クリスの声が聞こえたので、振り返ると彼女のギアが解除されたのを見てこのノイズが普通のじゃないと思いだした。

彼はすぐに相手に蹴りを入れてからクリスに襲い掛かろうとしたノイズに対して接近をして無双セイバーで切り裂いた。

「貴虎にい・・・」

「この数・・・」

斬月はメロンデイフェンダーと無双セイバーを構えて謎のノイズ達の数が多いのでどうしたらいいのだろうかと構えていると鎌が飛んできたので何事かと見ていると切歌がイガリマを纏い現れる。

「切歌参上デース!!」

「切歌、クリスを任せていいか?」

「了解デース!!」

斬月は切歌にクリスを任せるとシン・カチドキアームズを出してロックを解除をする。

「カチドキ!ロックオン!ソイヤ!カチドキアームズいざ出陣!エイエイオー!」

カチドキアームズに変身をして彼は火縄甜瓜銃を構えると大剣モードではなくジュウモードへと構えてピッチを上げてスクラッチをする。

「は!!」

マシンガンモード形態へと変わり弾丸が連続して放たれて謎のノイズ達を次々に撃ち抜いていく。

さらにピッチを下げて火縄銃モードへと変えてから弾を連続で放ち謎のノイズを倒していく中、クリスは切歌に助けられたばかりじゃなく、貴虎に負担をかけさせてしまったことにいらついていた。

(あたしが、あたしがすっかりしていれば……貴虎にいの負担をあたしが……)

「どうやらここまでのようですね。また会いましょう仮面ライダー。」
レイアは撤退をして、アルカ・ノイズと呼ばれる存在も一緒に消えた。斬月はドライバーを外して変身を解除をする。

「オートスコアラ……アルカ・ノイズ、そうかキャロルの事件……」

貴虎はこの時期の事件のことを思いだして、クリスや翼のギアが破壊されたことを思いだした。

「いずれにしても、敵は強大だ……何が起こるのかわからない。これを使うときが来たかもしれない。」

彼は極ロックシードを懐から出して夜明けの朝を見た。

極ロックシード

呉島コーポレーションの社長室、貴虎は自分の椅子に座りながら仕事をこなしていたが、彼の机の上には一つのロックシードが置かれていた。

極ロックシード、これを使えば斬月は極アームズという姿に変身することができる。だが、これを使うということは人間をやめないといけないのか?と思いつながら、使うのをためらってしまう。

「キャロル及びオートスコアラーの出現、そしてアルカ・ノイズが現れてクリスと翼のギアが破壊された。アルカ・ノイズは斬月でも倒せる。一体どうしたらいいのだろうか。」

貴虎は椅子で座りながら考え事していると藤果が現れた。

「失礼します社長、弦十郎さん達がやってきたのですがいかがでしょうか。」

「わかった通してくれ。」

藤果は許可を得たので、弦十郎達を社長室に通すため移動をする。彼はソファアールで待っているか?

「貴虎にいちやーん!!」

「な!?!どあ!!」

調と切歌が誰よりも貴虎に抱き付いてきたので、彼は驚いており奏が二人にゲンコツをお見舞いさせる。

「お前ら! 貴ちゃんになに抱き付いているんだよ!!」

「..... 貴虎兄さんに告白をした奏さんだけには言われたくありません。」

「その通りデース!!」

「うぐ」

二人に言われて奏は苦笑いをしている中、弦十郎がごほんといい、貴虎は椅子に座るように言うが調と切歌が抱き付いたままなのを除けば.....

「さて弦十郎さん、今のところイチイバル及びアミノハバキリがああ謎の敵にやられてしまった。」

「ああそのとおりだ。貴虎君の斬月はあの謎のノイズを倒すことができると言っていたが……」

「その指揮をしていた謎の人形、奴らはオートスコアラーと名乗っていた。いずれにしても奴らのことを考えますと色々問題ですね。」

貴虎と弦十郎が話をしていて、切歌と調は色んなゲームが置いてあるなと見ている。ちなみに今回弦十郎についてきたのは奏、調、切歌の三人で奏はため息をついた。

「お前らな……貴ちゃんの家と一緒に住んでいるんだろうが。」

「まあそうなんですけど……」

「なんといいですかークリス先輩やセレナもいるので、何とも言えないのデース。」

「貴虎兄ちゃんのライバルが多いのですけど!!」

「あはははは……」

奏も貴虎を狙っている人物が多いので苦笑いをしてしまう。いずれにしても今回現れた敵のこともあり、奏自身も今の自分がどこまで戦えるのだろうか?と思いつつながら貴虎を見ていた。

(また、貴ちゃんが傷つくのを見ているしかできないのか?あの時もあたしは……)

彼女は自分の手を強く握りしめて、貴虎がまた傷つくのを見ているしかないのかと……思ってしまうくらいに自分が弱い感じがしてしまう。

「貴ちゃん……」

発電所を守れ!

貴虎side

それから数日後、響ちゃんの GANG ニールが破壊された。敵のオートスコアラーの攻撃を受けて彼女自身も負傷をしてしまうダメージを受けてしまい、現在 GANG ニール、アメノハバキリ、イチイバルの改修作業が開始されている。

私は何をしているのか? 潜水艦の外に出ており腰にゲネシスドライバーを装着をして待機をしている。

「さて、そろそろ現れると思うが……来たか、変身!」

【メロンエナジーアームズ】

そう斬月・真に変身をして現れたアルカ・ノイズに対してソニックアローを構えて発砲をする。

敵の狙いが発電所なのはわかっているが、兵士たちの武器でアルカ・ノイズを倒すのは不可能と判断をしてこうやって外で待機をしてアルカ・ノイズと戦うために交戦をしている。

「は!!」

連続で放ったソニックアローの矢が命中をしてアルカ・ノイズを倒すとゲネシスドライバーを押しこむ。

【メロンエナジースカッシュ!】

「ああああああああ!!」

ソニックアローの斬撃でアルカ・ノイズたちを倒していくが、数が多いのは変わらないか……これは少し厄介かもしれない。

貴虎side終了

「貴ちゃん!」

「どうして貴虎兄さんが……」

潜水艦の中にいる装者達は、斬月・真がアルカ・ノイズ相手に交戦をしているのを見て、奏は急いで外へ飛びだす。

「奏!!」

「切ちゃん。」

「デース。」

二人もこっさりとは抜けだして、シウルシャガナ、イガリマを持ちだして出動をした。外ではアルカ・ノイズと交戦をする斬月・真に攻撃が放たれたので彼ははじかせるとオートスコアラーの一人が現れる。

「お？仮面ライダーカゾ？」

「オートスコアラーか？」

「そうだゾ！ミカっていうんだゾ！」

「ならお前相手にはこっちの方がいいかもしれないな。」

彼は戦極ドライバーに変えた後シン・カチドキロックシードを装着をした後別のロックシードをとりだしている。

「……………」

「なんだゾ？それは？」

「見せてやる。斬月の真の姿をな……………」

「フルーツバスケット！」

ロックシードをセットをして展開させた。

「ロックオープン！極アームズ！大大大大將軍！」

カチドキアーマーがパージされて、銀色のボディを纏った仮面ライダー斬月 極アームズが誕生をする。

そこにガングニールを纏った奏がアルカ・ノイズを倒して着地をする。

「貴……………ちゃん……………その姿は……………」

「奏、私に任せろ。」

彼は奏の頭を撫でた後腰の極ロックシードをまわす。

「ウォーターメロンガトリング！」

左手にウォーターメロンガトリングが現れて周りのアルカ・ノイズに発砲をして撃破した。

「レモンレイピア！」

右手にレモンレイピアを装着をしてアルカ・ノイズを次々に突き刺して撃破していく。そこにイガリマ、シウルシャガナを纏った調たちが到着をした。

「た、貴虎お兄ちゃん!？」

「その姿は……………」

「好きアリだぞ!!」

「!!」

【アツプルリフレクター!】

二人の前にアツプルリフレクターを発生させた後、ロックシールドをまわす。

【ドンカチ!】

「おら!!」

「ぬお!?!」

蹴りを入れたドンカチが飛んできてミカに命中をして、アルカ・ノイズ達が兵士たちに襲い掛かろうとしているので三人が向かっていくのを見た後、彼はミカの方を見ると彼女の両手からカーボンロッドが射出されたのでロックシールドをまわす。

【大橙丸!】 【ブラッド大橙丸】

二つの大橙丸を召還をしてカーボンロッドをはじめさせていく、そのまま接近をしてミカの胴体を切りつけてダメージを与えていく。

後ろの方を見てアルカ・ノイズ達が調たちを襲っているのを見てロックシールドをまわす。

【無双セイバー!】 【ロックオン! 一・十・百・千! イチゴチャージ!】

「はああああ!!」

クナイバーストが発動をしてアルカ・ノイズ達に大量のイチゴクナイが命中をして撃破した。

彼は振り返りマントではじかせるとキャロルが現れた。

「お前が、今回の首謀者ってことか!」

「アーマードライダー……まあいい、お前の相手をしてやろう。」

「おっとあたしたちが相手をしてやるぜ?」

「ふん邪魔だ、お前達では俺に勝つことなど不可能だ!!は!!」

「いかん!」

【メロンディフェンダー!】

「ぐううう!!」

キャロルが放った錬金術の攻撃をメロンディフェンダーでガードをする。あまりの威力に後ろの方へと下がってしまう。

「貴ちゃん！」

「さあ……来たか。」

ミサイルが放たれて彼女は後ろの方へと下がると改修作業が終わったクリスと翼が駆けつける。

「お待たせしました！」

「待たせたな貴にい!!」

「ああそうだな。」

貴虎はそのままバナスピアーを召還して三人は構える。

「奏、月読、暁、ここは私達に任せろ！」

「けどよ。」

「いいから任せてくれ！」

「わかったよ。ほらお前ら撤退だ。」

「了解デース！」

「頑張ってください。」

三人は撤退をして、斬月はバナスピアーをつきつける。

「さあ覚悟をするがいい。」

「こいー！」

激闘キャロル!

「はああああああああ!!」

翼が持っているギアを構えて振り下ろす、キャロルは防御壁を発生させてガードをすると斬月がバナスピアーを突き刺そうとする。

彼女はそれに気づいてダウルダブラの弦を纏わせてドリルにしてバナスピアーと激突させる。

「ぐあ!!」

「貴にい!!」

クリスはミサイルを発射させてキャロルはそれを全て弦で落とす。

【ドリノコー】【ドンカチ!】

爆発の中斬月が現れて、二つの武器を振り下ろした。だが彼女は斬月が振り下ろした攻撃も防御壁で受け止めてはじかせて吹き飛ばす。

「ぐ!!」

「貴虎兄上!」

「先輩!!」

「.....ああやろう雪音!」

2人は決意を固めてイグナイトモジュールを使おうとする。

「イグナイトモジュール抜剣!!」

イグナイトモジュールが抜剣をするが、二人の様子が違うのを見て斬月は彼女達がトラウマに捕らわれていると判断をしてレバーをまわしていく。

【火縄大橙DJ銃!】【火縄甜瓜DJ銃!】

二丁の銃を構えて斬月は発砲をキャロルを吹き飛ばした。彼女は起き上がり斬月を睨んでいる。

「くそ、覚えていろ!!」

キャロルは転移石を割り、撤退をしたのを見て斬月はゆっくりと歩いて翼たちのところへ膝をついた。

「大丈夫か?」

「申し訳ありません兄上.....」

「あ、あたしたち.....」

「気にするな。」

斬月は変身を解除をして、貴虎は今のところ体に異常はないな？と思いつながら、極ロックシードを改めて見てから懐にしまう。

これからの戦いは極アームズを使わないと突破ができない可能背が高いな？と思いつ、自分は呉島 貴虎の姿をしているが、彼とは違い転生者なのだからな？と思いつながら撤退をする。

貴虎 side

発電所を何とか守ることができた私達、イグナイトモジュールの抜剣はやはり翼達のトラウマが原因だろうな、だが今の私では彼女達にどうしたらいいのかわからない。

現在、会社の方へと戻り呉島コーポレーションの新しいゲームを何にしたらいいのだろうか？と考えているところである。

「うーん、今度はどのようなゲームにした方がいいのだろうか？ダンジョン系にしてアーマードライダー達を育てる？いや、それか斬月達の格闘ゲームを作った方がいいのだろうか？悩むな……」
色々アイデアが出ているが、ピンとくるものがない。うーん……会社を後にして家の方へと帰ってクリスマスやマリア達も一緒なのでミュ達は今だに緊張をしている。

私は帰った後椅子に座ると調と切歌が私に抱き付いてきた。

「お前達……」

「たまにはいいでしょ？」

「そうデース、主に奏先輩はずるいデース。」

「……」

まあ奏とは幼馴染だから、しかたがないだろ？それに再会をしたのだったて私が社長として着任をしたある番組で再会をしたぐらいだからな？

それにシンフォギアとして戦う奏を見た時にも斬月で戦っていたしね。

「……」

「兄さん？」

「どうしたの？」

「何でもない、少しゲームのアイデアが出なくて困っているんだよ。」

「『ゲームのアイデア?』」

「もしかして、新作でございますかお兄様!!」

「うわー、我が妹が目を光らせている。そういえばミュが目を光らせているからな……この子はゲーム大好きっ子だったのを忘れていたよ。」

「ちなみに景子もうちで住んでいる。いつのまにかね? まあ私は気にしないし、気にしないのさ。」

「……………」

「次のキャロルの行動はなんだったかな? やばいな、前世のことが失いかけている気がする。」

「シンフォギアのことばかりがなくなっているような……………ずるいよね? ってことか、ちくしよおおおおおおおおお!!」

プロジェクトドルズの進歩

貴虎 side

キャロルを何とか退かせることに成功をした私達だが、呉島コーポレーションでは新たなゲームのアイデアが出てこないなので、私はプロジェクトドルズ達のダンス指導を見ていた。

「……………」

全員が私に来ていてるつてのもあり、いつも以上にやる気があるのを感じている。主に我が妹たちが……………ミサキやミュの奴、張り切っているな……………やがてダンス指導が終わり彼女達は休憩をしていた。

「やあ皆、お疲れ様。今日はいきなり来てすまなかったね？」

「いえいえ、社長さんも大変ですね？」

「そうか？」

「はい、私たちの社長をしながらゲームコーポレーションの社長もなされているので、お疲れじゃないのですか？」

「はっはっはっは、君達が頑張っているのを見ているとな、私も元気になるっただけ言っておくよ」

「……………本当……………ですか？」

「……………」

あーミサキやミュは、私が新月として戦っているのを知っているのと同じっと思われているな、まあ現在、弦十郎さんが私も仕事などがあるのでよほどのことがない限りは呼ばないようにしているみたいだ。

まあ、奏たちも必死になっているので、こうして主な方での仕事に集中をすることができるようになっている。

さて、どうしたものか？プロジェクトドルズ達の新メンバーなども今どれくらいになっていたかな？

ああ、第二段階の合宿をしているのだったな？すっかり忘れていたよ。

「に……………じゃなかった社長どうしたのですか？」

「…………君達の新メンバーが今合宿をしているなーと思ったただけだよ。」

「私たちの新メンバーね？どのような子が入るのか楽しみだわ！」

「そうっすねうへへ…………あの社長さん、新しいゲームの方はまだっすか？」

ヤマダ…………お前もミュと同じだからな、とはいったものの…………新しいゲームのアイデアがなかなか出てこないんだよね。

ふーむ、エイリアンを倒すアイドル達？いやダメだな…………どうしたものかな？エイリアンってのはいいと思うがシューティングゲームはバンバンシューティングがあるが、コントロールを使ったゲームは発表をしたことがないな、アイデアなどがだんだんと浮かんできたな。

「……………」

「しや、社長さん？」

「ん？ああすまないね。色々アイデアが浮かんできたのでね？さて、いずれにしてもプロジェクトのコンサートを発表もしないといけないね？」

「私達のコンサートですか？」

「ああそうだ、ある場所を借りてやることを決定をした。今から二か月後にな。その間、皆も仕事もあり忙しいと思うが頑張つてほしい。ちなみに、今回のコラボとしてツヴァイウイング及びマリア・カデンツヴァアナ・イヴを呼ぶことにした。」

「二「ええええええええええええ!!」二」

全員が叫び、貴虎はニヤリと笑っておりミサキ達は、まさかツヴァイウイング及びマリア・カデンツヴァアナ・イヴと一緒にやるなんて思ってもいなかったのでびっくりをしている。

そして、ミサキとミュと共に家の方へと帰る車の中…………「まさか兄さん、本当にツヴァイウイングやマリアさんと一緒にやるのですか？」

「ああもちろんさ。」

「びっくりをしたよお兄ちゃん、ってか本当に本当？」

「ああそのとおりだ。嘘は言わないよ。」

彼は事件を解決をした際に、ツヴァイウイングらと一緒に歌を歌わせようと決意を固めていたのだ。

襲撃を受ける貴虎

シンフォギア装者達はイグナイトモジュールを使用をして、オートスコアラーと交戦をして撃破している頃、貴虎は会社から家へと帰ろうとした時車に蔦が伸びてきているのを見て腰に戦極ドライバークラスを着用して飛び出した。

「坊ちやま!!」

「じいは先に帰るんだ!!」

蔦を無双セイバーで切り裂いて着地をする。彼は前の方を見るとヘルヘイムの植物がクラックから発生をして自身に襲い掛かってきた。

「こいつはいったい?」

彼は無双セイバーを構え直して次々に現れる蔦を切っていく。

「ヘルズスカッシュユー!」

「!!」

メロンデイフェンダーでガードをしたが威力が高かったので後ろの方へと下がってしまう。彼は前の方を見ると影松の色を紫色に変えたような槍を持っているアーマードライダーが立っていた。

「あつはつはつは、まさか呉島 貴虎……あなたがこの世界にいるなんてね思ってもいなかったわ。まあいいわ……まずはお前を倒すだけよ!!」

相手は持っている武器を構えて斬月に襲い掛かってきた。彼女が放つ槍をメロンデイフェンダーではじかせて、無双セイバーで振り下ろした。

だが相手は躲して蔦を発生させて彼の体を巻き付けようとしたのを見て、シン・カチドキロツクシードを起動させる。

「カチドキアームズ! いざ出陣! エイエイオー!」

カチドキアームズに変身をして蔦を鎧で破らせると着地をして火縄甜瓜DJ銃を無双セイバーと合体させた大剣モードにして構え直す。

相手は持っている槍を突き刺そうとしたが、彼は冷静に大剣モード

ではじかせるとそのまま胴体に一閃をしてダメージを与える。

「く!!」

「……………」

彼は極ロックシードを構えてシン・カチドキロックシードの横部にセットをしてまわす。

【ロックオープン!極アームズ!大大大!大將軍!!】

鎧がパージされて仮面ライダー斬月極アームズに変身をして、相手は植物を使い攻撃をしてこようとしたが……………極ロックシードをまわす。

【ドリノコ!】【ドンカチ!】

ドリノコを先に召還をして蔦を切り裂くと、飛びあがりドンカチをキャッチをして頭部に叩きつける。

「が!!」

【影松!】【影松・真!】

二つの影松をキャッチをして二刀流で相手のアーマードライダーに攻撃をしてダメージを与えていく。

「く!なんだその力は!!」

「……………」

彼は武器を捨てて腰のカツティングブレードを三回倒す。

【ソイヤ!極スパークング!!】

「うああああああああああああああ!!」

相手は突撃をして槍を振るうが、彼はカウンターで蹴りを入れて槍をはじかせた後左足で蹴りを入れた後連続した蹴りを放ち着地をする。

「ば、馬鹿な……………この私が!!またしても!!」

「……………」

相手は消滅をして、斬月はじーつと見ていた。

「貴ちゃん!!」

振り返ると奏、景子が到着をして彼は変身を解除をする。

「二人か……………」

「大丈夫?あなたが襲われているって連絡が来たのだけど……………」

「…………大丈夫だ、相手は撃退をした。オートスコアラールの方は倒したみたいだな？」

「…………貴ちゃん？」

(どうも嫌な感じがするな、しかしこの感じは……………)

キャロル出撃！追撃せよ装者達！！

貴虎side

謎のアーマードライダーを撃破した私は、現在装者たちと共にキャロルと最後の戦いをするため現場に急行をしていた。

メロンアームズを纏い私は仮面の奥でキャロルとの最後の戦いをするのだな？と前を向いた。

「貴ちゃん、大丈夫か？」

「問題ない、奏……勝つぞ」

私たちは前を向くと、キャロルがすでに待っており私は無双セイバーを構える。さあラスとの戦いだ！

「行くぞお前達！」

「はい！」

「ああ！」

「おう！！」

「ああ！！」

「ええ！！」

「よっしや！！」

「いくデース！」

「行くよ」

「参りましょう！」

「さあ行くわよ！！」

「かかってきやがれ！！シンフォギアども！！」

貴虎side終了

「くらえ！！」

キャロルから放たれた糸を鎧武と斬月が前に立ち無双セイバーを抜いて切り裂くと、クリスがミサイルを生成して発射させた。

だが、キャロルはそれを糸で切断させると奏、翼、マリア、セレナが飛びあがり四つのアームドギアを振るう。

錬金術を使いガードをすると、斬月がロックシードを変える。鎧武も同じように変えた。

【パイナームズ粉碎デストロイ！】

【バナナアームズ！ナイトオブスパアー！】

鎧武はバナナアームズ、斬月はパイナームズへと変身をしてパイナイアンを振るいキャロルの錬金術を粉碎をした。

「ぐ!!」

【ソイヤ！バナナスパーキング！】

「でああああああああ！」

バナスピアーを地面に突き刺すとバナナ型のエネルギーが発生をしてキャロルに襲い掛かる。

「甘い!!」

【ロケット ドリル リミットブレイク！】

【ライダーロケットドリルキック!!】

ライダーロケットドリルキックと共に切歌、調も突撃をして三人の攻撃がキャロルを吹き飛ばした。

「ぐうううううううううううううう！」

「よせキャロル、お前もわかっているはずだ。今のお前の力は消耗をしている。これ以上戦えばお前自身も！」

「わかった風にいうな!!俺は奇跡を壊して、そしてお前達を壊してやる!!うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

斬月を吹き飛ばして、奏は彼を支える。

「貴ちゃん！」

「大丈夫だ。」

キャロルの姿が変わっていき、巨大なライオンの姿に変身をしたのを見て響達は現在エクストライブモードになることができない。

「シンフォニックが足りない！」

「.....」

【フルーツバスケット！】

「貴にいい!!」

彼は立ちあがり、シン・カチドキロックシードをセットをした後極ロックシードをセットをしまわす。

【ロックオープン！極アームズ！大大大大將軍！！】

極アームズへと変身をして、彼はチラツと全員の方を見た後に前を向いた。

「貴虎兄上！」

「貴にい、何をする気だ!!」

「キャロルを止める」

【バナスピアー！大橙丸！】

右手にバナスピアー、左手に大橙丸を装備をしてキャロルが変貌をしたライオンに対して突撃をする。

ライオン型は前足の爪で斬月に攻撃をしてきたが、彼はそれをバナスピアーではじかせると胴体で大橙丸で切りつけた。

「ぐおおおおおおおおおおお！」

「お前が、自爆覚悟でそのような姿に変身をして戦っている。だが私は彼女達を失いたくない！だからこそ私は戦う!!」

彼はバナスピアーを投げつけると、カッシュブレードを倒す。

【ソイヤ極スパークキング！】

「であああああああああああああああああ!!」

ライオン型は彼を倒す為口から強大なエネルギー砲を放ち彼の技と激突をする。

「ぐううううううう!!」

「あたしたちができることはないのかよ!!」

「歌いましょう！」

「え？」

「歌を？」

「そうです、貴虎さんに届けるんです!!」

響の言葉に全員が歌を歌いだした。斬月はキャロルが変身をしたライオン型のエネルギー砲の攻撃を受けてこのままではまずいと思っているとシンフォギアロックシードが光り出した。

「これはー！」

【シンフォギアアームズ！奇跡の歌オンステージ!!】

極アームズが解除されて、シンフォギアアームズへと変身をして奇

跡の歌によってエクストライブモードへと変身をしてそのままカットイングブレードを倒す。

【ソイヤー！シンフォギアスパークング！】

「うおおおおおおお！これが！奇跡の力だああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ライオン型のエネルギー砲を粉碎をしてそのまま口から侵入をして、貫通をして斬月が現れて彼は着地をする。

ゆつくりと立ちあがり背中の翼が閉じられて彼は振り返るとキヤロルが変身をしたライオン型に罫が入っていき爆発が起こった。

すると光が収まっていき、シンフォギアロックシードを閉じて変身を解除をする。

「……………」

「貴ちゃーん！！」

彼は声をした方を振り返ると奏たちが走っていき、彼女が一番に飛びついてきて彼は地面の方へと倒れてしまう。

「ごは！！」

しかも、貴虎は斬月を解除をしているのに対して……………奏はガングニールを纏ったままなので、つまりどうということか？

「Ω／＼。）チーン」

「おーーい！！」

「奏さーん!?!」

「何しているデース!?!」

「やっちゃったああああああああああああああああああ！貴ちゃーん！！」

この後、彼は運ばれて病院の方へと入院をすることになった。その隣にはエルフナインが入院をしているので彼はそろそろか？と思いつながら黙ってみているとボロボロのキャロルが現れた。

「うう……………わた……………」

すでに彼女は限界を迎えており、エルフナインを見てから彼女に自分の体を託すことにして貴虎はその様子をちらつと見ながら眠りについた。

第四章 クウガブレイズ 謎の敵現る

貴虎 side

キャロルとの戦いから数週間が経ち、私は現在ツヴァイウイング及びマリアとのコラボをするための準備を進めていた。

場所などの確保、そして練習時間などもプロジェクトールズ達の指示をするなど色々頑張りがら過ぎていた。

アルカ・ノイズの出撃に対しては装者達で交戦してもらっているため、私はこうして鍛え続けながらも戦いの方は奏たちに任せている感じだな。

私はちらつと引きだしを引っ張り、極ロックシードを見ていた。今のところ味覚がないなどは感じていない。

「だが、これからの戦いでは斬月・真では苦戦をする可能性が高いな……ん？通信が来ている？はい貴虎です」

『貴虎君、仕事をしているところすまない、実はこちらの方で謎の時空反応が発生をしたんだ。翼たちは仕事、響君たちは学校で迎えない』
「わかりました。こちらでも仕事が一段落をしたので現場へ急行をします。」

『すぐにほかのメンバーも駆けつけられるようにするから貴虎君、無理だけはしないでくれ』

通信が切れて、景子と総司が来るってことか？私は斬月に変身をして先に現場へと急行をするため向かっていた。

そして現場に到着をして、辺りを警戒をしていると前の方から強烈な光線が放たれてメロンディフェンダーでガードをするが、逆に吹き飛ばされてしまった。

「なんだ？」

「ぐおおおおおおお……」

そこには歪んだ化け物、いや怪獣と言った方がいいだろう。おそろくメロンディフェンダーを吹き飛ばすほどの威力を持っている怪

獣つてことになるだろう。

無双セイバーを抜いて構え直す。

「どこまでやれるかわからないが……行くぞ!!」

斬月side終了

一方総司と景子の二人は急いで向かっていた。フォーゼ及び鎧武に変身をして斬月事貴虎が交戦をしている場所へと急行をする。

「間もなくですねー!」

「来るわよ!!」

前の方から砲撃が放たれて、二人は回避をする。そこには先ほど貴虎が交戦をした怪獣が二体現れて、彼女達を行かせないように立っている。

「いい度胸をしているわね?総司君、さっさと倒して突破をするわよ!」

「はい!!」

2人はロケットモジュールと無双セイバーと大橙丸を構えて二体の怪獣に交戦をする。一方斬月は?

「ロックオン!ソイヤ!ドリアンアームズ!ミスターデンジャラス!」

ドリアンアームズに変身をしてドリノコの二刀流で相手が放つ攻撃をふさいでいた。だが相手の尻尾が突然変形をしてドリルのような尻尾に変わり攻撃をしてきた。

彼は急いでドリノコでガードをするがその力にドリノコが吹き飛ばされてしまう。

「ぐ!!」

「ソイヤ!ドリアンスカッシュ!」

「であああああああ!」

頭部状にエネルギーをためて放たれた攻撃が命中をする。だが相手は命中させたがすぐに活動を再開をして斬月に向かって歩いていく。

一方装者達も貴虎達が交戦をしていると聞いて、奏は急いで飛びだしてガングニールを纏い現場に急行をしていた。

「貴ちゃん！貴ちゃん!!」

「奏！待って!!」

「待ちなさい奏!!」

翼とマリア、セレナの三人は急いで追いかけてしようとするが、奏がものすごいスピードで動くので、三人は追いつけない状態である。

一方貴虎は吹き飛ばされてビルにめり込んでしまう。

「が!!」

怪獣は咆哮をして、彼にとどめを刺そうと口にエネルギーをためている。斬月は逃げようとしたがめり込んでしまったのか動かすことができない。

「もはやここまでなのか?」

彼は諦めようとした時、怪獣の体に突然として鎖がまかれているのに気づいた。

『ぎやおおおおおおおお!!?』

「無駄だ、俺の鎖はそう簡単に壊せないぞ」

「お前は!」

斬月は止めた相手を見て驚いている。

「キャロル!?なぜお前が……」

「ん?あーそういうことか、この世界の俺は、お前達と戦い倒されたってことか……悪いが、俺はお前が知っているキャロルじゃない。さてこの怪物を片付けないとな」

【アークルライザー!】

「ベルト?」

「さあ見せてやろう。俺の力をな!変身!」

【Alchemy up!MIGHTY OF burningheart!KUGA BLAZE!FLAME!】

彼女に炎が纏われていき、仮面ライダークウガブレイズと呼ばれる姿に変身をした。斬月は驚いているが彼女は専用武器アルケミーブレイドガンを構える。

「さあ始めようか!!」

現れしクウガブレイズ!

連絡を受けた貴虎は、メンバー達が動けない状況だったので先に現場に到着をして交戦をしていた。

だが、化け物の攻撃を受けて斬月は吹き飛ばされてピンチになってしまう。そこに現れたのは倒したはずのキャロルだった。

彼女は持っているベルトを装着をして、仮面ライダークウガブレイズと呼ばれる姿に変身をする。

「ぐおおおおおおおおおおおおお!!」

化け物は咆哮をしてキャロルが放った鎖を破壊をして突撃をしてきた。彼女は飛び超えると右手に持っているアルケミーブレードガンをガンモードへと変えて発砲をする。

「ぐお!!」

「.....」

連続した弾丸が相手のボディに命中をさせると、そのまま接近をしてブレードモードへと切り替えて連続した斬撃を浴びせる。

「はああああああああ!!」

「ぐお!!」

「これで決める!」

【Maximum!trance up!FLAM!GUN break!】

再びガンモードへと変えたブレードガンを構えると炎の弾がチャージされた弾丸が放たれて命中させて燃やし尽くす。

「無駄だ、俺の炎は.....お前の体を燃やし尽くす!」

「ぎやおおおおおおおおおお!!」

「す.....すい.....」

斬月は壁から抜けだして、膝をついていたがクウガブレイズが近づいて彼の体を回復させる。

「ほーう、まさか異世界の戦士からキャロルがやってくるとはね」

「!!」

2人は声をした方を見ると謎のベルトを装着をした黒い戦士が

立っていた。彼は右手に持っているガトリング砲を二人に対して構えて発砲をする。

2人は回避をして斬月は接近をして無双セイバーを振り下ろす。相手はガトリング砲でガードをするとクウガブレイズがアルケミーブレードガンを構えて発砲をするが、斬月を蹴り飛ばすと左手にビームサーベルを発生させてアルケミーブレードガンの弾を切り裂く。

「何!？」

【ロックオン！バナナアームズ！ソイヤバナナスカッシュユ！】

「であ!!」

バナスピアーからエネルギーを纏わせた攻撃が放たれて相手の胴体に命中させて吹き飛ばす。

だが相手はすぐに重力装置が発動をして体をすぐに立ちあがらせる。

「な!？」

「なかなかいい攻撃だな？我も少しだけ本気を出そうかな？」

すると相手の姿が見えなくなり、斬月が吹き飛ばされたのを見てクウガブレイズは別の姿に変身しようとしたが……すでに相手が目の前に現れて蹴りを入れて吹き飛ばされてしまう。

「が!!」

「ふむ少しだけ本気を出してしまったようだな。まあいいさ……」

【ランチャーON】

【イチゴチャージ！】

「!!」

放たれた攻撃を相手は受けて、鎧武達が到着をした。

「貴虎にい!!」

「大丈夫!？」

「二人か……」「ほう、まだ仲間がいるとはな、どうやら情報を修正をしないといけないようだな？」何?」

煙が晴れると、無傷で立っている謎の戦士がいた。四人は構えているとシンフォギア装者達も到着をしたので、相手は不利だと判断をする。

「まあいいさ、今日のところは撤退をさせてもらうよ」

「お前は一体!!」

「仮面ライダー……スペルガンだ」

スペルガンと名乗った敵はそのまま離脱をして、全員が解除をしたのを見て響が叫ぶ。

「キャロルちゃん!」

「てめえなんで!!」

「落ち着け、確かにキャロルだが……こいつはおそらく別世界からやってきたのだろうな」

「別世界?」

「そういうことだ、だから俺はお前達のこと知らないってことだ。それにあの敵……やはり、俺の世界で暴れたやつで間違いない。」

「奴が?」

「スペルガンって名乗っていましたね?」

「いずれにしてもあいつを倒さないと厄介だぞ?」

「一緒に来てもらっても大丈夫か?」

「いいのか?俺は最近まで暴れていたみたいだけだよ」

「大丈夫だろうな」

一方その様子を見ている一人の人物がいた。

「つたく、この世界にあたしが派遣されることになるなんてな、一兎の野郎……それにしてもスペルガンか……キャロルの世界で暴れてからこの世界へとやってきたか……やれやれ」
一人の人物は持っているガラケーのようなものをしまい、ため息をつきながら降りた。